

神奈川県教育文化研究所

所 報

1990

# 90年代へ向けて更なる発展を

理事長 繁 里 昭



神奈川県教育文化研究所（教文研）は設置されて10年の年輪を刻みました。その間、前理事長をはじめ理事の方々、宮島肇初代議長を中心とした評議員の方々のご尽力により、教文研は充実・発展してきました。私は教文研関係者の皆様に心から感謝申し上げます。特に89年参議院議員として新任務に着かれた小林前理事長及び病氣治療に専念されている宮島元議長に対し、教文研誕生とその活動の先頭に立ってこられたご苦勞に感謝申し上げると共に、ご功績について心より敬意を表します。

90年代、世界は冷戦を終結したかのように、米・ソの軍縮の交渉は進められ、東西ドイツの統一の動きが加速し、東欧諸国の国民主導で自由と人権をとりもどすことを中心とした民主化が進行しつつあり、西欧が従来の国境概念を変えるEC改革を進めるなど、大きな変革が現実の問題となりつつあります。また、アジアにおいても、モンゴル、ネパールで民主化運動が起り新しい時代の到来を予測させます。

日本の状況は、貿易摩擦問題など経済、産業の構造の変革が強く求められ、一方では政界の再編問題もささやかれています。労働界は「ゆとり、豊かさ、社会的公正」を軸とするナショナルセンター「連合」が官民800万組織として登場し、新しい労働運動の展開など、変革の時代に入っています。県内においても、ローカルセンター「連合神奈川」が約50万の働く仲間を結集し発足しました。一方神奈川県では「活力と魅力あふれる明日へのかながわ・くにづくり」をめざして、「第2次新神奈川計画」を87年度に発足させ、本年度はその実施計画及び地域計画によって、時代の変化に対応すべく改革をすすめることを明らかにしています。ひるがえって、教育現場は、新学習指導要領の批判・克服、学校五日制実現、教職員定数改善、入試選抜制度の改善、教育費の父母負担の軽減などの課題が山積しています。

こうした状況で、これからの教文研は、どのように運営され、父母、県民、教職員の期待に答えていくか、90年度は大切な節目の年といえると思います。教文研の規定第3条の「県民の立場にたって民主教育と文化を確立するための理論的並びに実証的研究と全県的に教育と文化活動を展開し、県民の教育文化向上に寄与する」という目的を全ての教職員で再確認したいと思います。また、父母・県民との連帯を一層密にするため、「神奈川教育を推進する県民会議」、「連合神奈川」及びPTA組織の運動と教文研運動の結びつきを多く実現させることが大切だと思います。さらに、教文研と学校が太い綱で結ばれ、教職員から教文研活動に数多く提言されることを期待します。

最後に、教文研活動が第2次新神奈川計画の見直しに提言できることを期待します。同時に、「翔べ！神奈川の子どもたち」の10の目標、50の提言、及び「神奈川教育を推進する県民会議」が提起した「今こそ県民の英知で行動計画を」について十分検討し、積極的に対応していただきたいと思います。教文研の一層の活躍をお願いし、挨拶とします。

# 市民生活の助走の 場としての公教育を



研究評議会議長 金 原 左 門

## 個人と社会の関係喪失の実情

今日、日本が抱えこんでいる深刻な問題はなにかと問われれば、わたしは、そくぎに“社会関係の解体”現象であると答えることにしている。“市民制社会関係”の崩れといってもよいし、世の中の共同性の喪失といいかえてもよい。

この実相は、観念の世界であれこれ詮索してもつかめないし、マス・メディアが提供する数々の情報だけでも理解しきれないものが残る。社会の自律的な動きのにぶさを、わたしたちが実感できるのは、日常的な経験を媒介にした場合が多い。はやい話が、たとえば昨年の秋からこの3月にかけて、わたしは地元の自治会長として関係区域の集中浄化槽問題にとりくみ、秋の臨時総会、春の総会で問題点を列挙し解決のための処方箋を提示したところ、反応がいま一つにぶいのがくぜんとしたことがある。浄化槽問題は「生活の基本であるから」と、積極的に関心を寄せた人もいないわけではないが、それでも20～30%ぐらいにすぎない。今日の個人と社会とのかかわりあいの“いびつさ”がここにも縮図になってあらわれている。

浄化槽の話が続けて恐縮であるが、公共下水道の普及率ゼロの場所では、集中浄化槽問題は関係住民の死活の鍵となっているといっても過言ではない。だいいち、前からすこしおかしくなってきた浄化槽のからくりを明らかにし機能上の問題点を洗いだすのは、大変やっかいである。それだけに、あらゆる機関からデータと知識を集め、それを身につけて業者の実地検分に立ち会って議論をかわし修復のだんどうを模索する以外に方法はない。当時、わたしは、勤務先の大学でもやっかいな問題を処理しなければならなかったもので、データ集めと専門的知識の吸収のかなりの部分は、女房にまかせ、解決プランを練り、それをくわしくワープロに打ち全員に配布したがそれでも反応はにぶい。15年ほど前、わたしが副会長をやっていたとき自治会の規約をつくったさいの活気さとくらべると雲泥の差である。当時は、個人と社会のかかわり意識がまだまだ横溢していた。

## 社会の“ゆがみ”イメージ

個人と社会のかかわりかたの位相が、10年余りの間にかくも変わってしまったのはなぜか。問題は1980年代の経済社会のありかたが技術化（ハイテクノロジー）の波動に規制され、そして労働の質も変化をとげてきている事情を根底において考えていかなければならない。このことをあえて指摘しておいて、この時期の人びとの社会観とか世相をとらえなおしてみよう。その手がかりとして、1989年（平成元年）12月に朝日新聞社がおこなった12回目の定期世論調査（層化無作為二段抽出法で有権者3000人を対象。有効回答率78%）のデータを取りあげてみる。



この調査結果は、『朝日新聞』（1990年1月1日）に載っているがそのなかに現在の社会を表わす言葉についての設問がある。それによると、「不公平」（28%）、「身勝手」（17%）、「自由」（13%）、「安定」（13%）、「混乱」（13%）の5つが上位を占めていた。このキー・ワード5つで83%となっているが、「自由」「安定」のプラス評価が26%であるのになんていって「不公平」等マイナス・イメージを表わす言葉が57%となっていて、社会のいびつなメカニズムを端的に示している。なかでも、「不公平」と「身勝手」はこの定期世論調査をふりかえってみると、一貫して社会イメージの中核をなしてきている。「不公平」観は、80年代をつうじて年々強まってきている実情にあり、年齢、職業、男女を問わずトップを占めている。このイメージは、「金がものをいいすぎる」（42%）、「まじめな者がむくもられない」（23%）という現在の世の中への不満度の高さと結びつき、将来の生活になんらかの不安を感じている人びとが68%を数えている事実から証拠だてることもできよう。

このような社会への国民のイメージの積み重ねかたと関連して、「中流の生活」意識がどの程度であるか検討してみると、47%の人びとがそう意識していないことが解る。80年代後半をつうじて「中流」と思っている人間は49%で半分にも達していない。この実情をみると、これまで90%ぐらいの人びとが「中流」意識にひたっているという中流意識議論に立つ日本人の社会意識の説明は、誤りである。

今日の社会の病理の徴候は、80年代のはじめにあらわれていた。その事情は、1979年12月に、朝日新聞社がおこなった青少年を対象にした意識調査であきらかである。それによると、「競争」（27%）、「不安」（21%）、「でたらめ」（17%）との回答率が高く、社会は「金」と「モノ」によって動くにとらえついた。（『朝日新聞』1980年1月1日付）。当時15歳から、24歳にいたるこの調査対象の青少年たちは、いまや25.6歳から34.5歳で社会の第一線を支える年齢層になっている。彼らの一世代前には高度成長のなかで青春を迎え学生運動の嵐を体験した団塊の世代が厚い層を形づくっているが、彼らの間ではこれらの世代と異なり、おとなしく政治に背を向け、理想や正義を求めるより、現実を重視し、私生活を大切にす風潮が主流をなしてきた。この人生観、考えかたが、80年代の社会イメージとなっている。「不公平」「身勝手」観とつながっているだけに、社会不満は強まるけれども社会改革への反応はにぶいという説明がつく。

### 社会の乱れと無菌培養教育

社会のゆがみやねじれが強まる一方、これを是正する力量が欠けるという二重の意味での社会の崩れは、知能指数や偏差値で人間を決定的に評価してしまう世間相場の流れのなかで形づくられてきた。しかも、とくに30代前半から下の年齢層は、1967～79年の小中高学習指導要領をつらぬく教科内容の精選とレベルアップの名のもとでの「詰め込み」と多様化と差別の洗礼を受けてきている。こうした格差の拡大をもたらすような教科指導では、学力テストに強いタイプの人間が尊重され、その対極で落ちこぼれが輩出している。この傾向は、77～79年の「ゆとりと充実」をキャッチ・フレーズに掲げた小中高の学習指導要領のなかでも改善されなかった。高校では、むしろ文部省の調査でも「受験シフト」の強まりにつれ、「ゆとり」に逆行し、88年の状況が指導要領の標準を順守しているのは、全国で9.4%にすぎないという。

学力テストに強いタイプがリーダーシップをとるとなると、数学者の故遠山啓氏がかつ



て指摘したように、一定の枠のなかでの思考にたけ、頭の回転がはやく、誤ちを犯さない  
用心深さはあるが独創性がない。独創性がないから、このタイプは、均質で画一的な社会  
には向いているが、社会のひずみを改革していく力量はない。しかも、昨年公になった新  
学習指導要領が各教科、特活をつうじて強制している「国旗」、「国歌」教育と日本の「大  
国主義」を煽り立てようとする国民教化の作用を思うにつけ、社会のゆがみを改め、活性  
化をはかっていくことは、ますます困難である。

どうも、保守党の文教関係の政治家や文部省の主流は、教師や生徒が世の中の動きや問  
題を考えることはこのましくないと思っているようである。そもそも学校は、国家万能意  
識と愛国心を育成するために、生徒にたいして無菌培養の場にしようと発想する傾向が文  
部省には強い。この国家優先主義に立つ教育政策のアクセルを踏めば踏むほど、教育は社  
会から遊離し、国粹化していく。たとえば、昨年の初秋、福島県いわき市の市立平一中で  
起きた事件は、学校を無菌培養の場にしようとする一つのケースであった。

事件というのは、市教育委員会が平一中にたいして社会科公民の授業でもちいている補  
助教材を回収することを要請したということである。理由は、「内容が刺激的過ぎる」とい  
うことであるが、この事件をとりあげた2、3の新聞によると、教材は、政治、経済、社  
会のできごとについての新聞記事の要約や図表であって、この措置は、極論すれば新聞を  
読むのも問題ということになろう。素直な眼でみれば、新聞記事をめぐって教師を世の中  
の動きや問題を考えていくようなことこそ、教育の場の本来の姿ではないか。

### 公教育の活性化と教文研の課題

平一中事件は氷山の一角である。マスコミの報じないこの種の事件やこれに類するでき  
ごとは、星の降る数ほど多い。わたしも実に多くのケースを耳にしている。その特徴は、  
生徒に時代の動きとか現実の世界を知り、考えることを拒否していること、父母が騒いで  
苦情をだし、保守系の市議等政治家をつうじて教育委員会が問題にするというパターンが  
多いことである。

現実の世界に児童・生徒を誘い、眼を見開かせていくことこそ、将来の社会生活に向け  
ての訓練の第一歩で、これこそ公教育の重要な役割である。教育関係者はその手助けを工  
夫すべきであるのに、文部省はともすればそれに蓋をしようとする。まことに憂うべきこ  
とで、教育の放棄というほかない。また、父母の騒ぎ、通報行為は、子どもたちとの対話  
を抜きにしたという意味で、市民生活のルールを自ら踏みじったものである。家庭教育＝  
共育の任務を怠たり、公教育の場で教師と意見を交換するという手続きをとらえないで、  
力によってことを封じようとするのは、教育と縁のない行為である。

社会のゆがみと公教育の場の喪失は、今後相互に連動して、国民にマイナスの相乗作用  
をもたらしていくことは目に見えている。だからこそ、県下の各地区の教文研の実践活動  
は、たとえ細い流れであっても、ますます社会的に意味をもってくるし、県教文研が各研  
究委員会と教育相談の活動をつうじて、問題提起や議論を集積し、経験を蓄積していくこ  
とは、将棋の「歩」に、似たようなものであるとはいえ重要で、このこと自体が一つの社  
会的責務ではないかと、わたしは考えている。今、教文研に課せられているのは、公教育  
の場での知的生産力をあげていくその基礎エネルギーを蓄積し、それを共有していく場を  
つくりだしていくことである。

# 90年代を迎えて

所長 奥津 心一



## 〈はじめに〉

新しい年代を迎え、いまさまざまな思いが脳裏に浮かんで消えというところである。

毎日いやおうなく、さまざまな情報を目にし耳にするのが昨今の状況でもある。朝刊のページ数もずっしりと重さを感じるほど増えている。

特定の情報が必要な人、記事の内容がよく理解できる人だけが目を通す部分がページ数の増加とともにますます多くなっていくように思う。不特定多数の人々に購読してもらう新聞だから、それぞれに向く記事を網羅せざるを得ないからだろう。しかし、一方で紙の原材料である森林資源の乱伐が、地球の環境問題と重なって問われているのに、情報化の時代といわれるもとで紙の消費は増加し続けているようだ。

昨今その目・耳にする問題について、おかしいなと感じたり、矛盾を強くいただくことが多い。最近某TV局がとりあげた問題なのだが、食品の名称を変えたら売り上げがのびた、そのこと自体どうということはないのだが問題は変えた食品の名称である。つまり、以前トルコという名称の使い方で<sup>ヒンシュク</sup>鰯を買ったが今回も同類の問題なのである。日本人の平均的な差別・侮辱問題意識のレベルはこんな程度さといってしまえばそれまでだが、あのインタビューで商売だから、経済的行為だからといって店長らしき若者がケロッとしている姿にやりきれない思いがした。それにたかだか外食の些細なことだと思われる方もあるだろうが私には「経済行為だから」それ(差別問題)と、これとはべつという割り切りかたこそが実は大きな問題だなと思った。

このことは、さきのリクルート事件で国民の前にあらわにされた一部政府高官や政治家の悪行を悪行と感ぜない感覚と同根で、経済的行為、あるいは経済の論理が他のなにより優先されるはずだという感覚にほかならないのである。だから「妻が行った経済行為である」とか、「秘書がしたこと」と、さすが自分でしたとはいえず他に行為者を移し、妻や秘書が個人として株の買い・売り行為をしてなにが悪いかとばかり一時はその多くが開き直ったりしたことは記憶に新しい。

利潤の獲得をめざしての経済行為であっても、なにをしてもよいということにはならない。最近は教育産業が急成長しているという。産業と称せられるかぎり経済の論理が優先される。子どもの教育が経済の論理で割り切れるのだろうか。あらためて90年代は公教育を社会の現状から問いなおし子どもたちのための教育の再構築を図らねばなるまい。

## 〈過ぎた80年代を思う〉

新しい年代の幕あけにさいして、まえがきで憂鬱な感想を述べてしまったが、過ぎ去った80年代という時の流れは期せずして教育文化研究所設置以来の10年とぴったり重なる。主任制度化反対のとりくみの坩堝のなかから生まれた教文研が10年目にきたのである。

思えば80年代のしょっぱなから教育にはさまざまな問題が渦巻いていた。70年代後半からの保守政権による主任制度化策や新構想教育大学の設置の強行などがその頂点に達した

観を呈していた。とりわけ80年半ばに発足した鈴木内閣は、70年代の流れをうけて日本の防衛問題に大きく踏み込み、「総合安保体制」の一環として学校教育での「国防教育重視」の必要をとえらるなど軍国主義教育路線をあらわにしたのである。

しかし、80年代の最大の教育問題は「臨時教育審議会設置とその答申」に集約されると思う。臨教審の設置とその答申を問い、その問題性を明きらかにすることが、21世紀に生きるいまの子どもたちの平和で幸せな未来の生活の保障ができるかどうかにかかっていると思う。70年代の後半、そして80年代、それは88年後半以来のできごとに象徴されるように、「戦後政治・教育の総決算」にみあうような社会の状況を見せていたともいえる。国民相互が共に生き・育ち、共に学ぶ横のつながりより、上下・縦の関係が重視・強化されている。多様な民族が共に働き生きる時代にさしかかっているのに、依然として単一民族によって形成されていると誇らしげに語り、ナショナリズムをあおる結果をまねいている。臨教審答申で国際化の時代に着目してそのための教育推進強化をうたってはいるが、よき国際理解者になるまえに、伝統文化を尊重するよき日本人たれと強調し、そのため、せっかくの国際化教育推進の文言もいろ褪せたものとなっている。

少し視点のちがうことになるが、オルテガ(スペイン・哲学者・1883~1955)は、その「世代論」のなかではほぼ15年のスパンを「歴史的時間の節」としている。「世代」と「年代」を同列に扱うのは乱暴にすぎるかもしれないが、71年の「中教審答申」と以後の中教審路線による教育、そのほぼ15年後「臨教審答申」と、現在強行しつつある臨教審の路線の具現化というようにとらえていくとなるほどと領ける。「中教審答申」は能力主義教育にのめり込むなどの問題をかかえていたし、また、それ以上に一層国家主義教育などに傾斜した「臨教審答申」の問題性について考えると、日本の教育にとっては憂いの多い「歴史的時間の節」となっていることは残念である。

この「歴史的時間の節」からすれば、いま憂いをいまだく国家主義教育などの問題が今後一層エスカレートしていく、その歴史的時間のなかにくみ込まれる90年代となるのではないかという危惧をもつ。あらためて気をひきしめ臨まねばならぬ90年代であると思う。

### ＜「無知な賢者」と臨教審＞

これからあることにふれる。そのことが私の無知によるものであればむしろ幸いである。

さきにふれたオルテガが「無知な賢者」という言葉で指摘していることについて、ある特定の分野についてはすぐれた才能を持ち、大きな業績をあげているのだが、その他のことについては無知に近いのに、諸事百般について権威者のごとく発言する。そういう人々を「無知な賢者」、さらには、それが、典型的な大衆人なのだとオルテガはいうのである。

権威者として自認しておられる方々に対し大変失礼なことを述べているようにも思うが、教育の改革をめざす審議会のような場で、もし「無知な賢者」の無知な発言・あるいは権力におもねるような発言がまかり通る部分をゆするとしたら大変残念なことだと思う。

「臨時教育審議会」での審議の経過ではどうであったろうか、私には「審議の経過」、あるいは「答申」を見てそうした面での疑念や、不透明にうけとれるものが少なくない。

こうした国レベルの問題から私たちの生活周辺のことにもふれる。最近子ども・若者の問題が多いからであろう、教職員が地域に出た時や住民として会合に参加した時など教育の批判がよく出される。当然の指摘・批判であれば謙虚にうけとめることはあたりまえのことなのだが、えてしてもの知り顔で教育について固定的な考えや、古い教育観を持ち出し



て現状の学校の教育をなじるような方にまま出会う。そんな時失礼だが無知な方だなと感じるが、話し合いを深めて少しでも現実の教育のありようについて、共に理解しあう努力を私たちはこれからもつづけなくてはならないと思う。同じ考え方の者たちだけで息巻いていても状況を変え、前進させることにはならない。日常機会あるごとに地味なとりくみが90年にもつづく個人に課せられた重い課題であると思う。

### 〈岡山教研に思う〉

岡山駅西口から開会集会の会場である岡山武道館までのかなりの間強い雨であった。長く日本の教育文化の砦であった日教組の全国教育研究集会が、その役割に変化はないにせよ革袋の中身は変わった、いや変えざるを得なかったのかも知れないが、会場への途次いようなない思いが私の胸中を去来した。90年代の初年の第39次教育研究全国集会に、教育現状ふまえ、新たな研究大会といってもいいだろうこの坩堝のなかでなにを課題として掘みとっていくのかを自らにいいきかせつつの参加でもあった。

記念講演「国際環境の変化と教育のあり方を考える」についてふれたい。

事前に大会要綱が手に出来なかったので会場に入ってから浅井氏(東京大学教授)が講演されることを知った。氏は89年8月に「日本の外交——反省と転換——」と題して岩波書版で世に問うておられる。講演のなかでもふれられたと思うが次の「緊要になすべきこと」の一部分は正鵠を射ている「私たち日本人にとっての結論はただ一つである。過去の日本軍国主義がアジア近隣諸国に対して犯した過ちを率直に侵略であったと認め、これを今後の日本の対アジア外交の出発点として明確に国民意識に定着させることである。そのためには、教科書検定問題における現在の政策を抜本的に改めさせることが緊要の課題となる。この政策課題を実現するには、世論を喚起し、政府・自民党の誤りを正す以外にないであろう。この課題を実現してはじめて、アジア諸国が日本の将来に対して抱く最大の不安の思想的根源を絶つことができると思われる。

それと同時に、自民党文教族・文部省を中心に推し進められている、教育における明らかに時代の流れに逆行する試みに対しても、私たちは、明確な問題意識をもって対処しなければならない。自民党の究極的目標が憲法改悪にあるとすれば、批判が教育問題だけに限られることがあってはならないことも明らかである。……」

全国教研の本命は時間分量からして分科会にあるのだろうが開会集会の講演もまた聞きのがし難い。浅井氏は外交官であられた。自民党政権のもとではあっても政府・外務省におられたというだけでもこころ強く思う。

### 〈おわりに〉

教文研の10年の節目、同時に世界は90年代の幕開けとなった。本来なら足もとの教育問題だけを努力していけばよいはずだが、現状の我が国が上意下達、文部省→都道府県→市町村教委→学校の流れが強まりつつあるからには、これに抗して行かざるを得ない。また、浅井氏の指摘されるように、子の教育に不安を抱く父母とともにこの90年の教育について、明確な問題意識にたって諸問題の克服にむけ、とりくみをすすめたい。最後に、前評議会議長の山田勉教授の一周忌の法要が5月3日野比の称明寺で行われた。この日は、生きておられれば教授の誕生日、還暦の祝いの日である。憲法を大事にされた教授、東欧をはじめとする民主化要求のうねり・状況なども合わせてどのようにこの日の感慨を吐露されたことであろうか、かえす返すも残念である。こころからご冥福を祈りむすびとしたい。

# 目 次

90年代へ向けて更なる発展を .....	理事長	繁 里 昭	
市民生活の助走の場としての公教育を .....	評議会議長	金 原 左 門	
90年代を迎えて .....	所長	奥 津 心 一	

## I 各研究委員会の活動報告

・子どもの生活研究委員会 .....	松 井 堅	1
・教育改革研究委員会 .....	富 山 和 夫	18
・地域文化の研究委員会 .....	斎 藤 寛	20
・教育相談委員会 .....	滝 沢 正 樹	22

## II 各地区教育文化研究所の活動

横浜 .....	24
川崎 .....	34
三浦半島 .....	40
湘南 .....	46
湘北 .....	51
中 .....	55
西湘 .....	65

## III 研究論稿

「労働」を問いつす		
教育運動論ノート(2) .....	斎 藤 寛	73
情報化社会の教育 (5) .....	林 洋 一	82
社会主義の激動と教育のペレストロイカ .....	田 中 正 司	91
社会科の理念で生活科を		
“遊び”を正面にすえた教育を .....	市 川 博	97
いま、子育てはどうなっているか .....	宮 島 郁 子	106

## IV 今年度の歩み

活動日誌 .....	112
教文研だよりの発行	
フィルム・ライブラリーの貸出状況	
所蔵フィルム一覧	
教文研・各種名簿	

## 子どもの生活研究委員会

## ——生活科を点検する——

研究評議員 松 井 堅

## (1) はじめに

これまで生活指導委員会の名称で活動してきた本委員会は、上記のような名称変更を事務局提案の原案をもとに審議し決定しました。また1989年度は委員会メンバーの変更も行われ新鮮な雰囲気ですスタートしました。

委員会の名称やメンバーの変更はありましたが1984年設定した「子どもの自然的成長過程の奇型化の問題」の主題は継続し、子どもの意識や生活パターンの変化、それに伴う問題点について歴史的、社会構造的に研究しながら問題解決の対応を考える研究姿勢を貫くことを全員で確認しました。

本年度のテーマを学校教育の問題点をさぐると設定し1990年からはじまる生活科に焦点をあわせ研究を進めることにしました。研究の経過のなかで提案されたレポートや話し合いをベースに要約し報告します。

## (2) 新設された生活科

生活科は改訂学習指導要領の「目玉」の一つとされている。それは小学校1、2年生の社会科と理科を廃止して新設される教科であるからだ。教科の性格が変わるときそれは大方改悪につながる。1958年、1959年の指導要領改訂の折の「道徳」の特設は教科ではないが教育課程の構造を変えた所産である。更に職業・家庭科から技術家庭科への変更は今回の生活科特設に見られる権力の教育意図の前例である。新憲法の成立、それに伴う民法の改正による「家」の封建制から民主的近代性への変質、個人の尊重等や中学校段階での職業的適性の発見を教え指導することを主眼としていた職業家庭科は、指導要領の改訂毎に換骨奪胎され、単なる技術科に変換させられたのである。常に社会科とともに民主主義イデオロギー形成をよしとししない反動の飼食となったのである。

であるから教文研1989年号外版は『新学習指導要領の骨子は、現行の指導要領の目指した「ゆとりの教育」にとってかわって「心の教育の充実」「基礎・基本の重視と個性教育の推進」「自己教育力の育成」「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」となっている。まず指摘しておかなければならないのは、新学習指導要領が1987年の教育課程審議会の答申にそった構成になっていることである。1987年12月24日、教課審がまとめた「幼稚園・小学校、中学校及び高等学校の教育課程の基準の改善について」という答申は、国際化に対応しつつ日本人の愛国心の育成を眼目にすえている。そして小学校低学年の生活科の新設、高校社会科の解体と地歴科の独立、日の丸一国旗・君が代一国歌の指導、日本人としての



自覚の涵養を強調している。この答申の内容は、日本が第二次世界大戦後推進してきた民主化や民主教育の歩みに逆行するものであった』と捉えています。生活科をこのように巨視的に理解する眼を私たちはもつ必要があると思います。

こうした理解とは別に生活科を現場の先生方はどのように理解しているのか1988年秋に国民教育研究所、学力問題研究委員会、静岡市教職員統合立教育研究所が実施した調査があります。

- (1) まったく新しい性格の教科…8.5% (17名)
- (2) 社会科・理科を含む合科…29.4% (59名)
- (3) 生活について考え、必要な理解・技能を教える教科…16.9% (34名)
- (4) 知識・技能を教える教科ではなく、生活体験をさせる教科…49.3% (99名)
- (5) 生活や社会・自然に対する興味・関心を育てる教科…57.7% (116名)
- (6) 自己を認識させ、心情や情操を養う教科…16.9% (34名)
- (7) 道徳的性格の教科…7.0% (14名)
- (8) わからない…3.5% (7名)
- (9) その他…1.5% (3名)

(1)から(7)までの回答のうち(2)の「社会科・理科を含む合科」というのは、文部省によれば、まちがった回答になる。最も回答率の多い(5)の「生活や社会・自然に対する興味・関心を育てる教科」というのも不十分な回答なのである。実は、それは「まったく新しい性格の教科」なのであり、「知識・技能を教える教科でなく、生活体験をかせる教科」であり、「自己を認識させ、心情や情操を養う教科」であり「道徳的性格の教科」なのである。先生方の回答はいかがですか。

### (3) 生活科新設までの過程（社会科誕生から）

「生活科は、突如として誕生した教科ではない、それはおよそ20年にわたる検討の結果、産みだされたものである」と教育課程委員会や文部省は説明する。小学校低学年の社会科の論題の経過は次のようであったと言われています。

#### 1958年版学習指導要領と低学年問題

文部省が社会科の「解体」の方向に歩み出したのは1955年の学習指導要領改定以来のことであるが、小学校低学年の教科構成等の手直しに着手したのは、1958年版学習指導要領の改訂時であった。当時教課審委員や文部省幹部職員のなかにも、低学年社会科の意義について懐疑的な見解をもち、①低学年社会科を廃止して道徳の時間にかえるもの、②国語科のなかで社会的教材を含めて指導する考え方のもの、③社会・理科・音楽・図工等の諸教科の教材を適宜含めて合科教授的方法を主張するものがあったといわれる。ここにすでに、徳育の重視、国語を中心とした基礎、基本的学力の重視、そして子どもの学習意欲を高める方法の改善（合科教授）へという今日の生活科につながる原点をみいだすことができよう。そのなかで、当時の特徴として、社会科の授業時数を削減して道徳、国語の授業時数の増加にふりむけたところにあったということができよう。丁度時を同じくして「道

徳」が特設されたこともあって、社会科自体をあらさまに「道徳」的なものに変えていく力は当時の文部省にはまだなかったのである。

### 1968年版学習指導要領と低学年問題

1968年版学習指導要領の教育課程は内容主義的傾向が強かったが、子どもの学習意欲を高めるための改善にも努めていたことに着目したい。

その公示の前年の10月の「教課審」答申は、「低学年の社会科については、具体性に欠け、教師の説明を中心にした学習に流れやすいものの取り扱いについて検討を加えるとともに（中略）児童の発達段階を考慮して、他教科、道徳等とも関連させて、効果的な指導ができるようにする」「低学年（の理科）においては児童が自ら身近な事物や現象にはたらきかけることを尊重し（中略）経験を豊富にするように内容を改善する」ことを示唆した。

それを受けて学習指導要領は、第1学年の社会科の目標において、「身のまわりの社会事象を具体的に観察したり」を示すとともに、具体性に欠け、教師の説明に流れやすい内容、たとえば「自分から進んで工夫し、みんなのためになることをすれば、気持ちよく楽しい学習の生活ができる」などが削除された。理科でも内容の取扱いで「遊びなどを通して、親しみやすい自然の事物、現象に直接はたらきかける」活動の重要性を強調するなど改善に努めた。

### 1977年版学習指導要領と低学年問題

だが、教育界全般にわたる知識中心の教育は改善されるどころか、その傾向がさらに強められていった。子どもが学習だけでなく、遊びに対しても無気力、無関心になっていることが大きく問題とされるようになった。

かくて1976年末の教課審「答申」は、知識中心の教育の弊害を改善するためにおもいきった“教育内容の精選、弾力化”“ゆとりと充実”をうち出した。知識を系統的に伝授する傾向が最も強い高校1年生の社会科に、知識の修得を第一義的目的としないで、現実の社会への関心を高め、問題解決力の育成をめざす「現代社会」が新設されたことのなかにその典型を見ることができる。

小学校低学年に対しても「単に従来のように知識を中心とした学習に偏らないよう配慮し、身近な事物や環境を具体的に観察し、表現する学習活動が充分行われるように」（教課審「中間まとめ」1975年）する方向で、社会、理科を合体した新教科の設置も検討された。だが「現行の教科の編成を変えるかどうかについては、そのことによる指導の効果や学校における教育条件等も十分考慮して決定しなければならず、現在、直ちに教科の編成を変えることには、なお研究も試行の積み重ねが必要であるという考え方が強く、むしろ教科の編成は現行どおりとし（中略）合科的な指導を従来以上に推進するような措置をとること」（教課審「審議のまとめ」1976年）となった。

かくて課題学習、総合学習、総合教育、総合活動、創造活動、○の時間、環境科、生活科など様々な名称・方法で、従来の教科の枠をとり払って、子どもの切実な興味、関心をおもいきって出させ、その追究を十分に保障する学習（活動）の在り方についての研究（試

行)が全国各地で進められていったのである。

#### (4) 生活科の突然の変身

臨教審が第二次答申(1986年4月)において「社会・理科などを中心として、教科の総合化を進め、児童の具体的な体験・活動を通じて総合的に指導することができるよう検討する必要がある」と述べたことをきっかけに文部省は「小学校低学年の教育に関する調査研究協力者会議」を設けて具体的に動きだした。生活科という教科の設置が提言されたのは、この会議の「審議のまとめ」(1986年7月)においてであった。そこでは生活科の性格について次のように述べられ、目標と内容の試案が提示された。

「児童が自分たちとのかかわりにおいて人々(社会)や自然をとらえ、児童の生活に則した様々な活動や体験を通して、社会認識や自然認識の芽を育てるとともに、そのような活動や体験を行う中において自己認識の基礎を培い、生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養うことをねらいとする総合的な新教科」として生活科(仮称)を設けることとした。

協力者会議がこの見解を表明したことによって、小学校の低学年から社会科と理科という二つの教科が消えることは決定的になった。ただし重要なことは、生活科という新教科のねらいが「社会認識や自然認識の芽を育てる」という表現で、社会科と理科の教科としての目標を含む「総合教科」として構想されたことであった。そのことは教課審の「中間まとめ」(1986年10月)においてもそのまま踏襲された。しかし1年後の「審議のまとめ」(1987年11月27日)では次のような表現に変更された。

「生活科は、具体的な活動や体験を通して自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、自分自身の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養うことをねらいとして構想するのが適当である。なお、これに伴い、低学年の社会科及び理科は廃止する」

「審議のまとめ」での突然の変身。社会科と理科を廃止したうえで成り立つ新教科は、もはや協力者会議の提言や「中間まとめ」にしめされた「総合教科とする」見解とも異なったものになるからである。社会や自立に対する「認識」の指導よりも「自己認識」をそして生活習慣・技能の体得によって「自立」への基礎を養う、というのが生活科の性格とねらいとされたのである。

なぜこのような変身がおこるのか、私はさきに職業家庭科から技術家庭科への移行の問題点を指摘した。それは憲法原理である民主主義や人権を職業家庭科から抹殺したのである。憲法改正を党是とし、人を経済発展の資源と見なす自民党や財界、そのお先棒をかつぐ文部省、例の政官財一体の日本株式会社の文教政策は、憲法 教育基本法の原理を公教育のすべての領域において薄め、じゅうりんし、反動化を進めてきたのである。この変身もその路線のひとつであると理解できる。

徳育強化のための生活科を批判する前に、戦後の社会科と理科の教育がどんな任務を果すべく誕生したのかを明確にしておこう。戦後の最初の学習指導委員社会科編(試案)(1947年)には、社会科について次のように書かれている。

「今度新しく設けられた社会科の任務は、青少年に社会生活を理解させ、その進展に力



を致す態度や能力を養成することである。そしてそのために青少年の社会的経験を、今よりもっと豊かにもっと深いものに発展させていこうとすることが大切である。」

「青少年の人間らしい生活を営もうという気持ちを育ててやることは、基本的人権の主張にめざめざすることであると同時に、社会生活の基礎をなしている、他人への理解と他人への愛情とを育てることである。」

社会科が誕生したのは明確な理由があった。それは、日本国憲法や教育基本法がめざした、世界の平和と人類の福祉に貢献できる主権者を育てる教育において、中心的な役割を果たすことが期待された教科なのであった。主権者としての資質、それは子ども、幼い時から育成されねばならない。だから社会科の教育を中心として「社会生活において事象を合理的に考えるとともに……科学的総合的に自分の考えを立て、正義・公正・寛容・友愛の精神をもって、共同の福祉を増進する関心と能力とを発展させること」(学習指導要領社会科編)をめざした。

自然科学教育をになう理科の教育においても、新しい「理科の指導目標」が学習指導要領理科編で次のように定められた(1947年)

「理科の指導目標」は、すべての人が合理的な生活を営み、いっそうよい生活ができるように、児童、生徒の環境にある問題について次の三点を身につけるようにすること。

- 1 物ごとを科学的に見たり考えたり取り扱ったりする能力
- 2 科学の原理と応用に関する知識
- 3 真理を見出し進んで新しいものを作り出す態度

## (5) 徳育強化のための生活科

教課審「答申」は小学校低学年に対して次の方向をうち出した。自ら意欲をもって学習にとりくむための措置として既設の教科を合体し、しつけをねらいとする生活科を新設。かつ授業時数を削減。その削減した時間を基礎・基本の重視の名のもとに国語に配分し、その国語も道徳的教材を増加。この一連の動きのなかに、わたしたちは、社会科をくずして道徳＝修身科にしようという33年版学習指導要領改定以来の願望を、ここに来てなりふりかまわず露呈して、一挙にその実現をはかろうとしていることをみることができる。

さて、わたしたちは、生活科がねらっている基本的生活習慣・技能の習得をはかる問題をどう受けとめるべきであろうか。

答申は「学校や生活の基礎的な能力や態度の育成をめざすものであり、それらを通じて自立への基礎を養う」と述べており、単なる生活上のしつけだけを目指しているのではなく、学習能力の基礎をも育成し、自立への基礎を養うことを目指しているといえるかも知れない。しかし、基礎的な能力や態度に該当するところは、ほかではすべて“生活上に必要な習慣や技能”とおきかえられている。しかも表1に掲げた如く生活科の学習内容は、明白にしつけであるといえよう。

第1表 生活科のねらい及び内容参考例

① 内容例（1年）

- (2)・家庭生活を支えている家族の仕事や家族の一員として自分でしなければならないことが分かる。  
・家庭において自分の役割を積極的に果たすとともに、健康に気を付けて生活することができる。

②生活科（仮称）内容選択の視点

内容選択の視点	具体的な活動や体験によって育てたいこと	学年別	
② 家族や友達、先生などと適切に接することができるようにする。 (身近な人との接し方)	・家族や友達、学校の先生など自分とのかかわりについて考え、あいさつをしたり、話をしたり、話を聞いたりすることができる。	1	・家族や友達、先生などに日常のあいさつをし、正しい言葉遣いで話することができる。 ・家の人や先生に自分のことや見たこと、したこと、感じたことなど正しく話すことができる。 ・友達の考えを終わりにまで聞き取ったり、友達の様子や気持ちを考えて話し合うことができる。
	・近所の人や店の人と適切な接し方ができる。	2	・近所の人に日常の挨拶をしたり、自分のことや家族のことを話することができる。 ・品物や値段をたずねたり、買物をするなど店の人と話をしてお使いをすることができる。
	・家に来る人たちとの対応ができる。	2	・家に来た人にあいさつし、名前や用件を尋ねたり、家族に伝えたりすることができる。 ・家に来た人と丁寧な言葉遣いで話し合うことができる。

(文部省初等中等教育局小学校課 昭和63年4月12日)

それは、生活科の構想にかかわった元及び現文部省幹部の発言のなかにあらわされている。その第1は小学校低学年教育問題懇談会の有力なメンバーであった奥田真丈氏（元文部省審議官 横浜国立大学教授）が1986年1月に、臨時教育審議会第3部会の「ヒヤリング」で発言したことのなかに如実に示されている。奥田氏はそこで「(国語 算数という教科なども大切だが) 私は、小学校低学年は、いわばすべてが道徳教育であると考えてもいいぐらいに思っている」と述べた後に、「たとえば小学校低学年の場合を考えたときは、習慣化というところに力点をおき、日常生活の基本的行動様式、礼儀作法、整理整頓などについて習慣化するまでしつけてしまう。そして、学年が進むとともに、その内面化を図り、適切な判断力を持たせて行動に移せるようにする。」

と“行為”の意義を問うことなく、一定の行動様式をとらせようとする。まさに修身科の復活を思い起こさせる内容をそこに含んでいる。

文部省内の現関係者も“行為の教育”を重視し、

「道徳教育は学校での教育活動会議を通じて行うが、特設「道徳」の時間はそれを深化、統合し、子どもに内面化することを目ざす。これを「心の教育」とすれば内面化されたものの実践化を図る「行為の教育」とも言うべきものを充実させることが考えられる。」

と、知と行を分離し、内面よりも、型を重視しているのである。

要するに、自然や社会に対する客観的な認識を深めていこうとする主体の形成がめざされているのではなく、いわゆる「知識」を受け入れ、きめられたルールに従って自分を制御し、「生活上必要な習慣や技能」を体得するということが、めざされるのである。

生活科が、社会科・理科とはその教科の基本性格において異なっていると考えざるを得ない理由の一つに、それが時間数はもとより教科書や教師用指導書によって従来よりも一層強く規制されるということである。また活動や体験、さらには心がまえなどを重視する「訓育」的教科でありながら「評価」の対象とされる、という問題がある。然し、この教科が1990年4月スタートというのにスタート時に評価や教科書が間にあわないという誠にお粗末な一節もあり生活科変身の拙速ぶりを露呈している。

生活研究委員会では、こうした生活科のもつ問題点の指摘、批判を多角的に話しあった他、現実に迫りくる生活科の授業をどう進めるのか展開するのか、生活科の授業とはどういうものなのかを実際に指導した指導案を読みあうなかで検討してきました。しかし、紙数の関係でそれらを詳述することができません。いくつかある指導案のなかから横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校での公開授業研で配布された授業案を市川先生が指導者の了解を得て私たちに提示して下さったもの一編を資料として掲載させて戴きます。

(神奈川県教育公務員弘済会事務局長)





## 第1学年1組 生活科学学習指導案

指導者 杉山 哲也

1. 日時 平成2年1月23日(火) 9時～10時45分
2. 場所 横浜国立大学教育学部 附属鎌倉小学校プレイルーム
3. 単元名 「うちの人のしごと、ぼく・わたしのしごと」
4. 単元のねらい
  - \* 友達に家族のことを紹介する活動を通して、家族が自分のために様々な仕事をしてくれていることに気づく。
  - \* 仕事をする家族の願いを知り、その仕事の意味を問い直すとともに、「ありがとう」の気持ちをもって、家族の願いの実現のために、自分にできることを考え行動しようとする。
  - \* 自分なりの考えで動き、友達の考えも大切に自分の考えを深めることができる。
  - \* 友達の追究の様子を情報交換することで知り、その良いところを取り入れて、自分の追究をより深く確かにしていこうとする。(友達の良さを認めあう。)
  - \* 家族の一員として、自分にもできることがあるという意識を生み、さらなる生活の広がりへ想いを広げることができる。(単元「もうすぐ2年生」へのステップとなるよう。)

### 5. 単元について

#### (1) 子どもたちの姿と単元構成

入学式以来、さまざまな人・もの・ことと関わり、学校生活を広げ、安心を広げてきた子どもたちは、その活動の中で、自ら人やものやことと関わることの楽しさ・良さを感じとってきた。また関わる中で、様々な「こまり」を解決したり、自分たちのやりたいことをやっていこうとしたりすることを通して、自分の追究する姿に対して自信を持っていけるようになってきた。この自信は、子どもたちの活動の場をどんどん広げ、今や放課後の子どもたちの交流を生むまでになっている。4月・5月ごろ帰宅するためのバスに乗るのにさえ勇気がいった頃とは別人のような子どもたちである。

本校の事情のため、かなり離れた友達のうちへ行ったり、来たりする中で、子どもたちは、それぞれの家庭の雰囲気をつかみ、家族構成や、習慣の違い、うちの人の仕事の違いなどに気づきだした。この経験は、あらためて、自分の家族を見つめ直すきっかけとなっており、子どもたちの話の中に多くあらわれるようになっていく。毎日の朝のお話の中で、「うちの人のこと」が紹介されるようになったのも、その背景にあるこのような意識から生まれてきたものである。2学期もあと少しという中で、子どもたちは、4月から続けてきた「朝のお話」の内容を変えていこうとした。すなわち、何かお話のテーマを決めていこうとする意識が生まれてきた。その中で、「家族の紹介」というテーマを子どもたちは支持していった。これは、子どもたちの「ぼくのお父さんのお話を聞いてよ。」「うちのおかあさん優しいんだよ。」「うちではねお母さんがこんなお仕事をするんだよ。」といった自分の家族への想いをみんなに知ってもらいたいという願いから生まれたことであろう。

このような子どもたちの、学校生活から家庭生活への視野の広がりをとらえ、機をとらえて本単元をこの時期に構成していくことにした。

## （２）子どもたちへの願い

〈お仕事への意識〉 1学期から始まった、学校の先生たちと仲良くなったり、先生たちのお仕事を調べていく活動によって、子どもたちは自分のために一生懸命に働いていてくれる人がいるということを、捉えていった。特に給食のおばさんたちのお仕事については、その忙しさ、暑さ・寒さの中での仕事の大変さ・丁寧さ・片付けの煩雑さ・仕事をしているときの想い等にふれていくことを通して、今まで、好き嫌いで残していた自分・片付けについて気に止めていなかった自分・栄養のことなど考えてもいなかった自分に気づき、自分たちのことを考えて、一生懸命におしごとしてくれているおばさんたちのために、何かしてあげたいということで自分たちの活動を考えていった（・給食を残さないようにがんばる・食器の片付けをきちんとする・おばさんたちが1時間しかない昼休みを楽しく過ごせるように、給食に関わるプレゼントをする・1組だけでなく、みんなにも給食のおばさんのおしごとを知ってもらって、おばさんたちが少しでも楽になるようにしてあげる。）

そして、ほかにも私たちのためにお仕事してくれている人がいると、学校の先生たちに目をむけてひとりひとりの「探検」を進めようとしたのである。

そして今、『3学期にしたいこと』の中に見られるように、「お掃除してくれている千葉さんや印刷してくれる宮崎さん、本のことで相談に乗ってくれている桜井先生・・・いろいろな人に「ありがとうを言っていこう」としている子どもたちに育ってくれた。このことは、3学期に置いた「みんなありがとう」というテーマが、1・2学期の人と関わる活動を通して、既に子どもたちの中に生まれつつあることを伺わせるのである。

ところが、この「みんな」の中に、お家の人は入ってこない。子どもたちの中には、すでに「たいへんさ」をとらえ、私も何か出来ることをしていきたいと想っているものも生まれてきているがまだまだ深まっていないのであろう。本単元は、こうした、身近な生活の中の家族のお仕事に目をむけさせ、家族を再発見させるとともに、自分のために家族が頑張ってお仕事していることをとらえ、自分にも出来ることがあること、自分の仕事をつくっていこうと意識し、実践していく子どもの姿を願っている。

〈「見れども見えず」から「見えるものから、見えないものへ」の追究を通して〉

子どもたちのとって、「家庭」は、不安な学校生活へ立ち向かうための『心のよりどころ』であったし、いぜん、心がもっとも休まる場所であろう。しかし、これまでは、家族がいることが「あたりまえ」であり、家族が自分のために何かしてくれるのが「あたりまえ」であると捉えている子どもたちである。学校生活の中で様々な人たちが、様々な想いを持って働いてくれていることを追究した子どもたちは、今「家のお母さんはどんなことを考えてお仕事しているのかな？お父さんは一体何のお仕事しているのかな？」という意識を持ち始めている。この子どもたちの意識を大切に、自分の生活の基盤である『家庭』を創っている家族について目をむけさせ、「あたりまえ」であったことを見つめ直し、様々な想いの中で、家族が助けあっていることや、社会に対して働きかけている家族について見つめて行くことを通して、家族への理解とともに、家族への感謝の気持ちをふくらませていきたい。そして、家庭をさらなる安心の場として、とらえなおし、おもいきり活動する

ための心の基地となるようにしたいのである。

### (3) テーマとの関わりについて

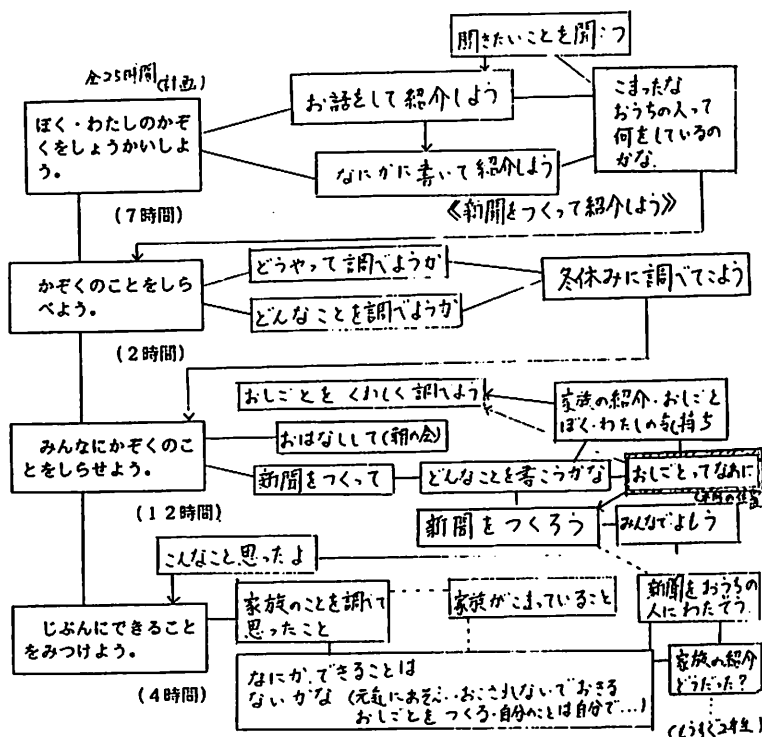
1年生の今年度の学年テーマは、「自分から生活をひらいていく子」である。このテーマは、不安いっぱい1年生が、様々な人・もの・ことと深く関わることで、みずから自分の生活の範囲と安心を広げ、自信を持って行動していく1年生の姿を願って設定された。

このテーマを具現化するために、学期テーマを1学期「なかよしさんをつくろう。」2学期「ちからをあわせてがんばろう。」3学期「みんなありがとう。」とおき、活動をとらえていった。

本単元は、学期テーマの位置からすると、「力を合わせて頑張ろう。」と「みんなありがとう」の両方にかかっている活動ということになる。実際、子どもたちの活動の立ち上がりの意識は、「みんなで朝の会を楽しくしていこう。」「力を合わせておうちの人のことを調べていこう。」というものであり、いかに子どもたちにとって、このテーマが、2学期の様々な活動の中で、大切なものであったかがわかる。したがって、本単元を進めるにあたって、「力を合わせてということ」を大切にしながら、活動が展開されるよう十分配慮したい。

一方、本単元を通して、「みんなありがとう。」の「みんな」の中に、おうちの人が入ってくることを願っている。先に述べたように、自分のために頑張ってくれている人がすぐそばにすることを再認識し、自分でできることをふやしたり、自分の仕事をつくったりすることで「ありがとう」の気持ちを家族に伝えようとする子どもに育ってほしいのである。

## 6. 活動の流れ (実際の流れの詳細は資料を見て下さい。)



## 7. 本時のねらい

- ・新聞作りをするために、家族の仕事についての捉えを家庭での体験・観察・聞き取りなどを通して話し合い明らかにするなかで、家族の仕事についてのとらえを深める。
- ・自分の家族の仕事について新聞に表わすことで、家族のおもいに目をむけるとともに、みんなにわかりやすい新聞にしようとする。

## 8. 本時の展開

学 習 活 動	教 師 の か か わ り
<p>1. 前回の話し合いで問題になったことについて、話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・家族の仕事の大変さについて</li> <li>・仕事をする家族の気持ちについて</li> <li>・僕達の仕事はあるか。 (遊びは仕事と考えていいのか。)</li> <li>・僕をおこるのは・・・ (家族の願い)</li> </ul> <p>2. 家族のお仕事についての新聞をかく。</p> <p>*どんな新聞にするか話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・2回目の新聞作りだ。今度はどんな新聞にしていこうかな。</li> <li>・読みやすいように、字を大きくかこう。</li> <li>・絵を使って、お仕事の様子をうまく書きたいな。</li> <li>・お仕事の大変さを書きたいな。</li> <li>・友達と、見せあいっこしてやるといいよ</li> <li>・紙の大きさ・色は？</li> </ul> <p>*紙の大きさ、レイアウト等、自分の考えで決め、新聞作りをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の話し合いでのおたがいの共通理解を明確にしておく。</li> <li>・前時に問題になったことを明確にさせる。</li> <li>・実際に自分の家で・見てみた・やってみた・聞いてみたこと から意見を述べさせたい。</li> <li>・家族の仕事の具体に目をむけさせたい。細かさ、大変さ。)</li> <li>・たいへんなのに、何で楽しいというのかなという疑問を大切にし家族の想いに迫らせたい。</li> <li>・おしごとのどんなことを書いていきたいのか、どのように書きたいのか発表する中で、おしごととしての家族の想いにも目をむけさせたい。</li> <li>・前回（第1号の新聞作り）で気付いたことをもとに「みんなが読みやすい新聞を書きたい。」という意識を盛り上げる。</li> </ul> <p>内容・工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ひとりひとりの動きを座席表を使ってとらえていく。</li> <li>・紙を自由に選ばせたい。</li> <li>・書き方、内容については、ひとりひとりの想いを聞きながら、力づけアドバイスしていく。 (子どもたちの動き・意識によっては、大幅に変えたり、途中で活動を打ち切ることもある。)</li> </ul>

(資料)

本時をむかえるまで

1. 年組

## 大切にしてきたこと

(1) 子どもたちの意識をとらえて

前述のように、単元のスタートを、「なるべく子どもたちの意識から」と考えて子どもたちの意識を探ってきたが、子どもたちの意識を探ることは、その後の展開でも大切にしている。

家族の紹介をしようとしたとき、友達からの質問をうける中で、「ぼくのお父さんって、何をしているのかな。」「わたしが学校に来ているときに、お母さんは、何をしているのかな。」という一番よく知っているはずの家族に対してのとらえが、実は、かなりあいまいなものだったことに気付くだろうと予想した。同時に、今まで学校の中で追究してきた「お仕事」との意識の関わりや、3学期に始まったクラスの係のお仕事への意識の高まりから、家族のお仕事に目が向いていくであろうと考えた。したがって、子どもたちは、「紹介したい。」という目的を達成するための活動を通して、家族を深く見つめようとするであろうととらえた。

そして、おしごとのたいへんさや自分のために頑張ってくれていることをとらえることで、「ぼくにできることは・・・」という意識に発展していくであろうと考え、単元を構想した。

また、活動が進むなかでも、子どもたちの意識のつながりを大切にし、計画をより具体化させていった。

(2) 自分のとらえのあいまいさを自覚させる。

いつもの朝の会のお話（日直2人）で

12月はじめ

朝の会をもっと楽しくしよう。

「朝のおはなしをなんとかしたい。  
いつまでも5月ごろと同じではダメ。  
もうすぐ2年生になるのだから。」

なには

- ・うち
- ・ぼく
- ・ぼく

おうちの人をしょうか

ぼく・わたしのがそくをし

10分

でも、言いたいことや  
聞きたいことがいっぱいあるよ

なが  
私まで

どうしようか？

・時間を決めて紹介しよう

- ・大きな紙に書いてもっと言
- ・質問は、それを読んで、ふ
- ・うちの人にも見せておい

どんな工夫? → 工夫してかくとおもしろい

「かぞくのしょうかいお知らせ」  
「かぞくのおはなし」  
「かぞく しんぶん」  
にして、わかりやすく、たのしく  
おしらせする

・新聞できるかなあ？

・ぼく 作ったことないよ。

・大丈夫だよ。みんなで教えたりたすけたりしてやろうよ。

・「給食のおばさんのお仕事」の新聞をついたから、ちゃんとだけ教えてあげられるよ。

ぜひ、新聞にしてみたい、  
新聞をつくって紹介したい。

いい クラス・楽しいクラスにしよう。

・おしごとをつくりたいな。  
(1人にてできる)  
たいへん意欲的

が いい?  
人のこと  
が ばんはなし  
の すぎなこと

いしよう

T君  
「かぞく」にしてほしい  
犬や猫も紹介したい

ようかいしよう

ます。質問30分

質問は 様々であつた。  
特に、しごとに 関すること  
は、ほとんど 答えられ  
ない。

すぎる。  
まわつてこないよ。

Mちゃん  
激怒

うふうにお話すればいいのかな  
は、どうしようか

いたいことを知らせればいい  
いい紙にかいてはる  
がられるね

いかも

新聞づくりへのおこ  
がれもあり、一気に  
意欲が高まる。

かぞくのことを  
お話しよう。。

(朝の会)  
質問は  
5分ぐらい

おしごとのことや、  
今、なにや、つてると  
聞かれると答え  
られない。

(お山) みんなは、あまりおうちの人の  
こと知らないんだね。

やっているように、友達の問題を受けて  
いった結果、子どもたちは、自分の家族  
のとらえがいかにあいまいであり、家族  
のことを意外に知らないものだということ  
を意識した。そして、ここから、「よく  
見てみないとだめだ、聞いてこないと  
だめだ、お話できないよ。」と言って帰  
る子どもたちの姿が生まれた。ぜひ調べ  
てみたいという意欲とともに、冬休みの  
生活に入ってしまったのである。

T君のノートより

・・・ふゆやすみは、おかあさんの  
ことをしらべたいです。なぜかって  
いうとおかあさんのしごとはぜんぜ  
んしらないからです。ふゆやすみに  
たんでいして、おかあさんのおしご  
とをさぐりたいです。・・・

(3) 「こまり」を自分たちで解決しよ  
うとする。

今まで、様々な生活の中から生まれた  
「こまり」を自分たちの力で解決してき  
た子どもたちは、本単元でもいくつかの  
場面で自分たちの力で、自分たちのやる  
ことを決めようとしている。

例えば、「家族として、犬や猫も紹介  
したい。どうおもう?」という一人の想  
いをみんなで話し合つて「人ばかりが家  
族じゃない。」「家族ってどういうこと  
なのかな?」ということ、1年生なり  
にとらえようとした。そして、みんなで  
話し合い、「自分にとっての家族」につ  
いて新聞に書いていくことになった。

また、新聞の第2号「かぞくのおしご  
と」をかくにあたり、「ちょっと困った  
ことがあるんだけど。。」という発言を



もとにみんなが考え、仕事のとらえを明らかにしてきたことは、みんなで知恵を出し合うことの良さをとらえさせていった。

このような自分たちの活動を自分たちでつくっていくことは、ぜひとも大切にしたいことの一つである。

#### (4) 新聞作りを通して

子どもたちにとっては、「ぼくわたしのすてきな家族を紹介したい」という目的で作り始められた新聞であるが、新聞作りを通して、家族のしごと、しごとする家族のおもいをはっきり意識させたいと考え子どもたちの活動を後押しした。新聞作りのためには何をする必要があるのか、どんなふうに書いたら分かってもらえるのだろうか、友達はどうな書き方をするのかな、など、子どもたちの育つ側面はかなり広い。友達と情報交換するなかで、また、話し合っていくなかで、自分の新聞作りを納得いくものとしようとする子どもたちの姿を期待している。

#### (5) 「おしごとって何だろう。」という意識。

これまで子どもたちは、学校の先生たちのお仕事を探るなかで、「杉山先生のおしごとは『あくしゅ』をかいたり、みんなと遊んだり・・・コーヒーを飲むのは違うね・・・」とか、「給食のおねえさんのおしごとは・・・」という意識で「おしごと」のとらえを深めてきた。

ここでは、今まで使っていた「おしごと」という言葉をとらえなおさせるとともに、「おしごとってなにかな?」「どういうことかな」という意識を引き出し自分なりのとらえをさせていきたいと考

ちょっと心配。おこられそう。

本当のことをかいたらおこるかも。途中でみつがると、書きなおさせられちゃうかも。

「見つからないようにやろう」「わるくちをか  
「できたのを見せて、びく 新聞じゃないよ  
りさせてあげよう。」 「こんな人だよ  
「たんけんしたいわね。」 ことがあはいて  
「なまへは、かえよう。」 「でも、ずいぶん

「1年1組 たんていた

・冬休みにたんていしてく  
・おはなしすること

冬 休 み / 年

計画をたてよう →

(冬 休 み)

(3学期にみんなで  
やりたいこと) →

新聞で家族のことを

1号「しょうかい」 ← 「どんなことを書いて  
2号「おしごとのこと」 ← 「何号までかこうか  
3号「うれしいこと、かなしいこと」 ← 「内容(こと)を  
4号 ← 「自由にするか」

「おしごとのこと」ならみんながそれを書いて

「力を合わせて」「みせ合いながら」  
「相談しながら」  
いい新聞ができる。

ちょっとまって。「かぞく」に「ぼく」の  
大やねこを入れてもいいかな。

「かぞく」ってどんな人のことかな?  
・おやなら かぞく  
・おはちゃんも かぞく  
・大やねこでも、その人が、かぞくと思ってるなら かぞく。  
・いいよに思っている  
・人間、けいこんしている

おうちによって、その人によって



族がしていることを見ていくと、「たいへんかどうかは分からない。」「いやいややっていると言うけれど、うちのお母さんは、洗濯は楽しいって言っているよ。」という意見が出てきた。

これについて、子どもたちは、「たいへんかどうか、聞いてみないと分からないし、自分でやってみないと分からないよ。」「家族のやっている様子を見ないと分からないよ。」と言ってきた。このことを調べていくことは、新聞作りの材料にもなるということで、土・日を使ってうちでやって来ようということになった。

「たいへんかどうか」「いやいやかどうか」は、人によってとらえがちがうし結論は出せない。しかし、何がどのようになりたいへんなのかという、しごとの具体的に目をむけさせること、相手のおもいにふれていくことは、しごとに対する子どもたちの意識を高め、「家族が自分のために、また家族みんなのよりよい生活のためにしごとしてくれている姿・工夫に気付いていくであろう。

また、友達のおうちの人と、おしごとに対するとらえがちがうことを知る中で自分のおうちの人を、あらためてみつめるようになるであろう。

お仕事を具体的に見ていくことで、自分が人によって支えられていることに気づき、さらに安心を広げ、自己を表出していける子どもになってほしいと願うのである。

(6) 友達とともに、活動する。

「人との関わり」ということでいえば子どもたちにとって、クラスの友達は、学校生活の中で何よりも強い関わりを持

だい1号「かぞくのしよ」

- ・紙の大きさ自由に
- ・色も自由にしよ

はじめての新聞ができたよ。

- ・はって見てもらおう
- ・感想や質問を書いてふくろに

〇〇ちゃんの新聞の人氣があるのは、なぜなの？

- ・だい2号は、かんばるぞ。
- ・もっとわかりやすくするよ。
- ・ながみもかんがえるよ

せうがいや。

だい2号「かぞくのしごと」の新聞をつ

おし  
どんなことが  
わからないの？  
・せんたく  
・しよくい

(わからないこと)  
約和種類

なにが「おし  
(き)

おしごとって ということ

新聞づくりのために  
はつきりさせたいという意識

みんなの考えに、あっているかみつ

- ・ひろねは？
- ・本とよむのは？
- ・ゴルフは？

ひろねは、おしごとするためのとらえたり、本と料理の本などといった様々な考えが、何のためにしているのか、大切だという子どもたち。

どうしたらわかるか？

- ・おてつだいをして自分で「やってみる」
- ・おうちの人に「きいてみる」
- ・おうちの人 の 様子をよくみる

「なにがたいへんなのか」「どのように

本当に「たいへん」なのか

具体的に語る

本題:「たいへんさ」たの  
おしつ おしごとの



# 教育改革研究委員会

研究評議員 富 山 和 夫

教育改革委員会では、年間の研究テーマとして指導要録に記載される「評価」の問題を取り上げ、6回にわたって委員会をひらいた。7月の年度最初の委員会でこのテーマを選んだ目的は、学習指導要領が改正されるとそれに関連して指導要録も見直されるのが通例であるので、今回の指導要領の改定によって、指導要録がひいては評価の在り方が見直されると予見されたからであった。以下に、簡単にその内容を見ておく。なお、毎回のより詳細な記録がのこされているが、紙数の関係でそれを収録することは割愛する。

9月11日には、「評価についてのアンケート、——教師たちは評価についてどう考えているのか」について斉藤さんから問題を提起して頂き、討議をした。これは、「点数序列のない学校をつくる会・評価白書編集委員会」のまとめたものの内容を、アンケートの項目毎に詳細に報告され、かつ集計担当者の感想を紹介したものであった。

当日はまた、現場からの報告として竹村さんから「指導要録を考える——湘南教祖の取り組み」として、湘南での今日までのこの問題に関する取り組み方について報告をしていただいた。湘南では、1971年の改定指導要録に対する検討を活発に行った経緯があり、指導要録に対する批判的な姿勢が確認されており、それに関連して、評価についても多くの問題を指摘している。結果としては、指導要録を形骸化、改善、改革していくことの重要性が強調されたものとなっている。

10月30日と11月27日には、黒沢さんから、2回にわたって「評価の底流にあるもの」についての基本的な点についての包括的な報告をしていただいた。黒沢さんの第1回目の報告は、判定するとか評価するという活動そのものを先ず俎上に上げ、能力評価の立場の違いを検討し、新しい教育評価の考えを紹介し、評価の現状と課題を述べ、最後に評価の底流にあるものとして、「関係として『教育』を捉える」という視点を明らかにされたものであった。氏の第2回目の報告は、日本教育学会第44回大会（筑波大学）で氏が行った報告「物象化と教育・再論」の紹介と『だれでもできる到達度評価入門』（全国到達度評価研究会編著・会長は中内敏夫氏）を素材として到達度評価についてのより突っ込んだ検討となっている。黒沢報告は、広範囲かつ詳細にわたるものなので、簡単に要約して紹介することは困難である。

11月27日には奥津所長からも、いくつかの関係資料の紹介も行われた。神奈川県公立高等学校入試選抜制度Ⅰ、同Ⅱ、京都府の高校入試制度について、指導要録、中等教育制度の問題（子どもの生活・学習と高校入試制度の問題）、到達度評価の資料、がそれである。また、同日、斉藤さんから、「神奈川『障害児』の高校入学を実現する会」の資料が配付された。

1月13日には、「川崎での評価の実態」について迎さんから報告をしていただいた。報告では、川教組は、(a)評価のあり方を見直し、業者テストの廃止や市販テスト・ワークの不

使用に向け、職場の意志統一をはかる、(b)通信票の作成にあたっては、児童・生徒を上げまし、学習意欲を向上させるという観点にあたって自主編成をすすめる、の2点を具体的目標としていることを確認した上で、小学校についての実態を明らかにした。それによると評価には、幾つかのタイプ分けが可能であり、「所見欄の多い全体的相対評価」が主流を占めており、「学習内容に応じて評価項目を作成」する独自の評価をしている学校は(147校のうち)僅かに2校に止まっているという。だだ、前者の場合でも、評定の配分率に若干の柔軟性が保たれているとのことである。この日の議論では、父母との面談などの際には、教師が評価について確固たる理念をもち、十分に時間をかけることが重要だとの意見、その他が活発に行われた。

なお、当日の会では、文部省が「指導要録改訂」のための「調査研究協力者会議」を設置する意向であるとの情報が紹介された。

2月20日には、斉藤さんから『「障害」者の高校進学と入試選抜の問題』について報告していただいた。斉藤さんは、(1)地域の普通校・普通級で“ともに育つ”、(2)「高校に入ること」の認識、(3)さしあたっての、いくつかの問題、3つにわけて、詳細な報告をされた。テーマの関係もあって、単なる評価の問題を超える論点も多く指摘された。

文部省は1月19日に、先に触れた「指導要録の改善に関する調査研究協力者会議」(主査・奥田真丈=東京都立教育研究所長)を発足させた。ここでは、新指導要領にそってこれまでの評価の在り方が再検討されるという。「生活科」のような相対評価には全くなじまない科目が新設されたことで、絶対評価あるいは到達度評価などを採り入れることが議論になるとの観測がある。教師が評価についての理念を新たにすることが、非常に大切な時期にさしかかっているといえよう。

(関東学院大学教授)





# 地域文化の研究委員会

囑託研究員 斎藤 寛

今後の課題設定をめぐっての自由討論(7月、9月)でスタートした地域文化研究委員会は、「国際化」のかけ声が“理念”としてだけとびかいがちな状況下にあって、現に私たちの足もとに存在するさまざまな「国際化」問題に焦点をしばって検討してゆくこととなった。「地域」という場にグローバルな問題の交錯する時代を見すえての課題設定である。たとえばそれは、他国からの労働者移入の問題であり、あるいは在日朝鮮・韓国人、在日中国人をめぐっての、特に神奈川県とはかかわりの深い問題と言えよう。

## (1) 国境を越える労働者移入をめぐって

10月の委員会では、宮島喬委員から、労働者が国境を越えるという事態の“先進地域”であるヨーロッパ(報告では主としてフランス)の問題状況をめぐって、およそ次のような報告を受けた。

①フランスには約400万人の外国人が居住しており(その約6割はアルジェリア人など旧植民地住民)、すでにその子どもたちが70～80万人にのぼっている。②子どもたちの就学に際して、共学か別学かが問題になるが、そこには言葉の問題が大きくかかわってくる。フランスでは、植民地時代の教育経験を通じてフランス語がなんとかわかる外国人居住者が多く、母語はアラビア語、公用語はフランス語という“2重の言語”を強いられながら、共学している(学校ではアラビア語のわかる教員はほとんどいない)。③共学下での人種差別問題は、保育所などではほとんど見られない。問題がおきてくるのは小学校3年生ごろからである。そのころから、言葉のハンディなど家庭での文化環境の違いが“成績の差”としてあらわれ、また親の世代のフランス人の差別意識(「あの子たちと遊ぶんじゃない」等々)の影響がフランス人の子どもたちに生じてくる。④移民の子どもへの特別の配慮(たとえば補習の実施)は「平等」との関連でフランス人側からクレームが多く、教員は苦慮している。⑤'72年に「反人種差別法」が制定され、子どものための反人種差別の本なども刊行されるようになった。しかし、現に就職差別などがあり、かくされた人種差別意識も根づく残っている。⑥“第2世代”の国籍はフランスでは出生地主義で、18歳でフランス国籍が選択できる。その背後には「異なっていることの権利」をみとめつつ“フランス国民”に統合してゆく政策があると思われる。(西ドイツでは血統主義で、外国人の子は外国人のままにしておく政策である。)

以上の宮島委員の報告(まとめ文責：斎藤)は、今後予想される日本の状況に対しても、さまざまな意味で示唆するところ多いものであろう。(なお「外国人労働者」問題全般についてくわしくは、宮島委員の著書『外国人労働者迎え入れの論理』明石書店、1989)を参照されたい。)

## (2) 在日のひとびとをめぐって

11月～2月の3回の委員会では、現に神奈川において存在する「国際化」問題をめぐって、川崎の「ふれあい館」の実践(市の教育・民生施設を在日朝鮮・韓国人を中心とする「社会福祉法人青丘社」に運営委託)、横浜の平安小学校の国際理解教育の実践(以上11月)、横須賀における戦前・戦中の朝鮮人強制労働の実態の掘りおこし、および現在の朝鮮初級学校と日本側学校とのかかわりの実態とその問題点(1月)、川崎における在日朝鮮・韓国人の過去と現在、特に現在在日のひとびとが行政に対して求めている諸権利(指紋押捺など外国人登録法の差別条項の撤廃、社会保障における差別撤廃、公営住宅入居、家族同居権、教育を受ける権利、公務員職の開放、文化への権利、参政権等々)について(2月)など、各委員からの報告を受けて討論した。

たとえば平安小の実践が、なお主として西欧に顔を向けた“きれいな”実践にとどまっている(このレベルの「ふれあい」なら大方の人々は異存がなく、「良いことだ」と言うのである)のに対して、「ふれあい館」の運営委託をめぐっては、地元からの反対論(「地域に差別はない」「寝た子を起こすな」等々)がわきおこったという。この、決して“きれいな”話ではすまされない問題次元こそ、フランスの事態としても報告されていたところであり、今後私たちが「日本人」(として“外”からはくくられる存在)として自らを問い返しつつ考えてゆかねばならない問題であるといえよう。

## (3) 「異質との共存」ということ

制度上においては「人権保障」と「国籍」をめぐる問題(理論的には「国籍」レベルでの「国家」論)が大きく残りつづけ、かつ、そうした問題を「差別」として感知しえない「日本人」の意識状況(労働運動における排外主義などをもふくめた経済ナショナリズム、および“単一民族国家”というような言葉を怪しまずに使いかねない民族的文化的な“同質性”の虚偽意識、日本の対アジア侵略の歴史認識の欠如等々)が問われなければならないだろう。当委員会のこのテーマでの討論は、現在なお始まったばかりであるが、“異質との共存”[「同化」でも「排除」でもなく]ということ、単なるスローガンにとどめず、地域の具体的な問題状況を見すえた検討を重ねてゆく必要があろう。(教研集会などで、このテーマとかかわりつづけている当事者の方々の問題意識を、この委員会に反映できるようなシステムについても、考えるべき余地があるのではないだろうか。)

そして、「日本人」にもさまざまなひとがいるように、在日のひとびとにもまたさまざまなひとがいるというあたりまえの事実も、自由で実りの多い討論のために、忘れてはならない視点であろうと思われる。

(東洋大学講師)

(付記)座長の河村委員が御療養中のため、本項は斎藤が担当した。

# 教育相談委員会

研究評議員 滝 沢 正 樹

## 1. 教育相談状況

1989年度（4月7日～3月23日）

は、別表のように総相談件数は、電話・手紙をふくめて288件であり、このなかには同一相談者が重複して数回にわたり相談してくるものもふくまれている。別図の上の月別相談数について言うと、5月～6月に相談数が多いのは、学校生活への不適応、先生や友人との葛藤などであり、8月～10月は圧倒的に登校拒否問題が集中し、11月～1月は進路進学問題が集中している。

## 教 育 相 談 状 況

1989年度（4/7～3/23）

種 別			対 象	相 談 対 象 者    ○内は手紙												相 談 者					対 応					
				合 計			小 学 生				中 学 生		高 校 生		そ の 他		父 親	母 親	祖 父 母	本 人	そ の 他	教 師	①委員 会へ	②委員 へ依頼	③電 話で 回答	④そ の 他
							低 学 年		高 学 年																	
				計	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女										
①	性 格・生 活	対人関係	18	8	10	2	3	3	3	1	3	2	1		18								18			
		性 格	①20	①14	6	2	2	3	3	①7	1			2		①20				①			20			
		そ の 他	①40	①28	12	6	3	①3	2	4	3	12	4	3		①40				①			40			
②	登校拒否	登校拒否	③57	③35	22	3	6	③5	8	24	7	3	1		2	③54			1	③	1		56			
		家庭内暴力	1	1						1						1							1			
③	非 行	暴 力 的																								
		性 的																								
		虚 実	4	3	1			2		1	1					4							4			
		そ の 他	①20	15	①5			1		7	①1	6	3	1	1	2	①16			2	①3			17		
④	学 業・成 績	①10	①7	3	1		3		①2	3			1		①10					①			10			
⑤	健 康・発 達	22	11	11	4	3	6	3		3		2	1		1	20			1	4	1		17			
⑥	障 害	知 能	2	1	1		1	1								2				1			1			
		身 体	1		1		1									1							1			
		言 語																								
		そ の 他	1	1				1								1							1			
⑦	進 路・進 学	38	17	21				4	11	14	5	2	1	1	37				1	2			36			
⑧	学 校・教 師 問 題	20	10	10		1	5	4	5	5					18			2		1			19			
⑨	校 内 事 故																									
10	家 庭 問 題	①7	①4	3			①	1	2		1			1	①5					①			5			
11	そ の 他	17	12	5	1			1	4		2	2	6	3	15		4						19			
12	生 活 指 導																									
13	生 徒 指 導																									
14	進 路 指 導																									
15	対 人 関 係																									
16	父 母 提 携																									
17	そ の 他	2		2													2						2			
総 計			⑧280	⑦167	①113	19	20	⑤33	29	②69	①41	31	15	15	8	5	⑧262		6	5	2	③11	2	267		

すでにくり返し述べたように、別図の分類はきわめて恣意的なものであり、実態は複雑な諸要因の複雑で多元的な重なりから生じた相談である。ただ、性格、生活の部門が多いのは、現代の家族にさまざまなマイナス要因があることを物語っている。

## 2. 相談の特徴

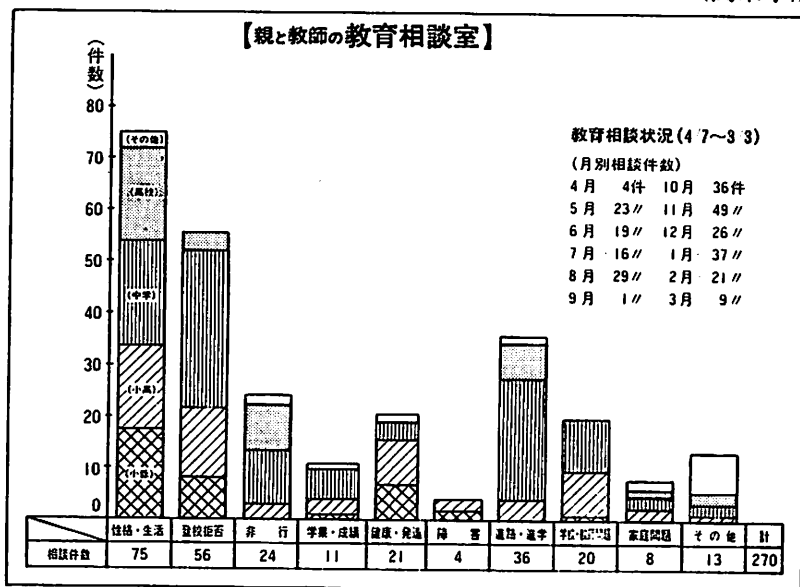
この教育相談が始ってからすでに10年になるが、年毎の相談内容の傾向の変化については、現時点では正確な分析はできない。ただ、性格、生活に分類される相談が低年齢化していること、登校拒否が中学生に多いこと、そして学校・教師問題にカテゴライズされる相談が増えていることだけは、一般的な特徴と言ってよいと考えられる。本年度、本委員会で一番討議がはずんだのは、両親と教師とのあいだで、子どもにたいする評価のちがいがあ——したがってこの両者の子どもにたいすアクセス態度がちがっている——、しかもそのうえに父親と母親とのあいだで、子どもにたいする教育観の不一致があるというきわめて複雑なケースであった。このようなばあい、相談担当員は、両親とも対応し、また教師とも対応しなければならなかった。そして教師のばあいは、担任および校長とも対応せざるをえなかった。

## 3. まとめ

本年度、本委員会の先生方を驚かせたケースに、「どうしても自分の子どもを愛せない」という母親からの相談内容であり、対応中に判ったことは、子どもの反抗を父親の遺伝質と思いこんでいることだった。このようなケースは、もはや教育相談の枠をこえたものであり、人生相談でもあり、現代の結婚生活そのものの内実にかかわるものである。だとすれば、現代社会そのものの内実が問われなくてはならない。

本委員会は、どのようなケースであれ、できるだけ問題を限定して、問題解決を相談者自らの意識的な努力になるように対応しているのだが、問題そのものが、あきらかに社会的諸要因にかかわっているばあい、その対応はきわめてむずかしいと言はねばならない。この点については、あらためて「教文研だより」で論じたいと思っている。

(関東学院大学教授)



## II

## 各地区の教育文化研究所の活動

### 横浜市教文研の活動

#### —— 父母とともに歩む教育の発展を願って ——

##### はじめに

県教文研ならびに横浜市教文研が設立され、10年の月日が経過しました。この間、本市教文研は、「5・29(横浜大空襲)横浜の平和を考える日」を中心とする平和運動を基軸に教育文化事業を推進してきました。父母・市民に対する映画会、全市一斉の平和教育の推進、父母・市民との対話をめざす「各区の教育を語る会」を主な事業として本年度は展開しました。今後、これらの事業の充実・発展をはかっていかねばなりません。

##### 1. 5・29(横浜大空襲)横浜の平和を考える日を中心とする平和運動

平和教育は、すべての者が、あらゆる機会を捉えて日常的に取り組まなければならない。しかし、時には横浜に住む全市民が同一期日に平和について考え、決意を新たにすることも意義深い。

浜教組は、1980年度その手始めとして、「横浜の平和を考える日」を設定、横浜市立のすべての小・中・養護学校で、全学級の全児童・生徒が、平和について学習をすることにし、その実施を5月29日とした。

その理由は、

- ① 第二次世界大戦の際に、横浜は何回かの爆撃を受けたが、最もひどかったのが1945年5月29日の横浜大空襲であった。
- ② 5月29日は、年度始めの学年・学級の組織づくりも一段落し、落ち着いた時期になる。平和憲法と呼ばれる日本国憲法の施行された5月3日を受けた取り組みが可能である。
- ③ 「横浜の平和を考える日」を「点」としてのお祭り行事に終わらせず、年間の教育活動の中で「線」として、さらに、「面」として組織的・計画的・継続的活動とするために、年度初めに位置づける。

ということであった。

したがって、5月29日に平和教育を実施すれば、それでおわりではなく、今年度の出発点であるという認識で取り組もうと確認しあってきたところである。

今年度の実施状況は、次の通りである。

##### 1. 実施期日 [分会総数480校]

- |                 |     |
|-----------------|-----|
| (1) 5月29日に実施した。 | 68% |
| (2) 期日をかえて実施した。 | 34% |
| (3) 実施できなかった。   | 5%  |

## 2. 実施形態

- |                     |     |
|---------------------|-----|
| (1) 朝会等で全児童・生徒に話した。 | 69% |
| (2) 学活・朝の会等学級で扱った。  | 47% |
| (3) 一単位時間の事業として扱った。 | 37% |

※一部重複回答あり

横浜市教育文化研究所設立10周年記念

## 親子で平和を考える映画の会

新潮社作品●原作／野坂昭如(新潮文庫)●入場券必要



ほたるのはが

主催／横浜市教育文化研究所  
共催／横浜市区教育文化研究所  
後援／横浜市教職員組合・横浜市教育委員会

脚本 高畑 勲  
作画監督 近藤喜文  
美術監督 山本二三  
プロデューサー 原 徹  
製作 スタジオジブリ  
音楽制作 徳間ジャパン  
配給 東宝(株)



## ●解説

舞台は終戦前後の神戸。空に舞うB29の大編隊、夜闇を切り裂く烈く焼夷弾の不気味な光、火傷を負った町はさらなる執拗な空襲に絶えず脅やかされています。食ふことさえままならない死と隣り合わせの極限状況で、人々は己れの生にしがみつき、やむを得ないエゴイズムに陥ってゆきました。本作品の主人公は親を失った幼い兄妹。彼らは、戦中であるが故の世間の薄情にさへ背を向けました。兄妹2人だけで戦火の中を生き抜こうとしたのです。横穴式住居に住み、炊事も洗濯も自分たちの手、菜園作り、川釣り、カエルの干物、時には畑ドロボーによる食料調達など、それは楽しくも辛い小さなサバイバルでした。しかし、戦争がひつ迫するにつれ、妹は目に見えて衰弱してゆきます。必死に看病する兄…。

たぎるような熱い兄妹愛とあまりに幼い潔癖な心が、この「命がけのままごと」に結晶されたのです。ここには、現代では忘れられがちな、やさしいたわりと無垢なる勇気を見ることが出来ます。

タイトルにあるホタル（火垂る）とは、幼い命の象徴です。しかし、それは決して死ではなく、生の追求から発する光です。凄惨極まる戦況下にあつて、兄妹が自分たちの力だけで生き抜こうとした「命がけのままごと」は、幼い命の生への燃焼といえるでしょう。胸をしめつけるようなぬくもりのメロディが「火垂るの墓」から聞こえてきます。

## ●父母・市民のみなさんへ

今回の映画会を主催します「横浜市教育局文化研究所」は、市内の小・中学校の先生に支給された「主任手当」を出し合って設立したものです。「本研究」では、教育相談や父母・市民のみなさんに対する教育講演会などおこなっており、みなさんとともに、民主教育と、よりよい文化を築くため日々努力をしております。

「本研究」も設立され一〇年をむかえました。今回の映画会も一〇年目をむかえ、本年は昨年封切られた「火垂るの墓」を上映することとなりました。戦後四四年を経過し、戦争体験の風化が目立つ今日、より多くのみなさんに鑑賞をいただきたくご案内申し上げます。

支 部	日 程	会 場	時 間	支 部	日 程	会 場	時 間
鶴 見	5月27日(土)	鶴見公会堂	2:00～	金 沢	6月17日(土)	金沢公会堂	①1:00～②3:00～ ③5:00～
神 奈 川	6月3日(土)	神奈川公会堂	2:00～	港 北	5月20日(土)	港北公会堂	2:00～
西 中	5月14日(日)	横浜市教育局会館	①10:00～ ②1:30～	緑 南	6月17日(土)	緑公会堂	2:00～
				緑 北	5月13日(土)	藤が丘小学校	2:00～
南	5月27日(土)	南公会堂	1:30～	戸 塚	5月14日(日)	戸塚公会堂	①10:00～②1:00～
港 南	6月4日(日)	港南公会堂	①10:00～②1:00～	栄	6月4日(日)	本郷台小学校	①10:30～②1:00～
保土ヶ谷	6月10日(土)	保土ヶ谷公会堂	2:00～	泉	5月20日(土)	中田小学校	2:00～
旭	6月3日(土)	旭公会堂	①2:00～②4:00～	瀬 谷	6月10日(土)	瀬谷小学校	2:00～
磯 子	6月2日(金)	磯子公会堂	①10:00～②1:00～ ③3:00～				

\*本来この映画は入場料700円で上映されますが、今回は横浜市教育局文化研究所が負担します。

-----キトリ線-----

## 「親子で平和を考える映画の会」の申し込み票

(この票では入場できません)

名 前	続柄	住 所	電 話	学校・学年・組

この取り組みも定着を見たようであるが、まだ未実施の分会もあり、完全実施にむけて取り組みを強化する必要がある。

この平和を求める声をさらに大きくし、学校から地域へ広げるために横浜市教育文化研究所主催で、5月29日を中心に、各支部毎に「親子で平和を考える映画会」を開催してきた。第一回目は、市民ホール(現在の関内ホール)で、全市的規模で行ない大成功のうちに終わり、第二回目以降は各支部で行ない、10回を数えるに至った。その間の上映映画名は以下の通りである。

- |       |                |
|-------|----------------|
| 第一回   | “子どものころ戦争があった” |
| 第二回   | “ガラスのウサギ”      |
| 第三回   | “はだしのゲン”       |
| 第四回   | “はだしのゲン 2”     |
| 第五回   | “子どものころ戦争があった” |
| 第六回   | “二十四の瞳(アニメ版)”  |
| 第七回   | “対島丸”          |
| 第八・九回 | “ムッチャんの詩”      |

そして今回は、まだ封切りされたばかりの「火垂の墓」の上映をおこなった。この作品は野坂昭之氏が直木賞を受賞されたことであまりにも有名ですが、前回の「ムッチャんの詩」と同様に、戦争の悲劇をうったえたすばらしい作品である。

この映画会も、この10年間で市民権を得たようで、毎年、各会場とも人があふれ、父母・市民の皆さまからも大きな期待をもたれるようになってきている。今後、さらに発展させてゆく必要があろう。以下に、今回の「映画会」に参加した父母の皆さんの感想の一部をあげておく。

#### 参加者の感想

戦争を知らない世代の親が多くなり、お子さんに戦争の悲惨さや平和の尊さについて話し合うことが少なくなったと思います。おたくでは何か試みをされたことがありますか。

- ・ 1つの命の大切さ、戦争は話し合う場を失う物であることについて話した。(42男)
- ・ 広場に行ったとき平和公園で原爆ドームを見せました。(27女)
- ・ 天皇崩御のときテレビで戦争の放映も多くそのとき家族と一緒にテレビを見て戦争について話しました。時々本を読んだりしています。(34女)
- ・ 特別試みていることは有りませんが生命の尊さだけは教えているつもりです。(40女)
- ・ 戦争に関する本を読み聞かせたり生協の「母と子の原爆展」を見せたりしてきました。(41女)
- ・ 望郷を読んだり学校で国語の時間に戦争について読んできているので平和の有り難さを話している。(44女)
- ・ 毎年夏になると思うのですが、小さいのがいて心のゆとりがなく過ごしてきましたが、これからは何かを伝えたいと思います。(38女)

- ・原爆展に参加したりして来ました。私達親が読んだ本を子供も読むようにしむけております。(38女)
  - ・テレビなどで放映する番組を一緒に見たり、機会があると子供に話したりするよう心がけている。祖父が戦争に行った経験を話したりしている。(38女)
  - ・戦争を知らない世代が戦争を語って子供たちにその悲惨さを伝える手段としては、今現在世界各国で起こっている内戦を含め色々な戦争をテレビ・ニュースなどで報じられる機会があるたびに子供たちに見せ、昔日本でおきた不幸な戦争のことも話しする。(34女)
  - ・85才の祖母に話を聞いたりしていますが、子供たちにはあまり実感はないようです。(39女)
  - ・私自身戦後生まれですが父が近所の子供を集め戦時中のフィルムを会社より入手し映写会を行いその時の思いで話を子供に伝えさの時間いた話をしています。(38女)
  - ・昨年「さよなら津島丸」を親子で鑑賞し戦争の恐ろしさや現在、物が豊かになり平和であることを話し合いました。(32女)
  - ・「女たちの太平洋戦争展」とか沢田教一さんの写真展に子供と見学したりしています。(42女)
- 学校でも平和について学習していますが、学校教育での平和指導について御意見をお書きください。
- ・事実を出来るだけ知らせ、平和教育を強化してください。(42男)
  - ・単に反戦ではなく、何故戦争が起きるのかどうすれば防ぐことが出来るのか考えさせてほしい。(41男)
  - ・戦争はどうしていけないのかということを子供達に指導して行って欲しいと思います。(38女)
  - ・他校で給食にすいとんのメニューがありました。食べ物やビデオなどで目から入っていくような御指導をお願い致します。(36女)
  - ・国語の本などで時々扱われている題材に子供ながらに涙を流しているようです。(35女)
  - ・学校での平和指導はよくわかりません。話も子供から聞いたこともないので(34女)
  - ・指導していることはしりませんでした。(38女)
  - ・二度と悲惨な戦争が起こらないよう、この平和な世の中がいつまでも続きますよう。戦争を知らない子供達に強く印象づける学習をしてほしいと思います。(32女)
  - ・民主主義の本当の意味を教え、実践して欲しい。(32女)
  - ・戦後45年を経過し教科書の上でも色々な真実がゆがめられてしまい、日本が犯した過ちを子供達に伝えているか考えて欲しい。(34女)
  - ・とてもよいことだと思います。戦争経験のない私達の世代では子供達に戦争の恐ろしさと悲惨さを教えてあげられないので、平和の尊さを教えてほしいと思います。(37女)
  - ・戦争という大きな問題だけでなく、自分の回りの命を大切に思いやり理解する努力を分からせたい。(38女)

## 5・29 親子で平和を考える映画の会実施状況

支 部	日 程	会 場	時 間	参加者数
鶴 見	5月27日(土)	鶴 見 公 会 堂	2：00～	650
神 奈 川	6月3日(土)	神 奈 川 公 会 堂	2：00～	550
西 中	5月14日(日)	横浜市教育会館	①10：00～②1：30～	800
南	5月27日(土)	南 公 会 堂	1：30～	1,000
港 南	6月4日(日)	港 南 公 会 堂	①10：00～②1：00～	2,000
保土ヶ谷	6月10日(土)	保土ヶ谷公会堂	2：00～	1,000
旭	6月3日(土)	旭 公 会 堂	①2：00～②4：00～	
磯 子	6月2日(金)	磯 子 公 会 堂	①10：00～②1：00～ ③3：00～	2,000
金 沢	6月17日(土)	金 沢 公 会 堂	①10：00～②3：00～ ③5：00～	
港 北	5月20日(土)	港 北 公 会 堂	2：00～	550
緑 南	6月17日(土)	緑 公 会 堂	2：00～	1,000
緑 北	5月13日(土)	藤が丘小学校	①2：00～②4：00～	1,100
戸 塚	5月14日(日)	戸 塚 小 学 校	①10：30～②1：00～	1,100
栄	6月4日(日)	本郷台小学校	①10：30～②1：00～	800
泉	5月20日(土)	中 田 小 学 校	2：00～	700
瀬 谷	6月10日(土)	瀬 谷 小 学 校	2：00～	600
計		16 会 場	26回	16,850

## 2. 父母との教育対話の展開について

文部省は、昨年三月、「学習指導要領」の改悪をし、新国家主義・教育の国家統制をねらっており、戦後民主教育の一大危機に私たちはたちいたっている。

このような時、私たちは、父母・市民とともに、今日の教育問題を考え、子ども・父母・教職員の側に立った教育改革実現のための一助として、「各区の教育を語る会」を下記のように実施をした。各会場とも多くの父母・市民の参加を得て、大成功に終了した。しかし、これだけではまだ充分とはいえず、今後さらに多くの父母・市民の参加を呼びかけていく必要がある。

## 金沢区の教育を考える

### 父母と教職員の集いへのご案内

現在、社会問題となっている「登校拒否」や「いじめ」は家庭や学校が原因になっているのでしょうか。とりわけ、集団化した児童、生徒の心理は、個人個人が持っているそれとは全く異質なものになるといわれています。「親として、教師として私達が今、何をすべきなのか。」を講師の先生と一緒に考えてみたいと思います。ふるってご参加ください。

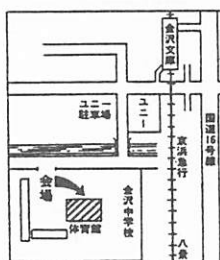
入場無料

- ◎日時 2月24日(土) 午後2時より
- ◎場所 横浜市立金沢中学校体育館
- ◎内容 講演「子供の心の読み方・育て方」
- 講師 教育評論家 遠藤豊吉先生

#### <講師、遠藤先生の紹介>

今回、講演を依頼しました遠藤先生は、現在NHK教育相談の窓口でカウンセラーをやりながら、講演活動を全国各地で行っており、大活躍中  
著書多数、元小学校教師。

#### <金沢中学校案内略図>



主催 横浜市教育文化研究所  
主管 横浜市教職員組合金沢支部

## 中区の父母と語る会

主催 横浜市教職員組合中支部

青葉ひとしお目にしむころと相成りました。父母の方々におきましては、何かと忙しい日々を過ごされていることと思います。

さて、このたび「親と子のあり方」について話を聴く機会を設けてみました。お誘い合わせのうえ是非ご参加ください。

日時 6月17日(土)  
14:00~16:00

場所 横浜市立港中学校 体育館  
(JR根岸線石川町駅北口 徒歩3分  
または市営バス吉浜橋下車 徒歩2分)

講師 元横浜市立篠原中学校校長  
中塩屋敏郎

演題 「親が育てば、子が育つ」

#### 内 容

- ・ 最近の事件から
- ・ 大事な「ダイガク」教育
- ・ 良い子も危ない
- ・ 親という字を分析すれば
- ・ 共に育つ親に
- ・ うるおいのある社会に



### 各区の教育を語る会

支 部	日 程	内 容	講 師 等
西	7月4日(月) 11月28日(火)	21世紀に向けた教育について、現在の学校がかかえる問題点	古関昭三氏 支部役員の問題提起
中	6月17日(出) 10月14日(出)	親が育ば子が育つ 今、親として一子育ての基本を考える	中塩屋敏郎氏(元校長) 笠間達男氏(元校長)
南	1月27日(出)	学習指導要領の法的縛束性	永井憲一氏(法政大学)
港 南	6月24日(出)	映画と講演	堀野節雄氏(中学校教員)
保土ヶ谷	10月7日(出)	戦後教育をかえりみて	松井 堅氏(元校長)
旭	6月24日(出)	学校教育の今日的課題	松井 堅氏(元校長)
磯 子	10月14日(出) 2月24日(出)	磯子の教育を語る会	分科会形式
金 沢	2月24日(出)	子どもの心の読み方・育て方	遠藤豊吉氏(評論家)
港 北	1月27日(出)	個性を伸す教育とは	金子 保氏(国際学院埼玉短期大学)
緑 北	5月24日(出)	もう一つの花—私の作品を通した昭和の世界	今西祐行(作家)
戸 塚	1月20日(出)	現代の子どもと教育問題	金子 保氏(国際学院埼玉短期大学)
栄	1月20日(出)	今の子どもたち	斉木孝道氏(県教文研)
泉	2月24日(出)	少年非行について	渡辺 昭氏(家庭裁判所調査官)
瀬 谷	11月25日(出)	別学習指導要領批判	斉藤 寛氏(県教文研)

### 支部別自主編成講座

支 部	日 程	内 容	講 師 等
南	1月27日(出)	学習指導要領	永井憲一氏(法政大学)
港 南	11月30日(出)	学習指導要領について 生活科・中学校選択教科 学校五日制	支部役員
保土ヶ谷	10月28日(出)	新学習指導要領と子ども達の 生き方	永井 憲一氏(法政大学)
緑 北	5月15日(月) 9月19日(火) 11月21日(火) 1月23日(火)	新学習指導要領批判 国労問題 原子力発電の問題 人権教育 一在日問題を中心として	梅原利夫氏(和光大学) 岩沢正守氏(国労生産事業団) 藤田祐幸氏(ルポライター) 斐 重 度氏(川崎ふれあい館)
緑 南	6月6日(月)	生活科・選択教科	海老原治善氏(学芸大学)
栄	7月1日(出) 9月16日(出) 10月14日(出) 12月2日(出) 1月27日(出)	組織について 企業社会と学級教育 在日朝鮮人問題 日の丸・君が代 生活科について	山田喜代司氏(浜教組) 鎌田慧氏(ルポライター) 斐重度氏(川崎ふれあい館) 飯田恵一氏(三教組) 市川 博氏(横浜国立大学)
瀬 谷	10月21日(出)	基地学習会 君が代・日の丸	中尾安治氏(県会議員) 清木 潔氏(小学校教員)
戸 塚	10月19日(木) 1月20日(出)	映画学習会 現代の子どもと教育 について	金子 保氏(埼玉国際学院短大)

### 3. 横浜市教育文化研究所設立10周年記念中国平和教育の旅

市教文研は、設立されてこの方、平和教育の推進を事業の中心に据えてきた。今回10年目をむかえるにあたり、中国平和教育の旅を中華全総工会の協力で実施するに至った。しかし、天安門事件による渡行禁止により、無期延期となった。政状安定後、本事業を復活する予定である。

### 4. 市教文研各種資料作成・購入について

本年度も、定期出版物として「生活指導講座」講演集を発行いたしました。今後、さらに、この事業を発展・充実していく予定です。また、昨年度と同様に、視聴覚資料の充実をはかりました。本年度も、16ミリ・VTRとも大幅にそろえる事ができました。年々、利用者も増加しており、今後、平和教育以外の分野の資料も充実させ広く、父母・教職員の要望の実現をはかってゆきたいと思っています。

### 5. 今後の方向に向けて

今日の教育状況を考えたとき、教文研活動は大変重要な時期にきている。しかし、現状ではこの活動が十分組合員・父母に見える存在となっていない。そのため今まで以上に各地区教組の活動資金を拡充し、活動の充実・発展をはからなければならない。従って現在の授出金の管理運営について大幅な見通しが必要である。浜教組はこれを基本に活動の充実をはかっていく方針である。

(文責・矢羽亮一)

## 横浜市教育文化研究所フィルムライブラリー

### ＜16ミリフィルム＞

○いじめっ子・いじめられっ子	31分	○対島丸	75分
○にんげんをかえせ	20分	○青い目の人形	48分
○予言	41分	○おかあちゃんごめんね	26分
○BOOM	10分	○パパ・ママバイバイ	75分
○もし、この地球を愛するなら	26分	○雨はやさしく	11分
○おこりじぞう	27分	○ゆんたんざ沖繩	110分
○二十四の瞳	75分	○東京広島子供派遣団	35分
○人間の壁	150分	○ムッチャんの詩	90分
○いじめをなくす	33分	○雨はやさしく	15分
○戦場ぬ童	26分	○潜水艦に恋したクジラの話	30分
○海と太陽と子供たち	100分	＜ビデオ＞平和教育関係	

生活指導関係      その他多数



## 横浜市教育文化研究所設立10周年記念

# 中国 平和教育の旅 訪中団募集

組合員の皆さん

主任手当の拠出金で設立された市教文研も、10年の月日がたち各種活動が定着してまいりました。本年は設立10年目をむかえ記念事業として、中国平和教育の旅を企画いたしました。各種記念館・生存者の体験談を聞く会等も含まれていますので、ぜひ、おさそいあわせの上参加下さい。

日程 7月27日(木)

～8月7日(月)

(11泊12日)

費用 336,000円

募集人員 30名

(最低催行人員20名)

※組合員と組合員の家族に限る。

参加多数の場合は抽選させていただきます。

募集期間 5月31日(水)迄

※市ポストにて浜教組本部へ下記  
申し込み書を送付して下さい。

取り扱い業者

財団法人 日本勤労者旅行会

日程表(案)

日数	月 日	都市名	内 容
1	7/27	東 京	中国民航にて大連へ (大連泊)
2	28	大 連	大連市内見学 (沈陽泊)
3	29	沈 陽	平頂山陽明山砲台遺物館見学 (説明を受ける) 柳条湖見学 (沈陽泊)
4	30	沈 陽 ハルビン	沈陽市内見学 国内航空にてハルビンへ (ハルビン泊)
5	31	ハルビン	7.31部隊跡見学 (説明を受ける) 東北烈士記念館見学 (説明を受ける) (ハルビン泊)
6	8/1	ハルビン 北 京	ハルビン市内見学 国内航空にて北京へ 盧溝橋見学 (北京泊)
7	2	北 京	総工会、教育工金関係者と交流懇談 故宫、天壇などの見学 (北京泊)
8	3	北 京	万里の長城、明の十三陵見学 (北京泊)
9	4	北 京 南 京	南京市内見学 (南京泊)
10	5	南 京	南京大屠殺遇難同胞記念館見学 (説明を受ける) (南京泊)
11	6	南 京 上 海	上海市内見学 (上海泊)
12	7	上 海 東 京	中国民航にて東京へ

..... (キ リ ト リ 線) .....

## 申 し 込 み 書

氏 名	年 齢	住 所	印
( ) 学校		TEL. ( )	
( ) 学校		TEL. ( )	
( ) 学校		TEL. ( )	

# ==== 川崎教育文化研究所のとりくみ ====

## (((((「下からの教育改革」に資する文化事業))))))

教職員の教育と文化活動の充実とともに、市民・父母・子ども・青年のための文化事業の創造と発展をめざして「川崎教育文化研究所」の活動を推進して参りました。

商業主義に毒され、マスメディアにのった文化環境にとり囲まれた子ども達に拙くとも手づくりの喜びにあふれた文化体験を提供したいと考え、様々な活動を模索している状況です。

### 1. 事業内容

#### (1) 出版事業

##### ① 教育総合誌「形成」の発行

第6号(3月発行)

##### ② 教文研双書(単行本)の発行

○「心にひびく歌声」 ○「自然を見る目を育てる理科指導」 ○「うさぎの国ができたよ」

##### ③ 教文研ポケット文庫の創刊

○「ボルチモア教育事情」 ○「子どもが訴えていること」 ○「ライブラリー川崎」

#### (2) 川崎教育交流事業の推進

○姉妹都市(ウーロンゴン市)への教育事業視察団を派遣し、ウーロンゴン市(オーストラリア)の視察報告をまとめ、冊子として発行する。

#### (3) 夏休み親子映画会の開催

○「千羽づる」(手島悠介・原作)  
～共同映画(株)製作～

#### (4) 子ども音楽祭の開催

○「子どものための音楽会」の開催(7/26) ○「ボレロ」の実施

### 2. 事業の概況について

#### (1) 出版事業のとりくみ

「下からの市民合意の教育改革」運動を推進するために「学校地域連帯事業」「教育活動活性化事業」のとりくみを積極的にすすめてきたところですが、各地域、各学校の実態に合わせた創意あるユニークな教育実践が展開されつつあるところです。

「地域に開かれた学校」「楽しい学校」づくりの積極的とりくみ事例を教育総合誌「形

成」に掲載し紹介してきた成果とも言えます。

「形成」6号では、学校に「自然園」を地域の人々と協力しながら造りあげ、子ども達に木々や草花、野鳥、虫達とのふれあいを用意しようとした「南原小学校」のユニークな学校づくりの実践例を紹介しています。

## (2) 単行本の出版について

### ① 「心にひびく歌声」(双書No.12)

～輝く中学校生活を支える合唱活動～

川崎市立中原中学校 上田 真生編著 (115頁, 1989.10.20発行)

生徒会活動の中核に「合唱」をとり入れ、15年間に及び、全校教職員、全校生徒の実践した内容をまとめたものです。

合唱を通して、生徒達の心がやわらかくなり、素直になっていく様子が、生徒の感想文からもうかがえて、学校生活に満足感を持たせることの大切さを気づかせてくれます。

一つの学校で、教職員と生徒が一体となって、15年間もの長い間「合唱」にとりくむ情熱とその真摯な姿勢に敬服させられます。

### ② 「自然を見る目を育てる理科指導」

～生活科にも対応できる観察能力の育成をめざして～

(双書No.13) 川崎理科サークル編 (57頁, 1989.11.10発行)

精神論に片寄り、「羨」に始まり「羨」に終ると批判の多い生活科の指導内容に対して現場では、どのような視点でとらえたらよいのだろうか。この本では「低学年における自然観察の芽」を育てることの重要性を次のような事項を通して訴えている。

## I. 自然観察能力はなぜのびないのか

- (1) 子どもの実態
- (2) 観察指導に欠けているもの

## II. 教材研究はどうあるべきか

- (1) 教材研究の視点
- (2) 基礎的・基本的科学概念

- (3) 探求の技法

## III. 具体的展開

- (1) 1～2年生の生物単元の展開

等、理科指導の実践者達が、基礎的・基本的な科学概念と探求の技法を着実に育てていくという立場でまとめたものである。

### ③ 「うさぎの国ができたよ」

(双書No.14)

富川智英子 文

宇田川弘子 絵

(177頁, 1989年12月発行)

1989.12.13 川崎情報 84

### 教文研・双書発行のお知らせ

No.12, No.13

～仲間が創った本を読みませんか～

**【心にひびく歌声】**

川崎教育文化研究所の事業として、教文研双書を発行しております。その中で、「心にひびく歌声」は、本校で、強力推進のとりくみをおこなっています。

輝く中学校生活を支える合唱活動

川崎立中原中学校 上田 真生 編著

中核活動の中心に「合唱」をとり入れ、15年間に及び、全校教職員、全校生徒の実践した内容をまとめたものです。合唱を通して、生徒達の心がやわらかくなり、素直になっていく様子が、生徒の感想文からもうかがえて、学校生活に満足感を持たせることの大切さを気づかせてくれます。

一つの学校で、教職員と生徒が一体となって、15年間もの長い間「合唱」にとりくむ情熱とその真摯な姿勢に敬服させられます。

(販売価格 一、〇〇〇円)

**【自然を見る目を育てる理科指導】**

精神論に片寄り、「羨」に始まり「羨」に終ると批判の多い生活科の指導内容に対して現場では、どのような視点でとらえたらよいのだろうか。この本では「低学年における自然観察の芽」を育てることの重要性を次のような事項を通して訴えている。

I. 自然観察能力はなぜのびないのか

(1) 子どもの実態 (2) 観察指導に欠けているもの

II. 教材研究はどうあるべきか

(1) 教材研究の視点 (2) 基礎的・基本的科学概念

(3) 探求の技法

III. 具体的展開

(1) 1～2年生の生物単元の展開

等、理科指導の実践者達が、基礎的・基本的な科学概念と探求の技法を着実に育てていくという立場でまとめたものである。

(177頁, 1989年12月発行)

富川智英子 文  
宇田川弘子 絵

(販売価格 六〇〇円)

**川崎共からお知らせ**

毎週ご利用  
ありがとうございます

川崎共の発行する「双書」は、各校に配布しております。各校の発行は12/16迄の注文までお受けいたします。

何の変哲もない学校の飼育小屋で「うさぎ」を飼育することになり、こども、教師・PTAの大人達の心が「うさぎ」のとりこになり、「うさぎ王国」が誕生し、うさぎ達の世話活動が続けられる。そこでくり広げられる赤ちゃんの誕生、休み中のえさの心配、人口急増対策、あいつぐうさぎの死、王国の引っ越し、病気……などの事件を通して飼育委員のみならず全校のこども達、教職員、そして、PTAの親達の温かい協力によって「うさぎ王国」は守られていく。

こども達とともに粘り強く、その生命を守る姿を自ら示し、その記録をまとめた担当の教師達のなみなみならぬ熱意が文章のあちらこちらににじみでていて「こどもを育てる」ことの厳しさを考えさせられる本である。

### (3) 教文研ポケット文庫について

#### ① 「ボルチモア教育事情」

(56頁, 1988.3.30)

1979年川崎市が姉妹都市提携をしたアメリカ・メリーランド州の「ボルチモア市」から、交換教員として派遣(1987年より)されて、中学校・高等学校の生徒に英語を指導してこられたハフマン(Mr. John Huffman)先生とモーガン(Mr. Brarnch Margan)先生がその任期を終えられ、帰国される直前にインタビューをしたものです。

川崎の子どもとボルチモアの子どもの比較現在日本の「受験戦争」の落としている影響ボルチモアの高校の現状、軍事教練制度、ボルチモアの教職員組合の様子等、興味深いものばかりである。

#### ② 「アメニティ川崎」

(69頁, 1989.11.10)

新藤 宗幸著

(立教大学教授)

川崎市の「地方自治研センター」の中にある「アメニティ川崎研究会」で進めている川崎という都市の方向性、将来について





# 夏休みおやこ映画会10周年記念特別企画

今までのみんなの思い出が...

神山征太郎監督作品



SADAKO'S STORY

神山征太郎 監督  
神山征太郎 脚本  
神山征太郎 演出  
神山征太郎 監修  
神山征太郎 監製  
神山征太郎 監映  
神山征太郎 監配  
神山征太郎 監発  
神山征太郎 監行  
神山征太郎 監宣  
神山征太郎 監販  
神山征太郎 監配  
神山征太郎 監発  
神山征太郎 監行  
神山征太郎 監宣  
神山征太郎 監販

## 10才になった夏のおやこ映画会

「よい映画を1人でも多くの子供たちに、市民に、より安く！」という願いで始められたこの「夏休み親子映画会」も今年で10年目になりました。  
「夏休みには、平和を考える映画を見よう」という先生方の呼びかけで、この映画会を楽しみにしているお友だちが10,000人以上にふえました。  
この映画は、広島原爆を受けた少女が、明るく、精一杯生きようとする姿やクラスの仲間の温かい友情などみなさんにきっと大きな勇気をあたえてくれることでしょう。

川崎教育文化研究所

■主催／川崎教育文化研究所  
(川崎市中原区下沼部1709)  
TEL (433) 9101

■後援／川崎市教育委員会

■配給／共同映画(株)



(5) 「夏休み親子映画会」について

主任手当の拠出金の一部で1980年11月より継続されてきている事業です。

「夏休み平和学習課題づくり」のとりくみの中にこの映画会を位置づけ、各学校、各学級で呼びかけを行ってきました。

被爆少女を主人公にした「千羽づる」(手島悠介原作)を8会場において上映し、8000人を越える父母・市民・児童生徒の参加の中、原爆の悲慘し、平和の尊さについて理解を広めました。尚、この映画会の10周年を記念して、こどもたちに、オペレッタ「白雪姫」を上演し、父母・市民・こども達に喜ばれました。

(6) 子ども音楽祭の開催 ～ボレロ～

こども・市民に豊かな文化を提供し、地域文化の向上に資する目的で、第3回「ボレロを楽しむ会」を12月10日、幸文化センター・大ホールで開催し、1000名にも及ぶ参加者による演奏を致しました。ラヴェル作曲「ボレロ」のリフレーンのうねりの高まりとともに、感動のうずが巻き起こり、涙する母親もみられる程でした。

(7) 今後のとりくみ

出版事業、教育交流事業、親子映画会、音楽会など、それぞれのとりくみが全市的にも定着し、理解と協力が広がってきているところですが、更に、出版事業の発展・継続とともに、こどもや教職員を励まし、元気づける文化事業の創造に努力していきたいと考えています。

(文責・迎スミ子)



## ＝ 三浦半島地区教育文化研究所のとりくみ ＝

### 1. 1989年度事業計画の概要

1989年度、三浦半島地区教文研事業計画は、下記の通りでした。

#### (1) 基本方針

本研究所は、地域・父母・教職員の要望する教育・文化の課題にとりくみ、その成果を地域の父母や市民に還元します。

同時に主任制度・「臨教審」路線反対の運動を、広く父母・市民に訴えます。

#### (2) 事業内容

##### ① 教育懇談会

イ. 小学校区単位教育懇談会

##### ② 教育研究活動

イ. 教育相談

ロ. 所報「風知草」の発行

##### ③ 教育研究事業

イ. 平和と文化の発展を願い、親と子のためのピアノコンサート

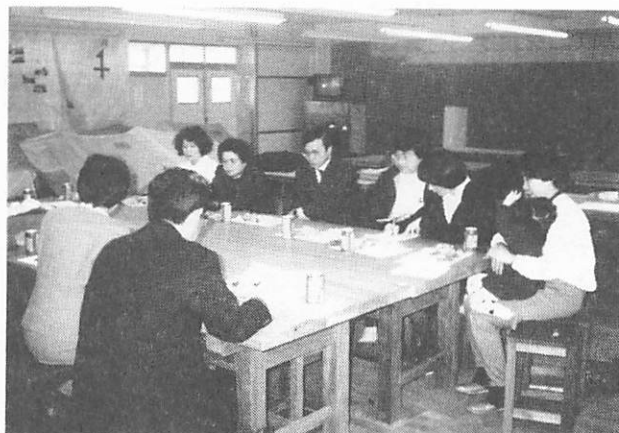
ロ. 反核平和展

#### (3) 事業実施概要

##### ① 教育懇談会の実施概要について

「臨教審」答申にそった上からの「教育改革」に抗し、地域からの教育改革をすすめるために、地域居住者組織による小学校区単位の教育懇談会活動は、7年目を迎えました。

今年度はのべ20回開催され、子どもをとりまく環境や、さまざまな教育の諸問題、平和、地域のかかえる問題について、父母・教職員がひざをまじえて話し合いました。





## ② 教育研究活動

### 〈教育相談活動〉

“グチのお相手いたします”の気軽な呼びかけで、研究専任所員の戸三郎・遠藤 昇・清水昭司各氏による教育相談が、毎日行なわれています。

教職員・父母・子どもたちがはば広く相談におとずれ、好評を博しています。

### 〈所報「風知草」の発行〉

「子どもから学んだこと」をテーマにした現場からの寄稿も含め、教育現場への課題や問題提起を中心に、月2回発行しています。1989年3月末で、93号を数えました。教育関係諸機関も含め、広く配布をしています。

また第1号から第50号までを集録し、冊子として発行しました。

## ③ 教育研究事業

### 〈平和と文化の発展を願い、親と子のためのピアノコンサート〉

平和と地域文化の発展を願い、地域に居住する音楽家によるつどいを5回開催し、900名の参加者がありました。親子で音楽に親しみ、楽しいひとときをすごしました。参加者からは、「これからもずっと続けてほしい」との声が多く聞かれています。

親と子のためのピアノコンサート

3/29(木)	14-	浦賀公民館	220名
3-30(金)	14-	南下浦市民センター	200名
	19-	追浜文化センター	110名
3/31(土)	10-	西部公民館	130名
	19-	文化会館中ホール	240名

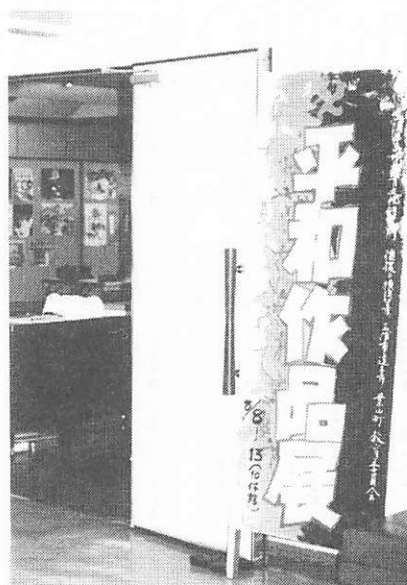


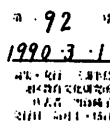
1989年度 教育懇談会開催(抜粋)一覧表

地 区	開催月日	会 場	テーマ (内容)	参加人数
葉 山 地 区	89・6・17	上山口小	子どもたちのあゆむ道 講師一戸三郎氏	70
上宮田小・旭区	89・11・11	南下浦市民センター	<small>シドウヨーリョウ</small> 学習指導要領ってなに 講師佐藤一俊氏	38
豊 島 小	89・12・8	豊ノ坪町内会館	しつけ—家庭と学校の役割—	43
森 崎 小	89・12・26	Aボール	まずみんなが集まり ボウリングを楽しみませんか	16
北 下 浦 小	90・1・27	北下浦行政センター	北下浦の昔話を聞こう	78
鴨居小・光洋小	90・2・2	サンライフ横須賀	学校がこんなに変わってきている 講師一戸三郎氏	52
津 久 井 小	90・2・3	長沢グリーンハイツ 集会所	子そだてについて考えてみたいこと 講師一戸三郎氏	23
野 比 小	90・2・17	志口町内旧館	野比ちょっと昔話	41
鶴 久 保 小	90・2・24	宇東川公園	星座鑑賞会	35
神 明 小	90・3・3	市立工業高校	今教育がかかえている問題を 加藤純子氏をかこんで	15
浦 郷 小	90・3・7	追浜行政センター	子どもの自立について考える	25
鷹 取 小	90・3・8	鷹取中	保健室からみた子どものようす	22
上宮田小・旭小	90・3・16	南下浦市民センター	保健室から見た子どもたち	28

## 〈反核平和展〉

子ども・保護者・教職員から作品を募集し展示しました。子どもたちの自由な発想による作品が胸をうちました。鑑賞された父母・教職員から“このような企画をぜひつづけてほしい”等の感想がよせられました。





「朝で風呂も自分で通てやつて、他の学年のまねも思つたことは、みんなで力を合せて一つものゝどろろとは、いふことだと思つた。文化祭を通して、協力し合うのはいいことだつて、本身にたまになかじやなくて、どう思つた。十年間続いてまた文化祭だ、文化祭で学べることであると思うから、私はは辛辛としていくけれど、これからと続けていつて欲しいと思う。」

右の文は、十一月に行われた文化祭についてのA子の感想文の一節です。

知事に対してされた見方、考え方をし、積極的にねり組む姿勢があまり認められないと思っていたA子、この感想はうれいものでした。A子だけでなく、何人もの子どもたちの日ご

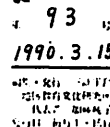
学校の中心的な仕事は、教育課程の編成、実施、評価です。そして、三月はまことに評価の時期です。一年を振り返って、うまくいかなかつたことは、多くの場合、その原因がやとりりのなかから生じています。今日、学校の中下起こっているさまざまな近接現象の元凶は、やとりのなかであるところでもよいでしょう。やとりには、精神的余裕と物理的（時間的）余裕の二つが考えられまうが、今、学校には、両者ともないというところで、

首の中心で

いちばん肝心なと

信濃關係をなれば、投交時間中  
です。猶か「この先生の一言は、  
子どものちにと」ではどこのオバサ  
子のごまと同じであり、子どもたちを  
「この一言と同じく、子どもたちを」  
理解していない先生の一言は、子どもたちの心に響  
いていかないうち、子どもに持たせかけ子ども  
の持たせかけとなり、子どもに確信させ、こ  
れは、学校や教師の最大の緊急課題です。

ろとは異なつた。面々、文化祭で兎つて見た。  
創は、日子・子一の二人が、台本集から探し  
出して、青年団会に提交し、採用されたものでし  
た。全篇にせりふを割り出つてゐるのに、台本を  
少し出した。仲間と相談して、衣笠・小道具  
をあれこれと用意したりしてゐるこの二人の  
様子に、生々しくして實に激しううすした。  
また、控えめの日男が、「六年生だし、思い  
まつてやうと思つて」さうして取り組ん  
だ間金某の司金役、緊張感と味ひ、それか  
とでも氣持を賣がつたという感ぜられた。  
時々、執事室へふるまひやイタズラをする日男  
が、「迷路」の食糧にやつてきた一年生たちに  
説明してゐるのをやさしい態度。  
いつもは何かといふと、だけれども頑りからな  
い男が、大道具係の仕事を責任もつて進もう  
としたこと。等々。  
子どもたちが、積極的に主体的に取組み活  
かしてゐる様子、どれだけ、また、どのように用  
意するかが、教師の大切な仕事なのだ改めて  
考えさせられた。  
(大編小 友田 暁子)



恩和算科では、算数・数学がすべて、小学校の日は自分から片やけだとかめつて、小学校のときからお古物屋に抱き付けている中学二年の生徒も、なんとなくしたいと心を砕いている。坂本中学校道の山口先生生の原稿を掲載しております。敬道先生の遺志を品生の調査によりますと、小学五年の児童に對する「算数」として書きなす「算数」も「子がい」なるのだと思ひますかとの問いかけに對し、「生れつゝ書き(得意)」だから」と答えている子が、それぞれ(四%)います。

「バカ」とか、「生れつゝ書き」とかは、俗にいう「頭がある」といふ方と似てゐています。算数・数学ができてゐないは、能力や過程のあろうなしとほとんど関係がないのか

下りる

叶

したがつて、種別評価によつて、  
 や「2」の成績を得られたり、算数が  
 できなかったりしたため、自分が嫌  
 がわりのだとして、思い込み思い込ま  
 れて、小学校低学年のときから、能力  
 を形成する努力を怠つて人生を下りて  
 しまふが、少なからずいるというこ  
 による問題といわなければならないこ  
 題が、いといかわるゝといふは、能力にかかわる  
 問題ですが、医師の石川寛彦さん（小児神経科  
 昨年の三教組教職研究会会長）は、「学校の先生  
 たちのいうのは」と違ふようである。こ  
 ながら、「医者には」とあると、最低限能力  
 たす方がいいけれど、小学校一年生の算能力とが  
 と算数の計算力、中学校一年生の英語力とが  
 りてゐるけれど、あとに医師を出てから得た知  
 識で医師はやるんです。少なうとも私の日  
 がそうなのですよ。たいていの職業はそうで  
 しょうとおっしゃっています。石川さんは、現  
 実に教室で低合つてゐる知識とは何かを問題  
 にし、そのこととの関連でこのように発言さ

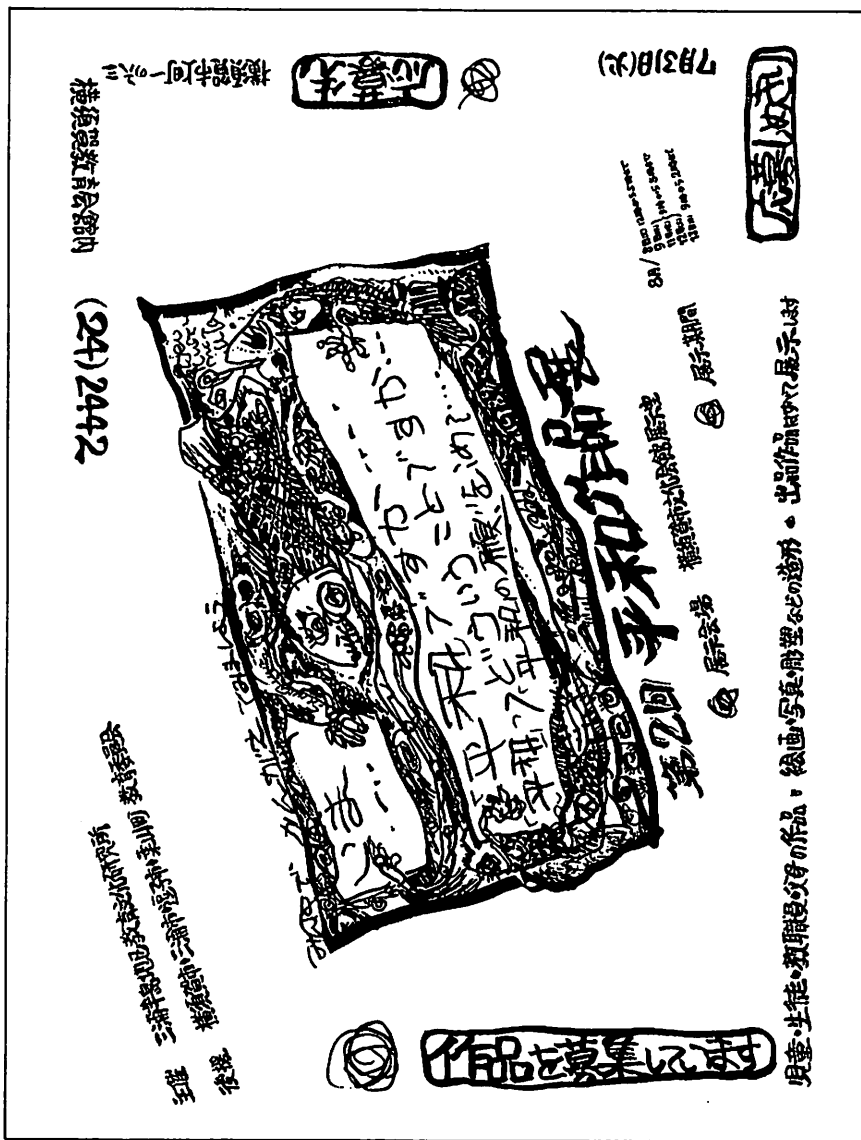
人

能力

能力と知的能力、技能、感情能力、  
 態度能力の四つに分けられた場合、態度能力と  
 いわれるものです。実社会でいうばん物屋主の  
 のはこの態度能力です。テストの点が悪く退学  
 という名のたつた一本ののたつた一本の能力  
 能力のあるさあ、いふもので、この一本の能力  
 観は、態度能力や感情能力を全く評価しないから  
 「算数・数学ができてゐないのは果があるから  
 だ」、「能力は生まれてゐる大人にならなまて受  
 らない」などの、逆作の呪縛をどのように解い  
 てやめ、態度能力や感情能力などのように育  
 て評価したらよいか、来年度の課題の中にせし  
 ともお入たいのです。

石川寛彦「影と向きあふ教育と治療」一  
 九八四年 光村図書（朝日カルチャー最書）

## ＜第2回平和作品展＞



## 今後の課題

- 1.教育相談の充実。相談者の中には継続的な課題をもつ人もあり、相談者との関係をたちきることはできません。三教組運動と連携をとりつつすすめます。
- 2.平和・人材教育の発展。日常的なさまざまな差別について考えるような資料の提供を行います。
- 3.地域の文化の創造。その観点を明らかにして地域居住者組織とも連携をとりつつ可能なところからすすめます。

(文責・飯田恵一)

# ==== 湘南教育文化研究所の活動 ====

## 1. 活動の基本方針

湘南教育文化研究所は発足以来、地域に根ざした教育文化を父母・住民とともに創造することを目的に、学習会、出版活動、フィルム・ライブラリーの整備、映画会などの活動を続けてきました。

今年度は特に規約・機構の整備を中心に、学校と地域とを名実ともにつなぐ場として、体制の確立をはかりました。

## 2. 事業の内容

### (1) 親子映画会

毎年恒例となっている夏の「親子映画会」は、89年度は共同映画制作の映画「千羽づる」を上映しました。

7月16日から8月12日にかけて、4地区7会場で開催し、好評を博しました。

特に藤沢市では、市職員組合との間で結成されている「公務員共闘」との共催のかたちがとられ、幅広い事業となっています。

日程はつぎの通りでした。

7月16日	藤沢市辻堂市民センター
18日	茅ヶ崎市労働会館
19日	藤沢市労働会館
21日	藤沢市大庭市民センター
26日	鎌倉市勤労福祉会館
27日	茅ヶ崎市民文化会館
8月12日	寒川町民センター

### (2) 教育文化講座

教育文化講座は、89年度は改訂学習指導要領をめぐる問題を中心に、「連続講座」として設定しました。

また、「評価 指導要録」「障害児教育」についても、ひきつづき講座を持ちました。

#### ① 「改訂学習指導要領批判 総論編」

講師 梅原 利夫氏 7月13日

あたらしい告示された学習指導要領はどのような特徴を持つのか。また、その背景にあるものは何か。それらの分析の上に、私たちのとりくみの方向性をさぐる。

#### ② 「生活科の問題点と自主編成の方向」

講師 渡辺 顕治氏 9月12日

「生活科」とは、何か。単に批判するのみではなく、それを実践的に乗り越える

自主編成の方向を考える。

③ 「『日の丸・君が代』と指導要領の法的拘束性」

講師 梅原 利夫氏 2月26日

「日の丸・君が代」の歴史的な性格と、それが今日強制されようとしていることの意味。さらに指導要領とはどのようなものなのかの検討しつつ、今後のとりくみの方向性をさぐる。

※ なお、これら3回の講演記録を「改訂学習指導要領批判シリーズ」として発行し、教職員のみならず、地域の教育サークルなどでの学習資料として提供しました。

④ 「『障害』児教育学習会」 1月24日

運動の前進の中で、中学校を普通級で過ごす「障害」児が増えてきた。しかし中学卒業後の進路について、課題はまだまだ大きい。

「障害」児の中学卒業後の進路を考えるシンポジウム

⑤ 「評価・指導要録学習会」 2月2日

「評価」や「指導要録」の問題を通して、「教育」や、「学校」そのものを問い直す。

(3) 教育懇談会

指導要領、とりわけ「日の丸・君が代」の強制に見られるように、上からの教育統制はいつそう強められようとしています。

いま、地域からの教育論議をまきおこしていくことはなにより重要です。

湘南地区では、小学校区・中学校区単位の教育懇談会を通年的に開催してきました。今年度はのべ163ヵ所、4688名の父母・地域住民・教職員の参加がありました。

(4) 「登校拒否」を考える交流会

「登校拒否」が問題となっている一方で、多くの子どもが、親が、そして教師が、孤立したまま悩んでいる現実があります。

湘南教文研では、おもに「登校拒否」をはじめた子どもを持つ親の声を聞き、話し合いを深める場として、「『登校拒否』を考える交流会」を11月6日と3月3日の2回、開催しました。

「登校拒否」とひとくちに言っても、その内容は千差万別です。

しかし、「登校拒否」をはじめた子を持つ父母の声に耳を傾けると、実は私たち教職員自身のありようが、なにより問われていることを痛感します。

「登校拒否をどのように『治療』するか」ではなく、「どんな子ども安心して通える学校をどのようにつくるか」が課題かもしれません。

(5) 教文研ライブラリー

湘南教文研のビデオ・フィルムライブラリーは、89年度は平和教育資料を中心に、いっそうの充実をはかりました。

また、地域の教育文化の創造をめざし、地元で進められている映画制作に協力、フィルム購入をおこないました。

### 3. 今後への課題

従来、湘南教文研には整備された規約・細則がなく、その機構も十分なものではありませんでした。

89年度、規約が制定されたことで、90年度からはあらたな研究体制のもとに出発することになります。

「父母とともに」進める運動であるためには、父母の参加を呼びかけるだけでなく、私たちがまた父母のところへでかけることが必要です。

名実ともに、地域の教育運動のセンターとして、教文研を発展させていかなくてはなりません。

(文責・竹村雅夫)



改訂学習指導要領批判 I

## 「総 論 編」

講 師 梅 原 利 夫 氏

1989. 7. 13

湘南教育文化研究所  
湘南教職員組合 教文部



## 「登校拒否」を考える交流会へのお誘い

湘南教育文化研究所

「登校拒否」で休みはじめた一日、二日は、子どもにとって一年にも相当するくらい、たいへんな苦行なのです。という、母親の話を聞きました。

「登校拒否」の子は、どのような気持ちで学校生活を過ごしてきたのでしょうか。また、父母は、子どもをどのように見ているのでしょうか。教員は、どのような対応をするのでしょうか。

ひとりひとりが平等に教育を受ける権利を持っているはずなのに、競争原理・受験戦争に明けくれている学校現場で毎日を通そうとしても、どだい息が詰まり、学校へ行くのをためらってしまうのも、あながち一部の特異な現象と決めつけねことはできないでしょう。「登校拒否」が最近著しく増えてきていることは、それだけ学校が行きづらい場になっていることを反映しているのではないのでしょうか。

私たちは、これまで教職員と親の会が話し合いを持ちながら準備を進めてきました。

私たちは、これまで教職員と親の会が数回の話し合いを持ちながら準備を進めてきました。

私たちは継続的にやっていこうと考えています。まずは第一回め、皆様、多数お誘い合わせのうえ、ご参加ください。

### 「登校拒否」を考える交流会

日 時 1989年11月18日(土) 1時30分～4時  
会 場 藤沢市立大道小学校 (裏面の地図をごらんください。)  
話すひと ・親の立場から  
・「藤沢まわり道の会(親の会)」  
・担任の立場から 小学生の場合  
中学生の場合

主 催 湘南教育文化研究所 ☎ 0466(82)8811

## 湘南教文研ライブラリー

### 16ミリフィルム

- ・あやまちはくりかえしません
- ・戦場ぬ童
- ・おこりじぞう
- ・沖縄戦 ―未来への証言
- ・さよならカバくん
- ・せんすい艦に恋をしたクジラの話
- ・戦争・子どもたちの遺言
- ・日本国憲法
- ・にんげんをかえせ
- ・ひろげよう平和憲法
- ・ひろしまのエノキ
- ・もうひとつのヒロシマ
- ・ゆんたんざ沖縄
- ・予言
- ・侵略

### スライド

- ・許すなトマホーク
- ・小田原にも空襲があった
- ・スライド 原爆の図

### カセット

- ・ガラスのウサギ

### レコード

- ・ドキュメンタリー 東京大空襲
- ・光州 City

### ビデオ

- ・明日 1945年8月8日・長崎
- ・生きている昭和史
- ・いのち 死ぬなんて早すぎる
- ・栄光の代償
- ・―兵士が語るフォークランド戦争―
- ・核燃料輸送追跡の記録
- ・風が吹くとき
- ・風の谷のナウシカ
- ・危険な話
- ・きみはヒロシマを見たか
- ・教育二法
- ・銀河鉄道の夜
- ・黒い雨にうたれて
- ・「授業」シリーズ 6巻
- ・性=生
- ・戦争・子どもたちの遺言
- ・それでもあなたは食べますか
- ・核戦争後の地球 第1部・第2部
- ・チェルノブイリ・クライシス
- ・チェルノブイリ・シンдрーム
- ・翼をください
- ・天空の城 ラピュタ
- ・となりのトトロ
- ・夏服の少女たち
- ・生存者が語る ―南京大虐殺
- ・二年あい組
- ・人間の条件 第1部～第6部
- ・にんげんをかえせ
- ・はだしのゲン
- ・パパ ママ バイバイ
- ・火垂るの墓
- ・ヒロシマから子どもたちへ 全3巻
- ・僕の村は戦場だった
- ・ゆきゆきて神軍

# 湘北教育文化研究所の活動

## 1. はじめに

湘北教育文化研究所は1980年の発足以来、さまざまな活動を行ってきました。

湘北教文研が事業を行うにあたっての視点は次のとおりです。

- (1) 主任制反対闘争の一環として教育研究活動があることを認識し、教育現場からの国民合意による教育改革をめざし、民主教育と望ましい文化を確立するために研究する。  
また、教育現場・父母県民・子どもたちにその成果を還元すること。
- (2) 教文研活動と教組運動の一体化をはかっていくこと。
- (3) 今日的な社会問題にも対応していくこと。

## 2. 1989年度事業の概要

1989年度、湘北教文研事業計画は、下記のとおりでした。

- (1) 教育実践講座のとりくみ
- (2) 教育文化講座のとりくみ
- (3) 現代教育の抱える問題点についての研究
- (4) 教文研だよりの発行
- (5) 父母・教職員の教育資料の充実

### (1) 第2回 明日の授業に役立つ教育実践講座

昨年度より「わかる授業」「楽しい授業」をめざし、教師の力量向上をはかるため、「教育実践講座」を開催しました。2回めということで参加者も大はばに増え、とても充実した講座となりました。また、この講座の特徴として、講師と参加者が和やかな雰囲気の中、熱心にとりくんでいるということがあげられます。

#### ◎2日間コース

##### Aコース(7月27日, 28日)

「郷土の地層に学ぶ」

町田 洋先生(都立大学教授)

マイクロバスにより「座間市」から「大磯町」まで、地層の露出したところをいろいろと訪ねました。

##### Bコース(8月2日, 3日)

「原始時代の技術に学ぶ」

関根 秀樹先生

(原始技術史研究会代表)

原始技術の中の楽器作りを中心に実習を行いました。

##### Cコース(8月4日, 5日)

「レクリエーション入門」

波多野 良子氏

(県レクリエーション協会常任理事)

井上 桂氏

(厚木市立愛甲小学校教諭)



「ゲーム」・「レク」や「ウォークラリー」などを参加者全員で行い、「手品」を学習しました。この講座をきっかけとしてリクリエーション指導員の資格をとった方も多数いました。

### ◎1日コース

D・Eコース(8月10日, 11日)

「三原色で宇宙を描く」 松本キミ子先生(仮説実験授業研究会会員)

誰にでも上手に絵が書けるといふ「キミ子方式」でスイカの絵に挑戦しました。

### (2) 明日の教育を考える教育文化講座

「今日的な教育問題」というテーマのもと、学校現場における課題と地域に根ざした課題という2つの柱で講座を地域に設定しました。

●第6回 1989年度教育文化講座

## あすの教育を考える

主催 湘北教育文化研究所

講師 梅原 利夫氏  
—新指導要領を考える—

個々の都市や学習指導要領についての分析や検討を行いながら、私の一貫した関心は、教育実践の場面に迅速に生きて働いている教育課程の姿を明らかにすることである。教育課程は一種のプラン(教育計画)ではあるが、決してプランに縛られるものではない。また、子どもから最も近い存在にある権力機関が、「国証」のために方針を縛りあげ、それを現場で忠実に実行させる「指導要領」でもない。

会場案内図

1. 日時 1989年6月10日(土) PM 1:30開場 PM 2:00開演  
2. 場所 (財)相模原教育会館(入場無料)  
※これらの取り組みは、主任手当拠出金で行っています  
事務局 湘北教職員組合 ☎(0427)53-3

●第7回 1989年度教育文化講座

## あすの教育を考える

主催 湘北教育文化研究所

講師 森 正孝氏  
「平和教育への視点」  
—侵略・勝たれなかった戦争— (11%記録映画上映)

過去の事実を直視し、そこから発展して学ぶことを通じて、今を生きて、これから生きるための教訓とすることこそ最大の目的がある。その歴史的事実がどのように日本人にとって不都合な事実として明らかになることによって初めて、私たちの今日と未来の生き方が決まると思うのだ。

会場案内図

1. 日時 1990年2月3日(土) PM 1:30開場 PM 2:00開演  
2. 場所 海老名商工会館(入場無料)  
※これらの取り組みは、主任手当拠出金で行っています  
事務局 湘北教職員組合 ☎(0427)53-3092

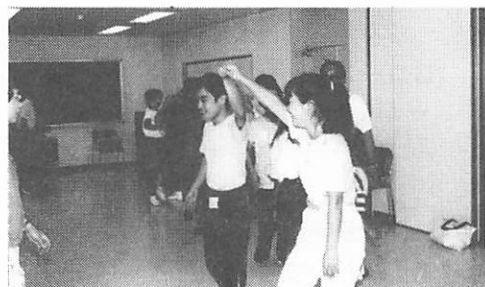
### ◎第6回 教育文化講座

「新学習指導要領を考える」

講師 梅原 利夫氏

(和光大学助教授)

今回の「改訂学習指導要領」の問題点の指摘やその克服にむけてのヒントをお話いただき、それらについての質疑応答がありました。



◎第7回 教育文化講座 「平和教育への視点 — 侵略・語られなかった戦争 —」

講師 森 正孝氏(静岡市立服織中学校教諭)

「侵略 PART III 語られなかった戦争・南京」を視察し、日本の行った歴史上の事実から、平和教育についての考え方を講演していただきました。

◎第8回 教育文化講座 実践記録映画「芽をふく子ども」

「芽をふく子ども」を視察し、その後参加者全員で、話し合いを行いました。

◎第9回 教育文化講座 「鳥からみた生態系」

講師 神保 健次氏(野鳥研究家)

厚木市七沢に生息している「ヤマセミ」の生態をスライドを使いながら説明し、地域の方々との交流を通してヤマセミの住める環境を守ることの意義と大切さを話されました。

(3) 研究及び湘北教文研だよりの発行

87年度以降テーマとしてきた「現代教育の抱える問題点についての理論的実証」を今年度も継続し、平和教育を中心に据えた研究を行ってきました。また、その研究の中心となった推進委員の先生方の実践レポートや地区教研での講演の内容などを中心に「湘北教文研だより」や「教育文化」を発行し、広く湘北地区内に教宣しました。

◎教文研だより 第5号

「環境保全と新学習指導要領」(田中雅博)、「コンピュータは、どこまで使えるか」(今井一男)

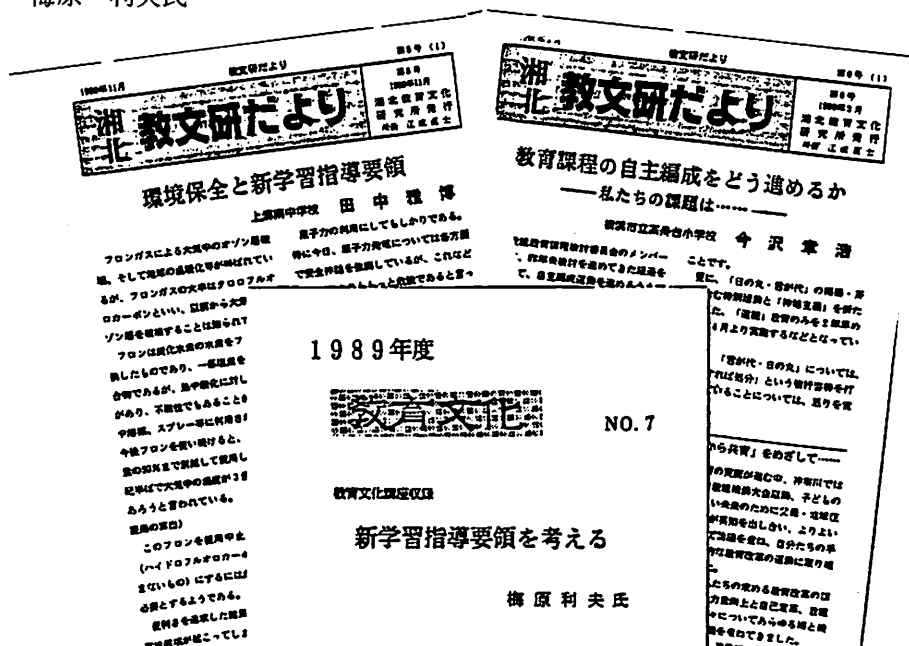
◎教文研だより 第6号

「教育課程の自主編成をどう進めるか — 私たちの課題は…… —」(今沢章浩)

◎教育文化 No.7

教育文化講座収録「新学習指導要領を考える」

梅原 利夫氏



#### (4) 湘北教育文化研究所視聴覚資料

父母、教職員の教育資料として別表(次ページ参照)のようなフィルム・スライド・ビデオをそろえ、今年度は新着フィルムの紹介を兼ねた映画会を2回行いました。

第1回 「海と太陽と子どもたち」

第2回 「24000年の方舟」

#### (4) 湘北教育文化研究所視聴覚資料

16ミリ・8ミリ映画			スライド・ビデオテープ		
題 名	時間 (分)	種類	題 名	時間 (分)	種類
明日への伝言	8	ドキュメント	原爆の図 スライド	15	57コマジュニア編
にんげんをかえせ	20	"	ひろしまを見たひと "	25	81コマ総合編
予 言	41	"	小田原にも空襲があった "	13	53コマ
悪魔の火球	5	"	あなたはそれでも原子力発電所を選びますか "	30	80コマドキュメント
ピカドン	10	アニメ	ヒロシマから子どもたちへ Vβ	(1)22 (2,3)24	ドキュメント
おこりじぞう	27	"	核戦争後の地球(全2巻) V	各30	"
8月9日長崎	10	ドキュメント	風の谷のナウシカ Vβ	116	アニメ
ヒロシマの詩	11	アニメ	はだしのゲン Vβ	85	"
ふるさとの動物園	24	"	ひとすじの道 Vβ	37	ドキュメント
トビウオのぼうやは病気です	19	"	キティ、アウシビッツに帰る Vβ	120	ドラマ
子どもたちの昭和史	55	ドキュメント	野坂昭如講演会 V	120	講演会
もしこの地球を愛するなら	55	"	銀河鉄道の夜 Vβ	107	アニメ
戦争—子どもたちの遺言—	53	アニメ+実録	授業としての入学試験 Vβ	120	ドキュメント
戦場ぬ童(いくさばぬわらび)	26	ドキュメント	大地の冬のなかまたち Vβ	65	ドラマ
沖縄戦—未来への証言—	55	"	ともだち Vβ	86	"
熱い街 白黒	44	"	アフリカの鳥 Vβ	86	"
たとえば障害児教育	90	"	4年3組のはた Vβ	86	"
妊娠と出産	20	"	先生のつつしんば Vβ	93	"
100ばんめのサル	20	アニメ+実験	走れ!マトーにっぽん横断300キロ Vβ	95	"
雨はやさしく	11	アニメ	風が吹くとき V	85	アニメ
歴史(核狂乱の時代)	1116	ドキュメント	スノーマン(The Snowman) V	26	"
パパ ママ バイバイ	70	アニメ	北極のムーシカミーシカ V	80	"
ゆ き	90	"	チェルノブイリクライシス Vβ	57	ドキュメント
核戦争	15	"	チェルノブイリシンドローム Vβ	92	"
侵 略 8ミリ 白黒	40	ドキュメント	妊娠と出産 V	20	"
侵略原史 " 白黒	40	ドキュメント	危険な話し'88 V	90	講演会
海と太陽と子どもたち	100	"	それでもあなたは食べますか V	30	ドキュメント
24000年の方舟	33	"	生存者が語る南京大虐殺 Vβ	28	ドキュメント
日本国憲法	15	アニメ	火垂るの墓 Vβ	90	"
おにたのぼうし	18	"	はだしのゲン2 Vβ	90	"
せんすい艦に恋したクジラ	15	"	にんげんの詩 V	26	"
			沖縄戦争未来への証言	55	ドキュメント
			軍都からの出発・他	120	"
			日の丸と君が代	32	"

#### 今後に向けて

- (1) 内容の充実が見られる反面、参加者数の増加が見られません。今後、広報活動に力を入れていきたい。
- (2) 教文研推進委員会の位置づけを再考するなかで、個人研究にとどまらず、組織的継続的研究にまで発展させ、教文研活動の活性化をはかっていきたい。

(文責・高木孝)

# ＝ 中地区教育文化研究所のとりくみ ＝

## はじめに

中地区教育文化研究所は、父母、地域住民とともに知恵を出し合いながら、創造的な教育文化活動をめざすという設立の意義のもとに、様々な教育文化事業を推進してきました。

今年度も四つの基本方針のもとに、日々の教育実践活動を中心として、教育懇談会、教育講演会、親と子による映画会・写生大会等の活動を実施してきました。

## 事業の基本方針

- (一) 子どものよりよい成長と生きる力を培う文化活動の充実。
- (二) 教職員の見識を高める文化活動の充実。
- (三) 父母・地域労働者との連帯をはかりつつ平和教育をつくる。
- (四) 講演会・研究会・学習会等を開催し、問題の共通理解と深化をはかりながら、父母・地域労働者の協力体制づくりをめざす。

## 1990年度の主な事業

- ・ **教育実践学習会**
  - 第一回 「平塚空襲を通しての平和教育」
  - 第二回 「子どもが進んで動き出すとき」
  - 第三回 「子どもが生き生きと取り組む、図工美術教育」
  - 第四回 「子どもが進んで動き出すとき。(オープンスペースを活用して)」
- ・ **教育講演会**
  - 第一回 「今、広島から学ぶ平和教育、パートⅡ」
  - 第二回 「子どもの教育を考える時、忘れてならないもの」
- ・ **親と子で見る映画会**
  - 平塚会場・伊勢原会場・秦野会場・中郡会場
- ・ **親と子による写生大会**
  - 平塚会場・秦野会場・伊勢原会場・中郡会場
- ・ **機関誌発行**
  - ひらく「5号」、「6号」発行
  - 90年度「所報」発行
  - 障害児教育研究だより発行
- ・ **障害児教育懇談会開催**
- ・ **平塚市障害児学級卒業生を励ます会の開催**
- ・ **各種研究委員会の開催**
- ・ **教育懇談会の開催**（全中学校区にて実施）（第二回教育講演会より）



## 事業活動報告

### 1. 地域文化研究委員会

#### (1) 親と子でみる映画会



第16回をむかえた「親と子で見る映画会」は、四会場でも大盛況のうちに終わった。一番大きな平塚会場での開催が大雨になる等、二会場で雨に降られたが、3000名を越える参加があった。映画の選定については、地域文化研究委員会で事前に試写をして決めてきた。今回は四会場すべて同じ映画で、「さよならカバくん」「宝島」の2本を上映してきた。2本とも参加した子どもや父母が一生懸命鑑賞し、アンケートに対してもいろいろな感想がよせられた。

#### <映画会に参加された父母のアンケートより>

子どもの心に愛と希望・知恵と勇気を!

## 第16回 親と子で見る 映画会

日時・会場・上映作品

会場	上映作品	上映時間	上映料金
平塚市立平塚小学校	「さよならカバくん」	14:00	100円
平塚市立平塚小学校	「宝島」	14:00	100円
平塚市立平塚小学校	「さよならカバくん」	14:00	100円
平塚市立平塚小学校	「宝島」	14:00	100円

中地区小・中学校の児童・生徒と保護者の方々

主催 中地区教育文化研究所  
協賛 中地区教職員組合  
協賛 平塚市教育委員会  
協賛 伊勢原市教育委員会  
協賛 大磯町教育委員会  
協賛 二宮町教育委員会  
協賛 三浦市教育委員会  
協賛 教育を守る会 平塚支部  
協賛 教育を守る会 東野支部

入場は無料です。

#### 「さよならカバくん」について

- ・私は戦後生まれてその体験はないけれど、人間も動物も命とひきかえにできるものはない、すべてのものを奪ってしまう戦争は二度と繰り返してはならない事を子どもと共に話し合っていきたい。
- ・今は物が豊かで、何でも手に入るけれど、戦争中は食べ物がなく苦勞している。勉強したくてもできず、食べる物もない事を考えれば、今生きている事がどんなに幸せな事なのか、しっかりと心に残るように子どもに話していきたい。
- ・子どもが横で泣いているのをみて、この映画会にきてよかったと思います。これからも反戦 平和を訴える映画を続けてほしい。

#### 「宝島」について

- ・夢があり、一つの事を最後まであきらめずに追求する強い意志に感動した。

#### <映画に参加した子どもの感想>

- ・「さよならカバくん」をみて、自分は食べたい時に食べる事ができて、とてもぜいたくだと思う。
- ・カバが赤い汁を出すなんて知らなかった。とてもつらかったんだろう。動物園のおじさんもつらかったろう。なぜ戦争なんか起こしたんだ。二度と戦争は起こしてはならないと感じた。



## (2) 親と子による写生会

### ＜参加された父母の声＞

- ・中何年かぶりで筆をとり、楽しいひとときを過ごしました。我が子と一緒に絵を描き、貴重なふれあいをもつ事ができた。

## 2. 教育課程研究委員会

- ① 教育課程研究委員会の活動を平和教育を推し進めるための核としていくこと。
- ② 身近なところに目を向けること。
- ③ 生命の尊重を基本とすること。
- ④ 平和教育実践のための資料を収集・作成すること。
- ⑤ 七・五「全県平和教育の日」に組織的に取り組むこと。

### (1) 教育实践学习会

[illegible]

というテーマで、平塚空襲を題材に当時

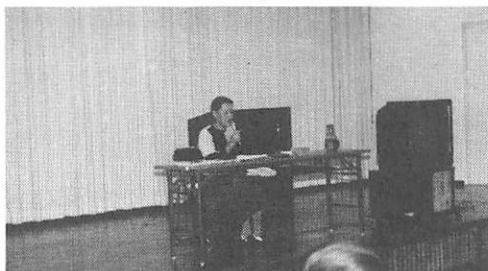
の被害の様子を貴重な写真や実物の焼夷弾、病院カルテ等を使って、詳しく説明していただきました。参加した分会員も、「地元でもあんなにたくさんの人が犠牲になっているということを初めて知りました。」「戦争のむごたらしさ、恐ろしさ、そして平和の大切さを子供たちに伝えていく責任がある。」等、たくさんの声が寄せられ、学習を深めることができました。

## (2) 七・五「全県平和教育の日」の取り組み

この取り組みも4年目となり、その存在は分会員にも浸透してきたように思われます。今年度は「中地区独自の資料を」という声や、「読み物だけでなく、数字面での詳しい資料を配布してほしい」という前回の反省をふまえ、小学校向けに地元に住む宮川氏の体験談「学童疎開とそのあとさき」、中学校向けに「平塚空襲」の資料を全分会員に配布し、7月5日を中心に各分会で朝の会や授業の中で平和教育の実践に役立ててきました。

## (3) 平和教育講演会

11月29日に、神奈川県原爆被災者の会・平塚支部会長の大井輝子氏をお迎えし、自らの被爆体験を130名の分会員の前で語っていただきました。ガラスの破片を体に受



けながらもわが子を必死に抱きしめたこと等、当時の生々しい体験を話された後、大井さんは、「皆さんは、私の被爆体験をどう子供に伝えてくれますか。」と尋ねられました。被爆体験を聞くということは、教育者の責任として被爆の事実をどのように考えそれをどのように次の世代に伝えていくかであり、問う側の主体性が厳しく要求された講演会でした。

## (4) 第38次全国教研還流報告集会

研究員の代表が、全国教研平和教育分科会に参加し、各県の取り組みを学び、2月の中地区教研にて報告し、今後のあり方について論議を深めました。

## (5) まとめ

今年度も、地域に根ざした平和教育をテーマに、数々の活動を行ってきました。上にあげた以外にも、教育実践学習会の話のもとに学区の戦死者の墓を調べ、年代別の戦死者数をまとめ、さらにその戦死場所も調べ地図に表し、計画的に授業を行った実践教育や、子供たちが地域のお年寄りの戦争体験を聞き、教室で発表した実践なども行ってきました。今後も中地区の平和教育の推進のため、身近な平和教育資料の収集、授業実践、教文ライブラリーの充実など、地道に活動を行っていきたいと考えています。

## ◆◆◆◆◆ その子の行動を視つめる ◆◆◆◆◆

授業以外の仕事に追われているなかで、こどもの仕事について、つい見失いがちになってしまうことがありますか。そのようなとき、どの授業、生活でもよいですからこどもの様子についてメモをしてみると、いままで漠然としてた事が、少しなりとも表われてくるかもしれません。

たとえば、このメモ（図工）をもとにみえてくるこどもの姿は、じっくり型の子・いきなり型の子・なんとなく型の子・わかんない型の子・だんだん型の子・ひらめき型の子・お話型の子・こしゅう型の子・さつと型の子など、こどもの一面をみせてくれます。

また、ほかの教材などでメモをとることによって、ちがうこどもの一面が表われてくるかもしれません。

このようなことから、日々接する子どもたちに話しかける言葉などには、いつも視つめているとい

6月21日 水曜日 天気

朝				
時 間	教 科	内 容		メ                      モ
1	国 語	しっぽのやくめ	Si 男	どうろづくりにせんねん・30ぶんごにボールいれふたつき・はんこ・ころっけ。
2	算 数	ひ き ざ ん		
③	図 工	ねんどでなんでもつくろう ↓	SYo 男	かいじゅうづくり・30ぶんごにきし・まち・えきをつくる。
④	図 工		Ka 男	まるめるだけ・30ぶんごにむかしのさができた。やっとできたんだよ。45ぶんごにそらとぶさいができた。
休				
そ う じ			Mo 女	まだわかんない・20ぶんごにわかった、こびとのうち。つくりかえてつなげる。
5				
備 考		Ni 男	I 女	まだつくってるからわかんない。45ぶんごへんなおじさんができた。
おもにつくるもの どうぶつ・やま・かいじゅう・だるま・せいかつ……		1じかんでぜんぶつくったあとは、フラフラ（できればえはよい）	No 女	おはなをいっしょうけんめいにつくる。とつぜんケーキにかえるといてくる。

う心のこもった言葉として、心のかよいあうこともできるのではないでしょう。見ることから、観ることへ、そして視つめることの大切さが、次の手立てになり、子どもの姿を変えていく一歩になるのではないでしょう。

### 3. 授業・行事づくり研究委員会

昨年度までが、大きく捉えて“教師編”（教師というもの・自分というもの）を見つめ直し、自分を取り戻していく試みであったならば、今年度は、さらに、子どもの側から教師自身、授業のあり方、子どもを取りまく環境等、子どもが変わっていく要因を見出しながら、「子どもが変わるとき」の問題に迫りたいと考えた。

授業、行事づくり委員会のメンバーが、それぞれの現場から、それぞれの実践を持ち寄り、どのような願いを持ち、どのような学習を展開し、子どもの問題をどう解決していこうとしているのかを知り合い話し合ってきた。今年度も以上のような視点にたち、教育実践学習会を中心に研究を進めてきた。

## 授業・行事づくり研究委員会

### ●先生や友だちからの励まし

#### 賞賛の一言を

小学校低学年の頃は教師や親たちなどの大人からの励ましや賞賛によって学習意欲が高まる傾向が強い。それが次第に学年が進むにつれて、大人からよりも友だちからの励ましや賞賛によって学習意欲が高められる傾向が強くなる、つまり学年が進むにつれて、友だち（学級集団）からの影響が大きくなると言える。

例えば図工で作品が仕上がった後に、互いに観賞し合うときなどは、高学年ほど周囲の反応をととても気にする傾向がある。

児童のこのような傾向をとらえて、本年度の研究主題の「子どもが変わるとき」を考えてみると、教師からの影響力よりも学級集団における児童相互の影響力に

ついて考えていく必要に迫られる。

学級集団はひとつの社会であり、それは児童の学習活動、人格の形成に影響を及ぼすという教育の役割を持つものである。したがって、この学級をどのようなものにつくりあげていくかということは学級担任の重要な仕事である。

図工の作品観賞において、友だちの作品のそれぞれのよさを認め合い、友だちとの学び合いができるような雰囲気（学

## 子どもが変わるって



習環境）を作ることや、学習のめあてを共通のものとできる価値感を学級集団に持たせることがとても重要になる。

そのためには、教師は「児童をどう育てたいのか」という構えをしっかりと持たなければならない。そして、児童が教師の構えによって、望ましい方向に変容していくことが「子どもが変わる」と呼べるものであると考える。

このような考え方でとらえると、「子どもが変わる」とは、学級集団の中で毎日の生活から醸成されるものであるといえる。それは、短期的なものでなく長期的な教育的働きかけによって、学級集団に作用するものであると考える。

絵をかくのって楽しいね!!  
おともだちとそうだしな  
がら、できていく絵は

みんなの絵



## (1) 教育実践学習会

### 第1回 学級経営視点に立った実践

本提案では、「子どもが進んで動き出すとき。」というテーマで、子どもが変わるうえで必要不可欠と思われる「自ら動く」という点にスポットをあて、その条件や条件にかかわる理念及び実践について話し合った。

### 第2回 オープンスペースを利用した実践

「自ら学び出す子ども」の育成をめざした多様な学習方法や学習形態を取り入れた実践を報告し、話し合いを深めた。

## (2) 日々の実践報告

委員会のメンバーが、「子どもが変わるとき」のテーマのもと、図工・社会等各実践を持ち寄り、研究を深めた。各実践は中の所報、中地区教育文化研究所だより「ひらく」に掲載し、活動を紹介した。今後も自由に自分の実践を聞いてくれる仲間の和を広げていく必要がある。

## 4. 障害児教育研究委員会

### (1) 開かれた学級をめざして

#### ——秦野市『ふれあい学級』——

夏休みを利用して、障害児学級の子どもたち等と地域の人々との交流ができないかということで、秦野市障害福祉児童課と社会福祉協議会が、特殊学級在籍児童親の会（みのりの会）とボランティアグループ『あすなろ』とともに行うことになった。8月上旬の4日間、みんなで遊ぼうということになり『ふれあい学級』という名で、本町中学校障害児学級プレイルームを主会場に、市内各所から60名を越える児童・生徒が猛暑にも関わらず参加してくれた。『あすなろ』は、高校生・大学生・社会人を混えた結成1年目のグループ。経験も浅く初日には硬さがあったが、やる気と若さのエネルギーで溶け込み、4日目にはしっかり鎖の輪が結び合ったようだった。

他にも、伊勢原のボランティアグループ『小さな思いやり事務局』のメンバーが毎回何人か応援に来てくれたり、本町中学生徒会の奉仕委員会の生徒・教員も毎回参加してくれた。例年、夏休み中に施設訪問をしているが、今年はより身近なところに参加したいと、自主的に申し出てくれた。プレイルームが狭く感じる程にぎやかに、ボール遊び・ゲーム・スイカ割りに興じた4日間だった。またその後、10月から日に一回、『ふれあい学級』を継承して行われている。

この会を通して、①秦野で障害を持つ子供達とボランティアの若者達がめぐり合えるきっかけができた。②親とボランティアが子供を媒介として育ち合っていく場ができた。③障害児学級がその地域に開かれた存在であるため、単に場所を開放した事に届かず、

子供をめぐるネットワークの一部として機能できた、等があった。

——伊勢原市『宿泊訓練』——

伊勢原市内四中学校の合同学習として、8月4日から二泊三日の日程で、県立野外センターを舞台に13名の生徒が参加して宿泊訓練が行なわれた。

自然との触れ合い、自分のことを自分でする、他校の友達と仲良くする等のねらいで、野外炊飯や牧場へのハイキングまたキャンドルファイヤー等、なごやかな雰囲気の中に様々な事を体験した。三年生は三回目、二年生は二回目ということでセンターの先生方とも馴じみの生徒もいた。一年生だけが初めてのためか、最初やや緊張気味だったが、すぐにうちとけた。キャンドルファイヤーでは、ゲーム・歌・スタンツなどでお母さんも混じって大いに盛り上がった。

この宿泊訓練で体験したことが今後様々な生活場面において生きてくると思う。

## (2) 教育実践学習会



肩の凝らない日頃の実践をもちよる形で、お祭りの露店のイメージをもとに計画した教育実践学習会は、参加者が自由に入りたいグループで学び、そこが終ったら次の所へというふうに、熱心なうちにも楽しい露店風実践研究会となった。

アンケートの感想を紹介すると、

・とても楽しいひと時でした。いろいろな場所に自由に行けたのもよかったです。

是非子ども達と実践したいです。

・盛りだくさんあって、他の場所にも出たかった。今日は三ヶ所出られた。  
など参加者にも好評だったようだ。

作り方を学ぶ顔の真剣なこと！出来上がった時の笑顔のすがすがしいこと！教える方も、教えられる方も、作ることを楽しんでいたのだと思う。

次回には、障害児学級だの普通級だのの枠を越えて、ゆったりと雑談をしながら作っていきたいと思っている。

## 5. 今後に向けて

子どもにゆとりをもたらす学校五日制のあり方を研究するため、教育課程研究委員会や地域文化研究委員会の研究内容を再検討することも含め、研究実践を深めていきたい。

(文責・榎本雪雄)

## 中地区教文研所蔵フィルム

### 〈16ミリフィルム〉

フィルム名	時 間
ヒカドン	9分
トビウオのぼうやはびょうきです	19分
べっかんこ鬼	24分
戦場ぬ童	26分
人間をかえせ	19分
おこりじぞう (2本)	27分
おかあちゃんごめんね	26分
予言	41分
ヒロシマ・ナガサキ	
核戦争のもたらすもの	46分
戦争—子どもたちの遺言	53分
雨はやさしく	11分
おこんじょうり	25分
さくらんぼ坊や2 模倣都自律	39分
さくらんぼ坊や4 4歳と仲間	48分
核戦争	15分
子ども達へ	55分
ひろしまのエノキ	20分
海のコウモリ	28分

### 〈ビデオフィルム〉

広島から子どもたちへ I. II. III
人間をかえせ
核戦争後の地球第2部
大村はまの世界1
〃 2訪問インタビュー1
〃 3訪問インタビュー2
はだしのゲン パート2
となりのトトロ
戦争—子供たちの遺言
ヒロシマ・ナガサキ—核戦争のもたらすもの
風が吹くとき、アニメ、放射能の恐怖
火垂るの墓、アニメ、神戸大空襲





# 西湘地区教育文化研究所の活動

## 1. 活動の基本方針

西湘地区教文研は発足以来一貫して平和と人権を基調テーマにして、地域の教育文化向上を目指して、様々な活動を展開してきました。

89年度は昨年に引き続き、次の4点を運動の重点目標として積極的に取り組みました。

- (1) 地域文化を掘り起こし、子どもたちに豊かで創造的な教育文化を保障する。
- (2) 平和と人権を基盤に、地域に根ざした教育文化活動を推進する。
- (3) 父母・地域住民と連帯し、国民合意の教育改革を推進する。
- (4) 父母・地域の教育要求に応えた講演会・学習会を開催する。

## 2. 事業の概要

### (1) 第14回親と子のよい映画をみる会

本年度は、7月21日(松田町民文化センター)、7月25日(小田原市民会館)の2日間、合わせて6回上映しました。

上映映画「千羽づる」は、広島の実爆にテーマをおいたもので、平和教育運動の一環として取り組みました。内容は、実話に基づいており、被爆当時2才だった佐々木禎子さんが、10年後の12才(小6)のとき、原爆症の白血病にかかり短い生涯を閉じてしまうという痛ましい内容のものでした。

西教組は、7.5全県平和教育の日の取り組み、教研全体会での紹介、試写会、情宣ビラの配布などきめ細かい取り組みをしました。

試写会では、教職員を中心に子どもの参加もあり次のような感想が寄せられました。

#### 試写会での感想

- ・美しく、悲しく、涙が止まりませんでした。ちょうど6年生の娘がいます。私がもしあの母親だったら、あんなに強くなれるのだろうか、と思いつつ見ていました。
- ・悲しい映画でしたが、子どもたちの友情や家族の愛情がすごく爽やかでした。今思うことは、戦争は2度と繰り返してはいけないということです。
- ・年令に関わらず人の死は痛ましい。死に追いやるのが、人の手によってならば尚更のことです。是非このようなことが繰り返されないようにしていきたい。私たちにできることは、次代を担う若者を教育すること。絶対戦争を起こさないように。

また、映画の題名に因み映画会参加者に折ってもらった千羽鶴は、千を優に超え、地区労・原水禁大会参加者とともに8月6日広島記念公園の「原爆の子の像」の下に捧げてきました。



## (2) 7.5 全県平和教育の日の取り組み

西教組は6月15日、平和教育担当者会議を開催し、以下の取り組み内容を確認しました。

### ① 時間帯

朝の会、帰りの会、学級指導、ゆとり、授業など

### ② 内容

ア、7月5日は「神奈川非核兵器県宣言」が行われた日であることと、その内容と意義について子どもたちに伝える。

神奈川県議会での採決の経緯や、長洲知事のインタビューなども参考にする。

イ、親と子のよい映画をみる会の映画「千羽づる」の紹介と説明を行う。

ウ、上記2項目を基本的な内容とするが、日本国憲法や昨年度の取り組み報告書などを参考にし、また学年の発達段階にも考慮して創意工夫を生かした取り組みを行う。

「取り組み報告書」は、昨年度の実践記録をまとめたもので、小6から中3まで障害児学級の取り組みも含めて79の報告があり、全組合員配布をしました。以下はその一部です。

# <小学4年>

時間帯	話した内容	児童・生徒の反応	使用した教材
ゆとり	1. 広島に落とされた原爆の被害 2. 現在でも多数の死者があること 3. 戦後の核実験においても被害があったこと 4. チェルノブイリや原発の事故で奇形植物や人体に異常があらわれていること	・概念として知っている子もいたが、具体的に知ることによってびっくりしていた。 ・どうすればよいか（子供の質問）に対して誰も答えられなかった。答えの出ないことに対する「こわさ」があった。	広島のパネル雑誌「ニュートン」よりチェルノブイリその後
夏休み 登校日	東京大空襲の本を読み聞かせし、2時間の爆撃で10万人の死者が出、そのほとんどが女、子供、老人であったことなどを話した。 （以前、「ひろしまのピカ」を読んだことを想起してから入った。）	・なんで戦争なんかやるんだろう。逃げて逃げて逃げまくっても死んでしまう。戦争なんか絶対やりたくない。 ・戦争をしかけたのは日本だけど、それに関係ない普通の家の人達が10万人も殺されてしまつてとてもかわいそう。 ・生まれて間もない赤ちゃんが死んだのがかわいそうだった。戦争は残酷、こわい。 ・真っ黒こげの死体がたくさん出てきたという。もうこんな戦争を起こしてはいけなと思った。	早乙女勝元作「東京大空襲」
朝の会 2日間 連続	・本の読み聞かせ（やや読み飛ばしたが）をした。 ・押さえた事実は、 ・神奈川県にも米軍基地があること。 ・その中は日本人が手出しのできない世界であること。そうなった経過（簡単に） ・その事実について大人の意見が分かれていること ・母親を救うために皮膚を提供した人々の心 ・私達は今後何をしようか考えようということ <本の内容> 今から10年前、横浜市緑区に米軍のファントムが墜落し、母子が大火傷をしたこと、事故後の出来事として母の火傷を救うために多くの人々が皮膚を分けてあげたことなど。	・読み聞かせ中大きな反応があったのは次の5つの場面。 ① 子供ユ一君とヤス君が死んでしまったとき——かわいそう ② 事故後助けにきたヘリコプターがパイロットだけを乗せていったとき——ひどい！ どうして？ ③ 母親の病状——驚き、苦しいだろう！ ④ 母親の体を治すための皮膚提供者千人現る——すごい！ えらい！ ⑤ 後書きで母親の死——えーっ、さんねん、くやしい	早乙女勝元作「パンパママバイバイ」
朝の会	・絵本「おこりじぞう」の読み聞かせ ・読後感想の発表、話し合い	・今までにほとんどの児童が読んでいなかったため真剣に聞いていた。 ・絵を見ながら「こわい」「気持ち悪い」などの声（つぶやき）が聞かれた。 ・後の感想では「戦争はこわい」「今は平和だけど昔はこんなことがあったんだ」「悪いことも何もしていない子が死んでしまうなんてかわいそう」という意見が多かった。 ・他に、今この国は平和だけれど、他の国では戦争をしたり食料不足などもある。この平和をそれらの国へ分けてあげたい、という意見もあった。	絵本「おこりじぞう」

### (3) 父母懇談会運動の取り組み

学区委員会は、6月8日小田原労働センターで開催し、今日的教育状況の克服と新しい学校の創意をめざして、県民合意の「草の根の教育改革」運動を推進することを確認しました。

父母懇談会運動の活性化については、昨年度の総括を受け「1988年度父母懇談会のまとめ」を発行し、これをもとに各中学校区(代表5名)より昨年度の取り組み報告を口頭で行い、還流することから様々な取り組みの工夫について学習し合いました。開催状況は、中学校区を中心にして16会場、約500名の父母・教職員の参加に留まりました。

内容としては、平和教育、校則改正、子どもの遊びや家庭での過ごし方など多方面にわたっています。年間2回の開催が定着している中学校区がある反面、未開催中学校区がいくつかあるなど開催しにくい状況の克服を早急に検討しなければなりません。運営面については、PTAとの共催や分散会形式を取り入れるなど、参加呼びかけの工夫や討論の活発化にむけて工夫がされています。一方、呼びかけチラシが子どもを通して配布できない分会もあるなど問題点があります。今後はこれらの課題を解決するため、2学期にも担当者会議を開催し、中学校区相互の意見交流・実態報告を行うなど緻密な取り組みが必要です。

#### 〈1988年度父母懇談会のまとめより〉 A中学校区

1. 実施期日 1988年11月21日(月) 19:00-21:00
2. 共催 なし
3. 主なテーマ 平和教育について
4. 参加の呼びかけ方 案内を授業参観時に配布
5. 参加者数 父母32名、教職員27名、合計59名
6. 主な話題と発言

映画「戦争、子どもたちの遺言」の後懇談

司会 戦争のことが次の世代に受け継がれていないのではないかと。また、我々はどうような平和教育ができるか。

T: 我々大人が一人一人の心の中に、戦争は繰り返さないという強い決意を持つべきだ。

P: どうしても戦争の話題から逃げがちである。親子で戦争について学習する機会があればよい。

司会 米軍基地など子供たちは興味深く見ている。

T: あの基地などを見ると、戦争でなくても飢って爆発したら……などと考えると恐ろしくなる。

T: 戦争によって子供たちが親よりも早く死んでしまうのは、本当に不幸なことである。そのために我々もしっかり平和教育をしていかなければならない。

P: 私は戦争を体験したが、あまり思い出したくない。

T: 平和教育は戦争のことだけでなく、動物や植物に対する「優しい心」などから育っていくものである。それが戦争反対につながるのではないかと。

T: 沖縄の人の話、韓国の人話などを聞くと、日本という国は戦争の被害者なのではなく加害者だったような気がする。被害者の立場を取り除かなければ決まった答えは出ない気がする。

P: 私は戦争のことを知ろうと本を読んだり映画を見たりした。そして戦争は、人間の悪い心が集結したときに起こるのではないかと考えるようになった。だから、今子供たちに授ける教育として、戦争を直視することも大切であるが、「優しい心」や「人の気持ちを理解する心」を育てるのが大切であると思う。

思ったより活発な意見が出ました。その他にも発言があり、時間が足りなくらいでした。

#### (4) 教文研講座の開催



##### ①人権教育講座

日時 10月5日(木)18:00

演題 「狭山事件を通して部落問題を考える」

講師 安田 聡氏(部落解放同盟中央本部狭山事件担当書記)

部落解放同盟が取り組んでいる三大闘争の一つである「狭山裁判闘争」について、その事件の概略・時代的背景にふれながら、部落差別に基づく見込み捜査の実態を明らかにしていただきました。そして、無実を裏付ける数々の証拠(万年筆が鴨居から発見された経緯、そのインクの種類、殺害現場のそばで農作業をしていた人の証言、脅迫状の筆跡鑑定など)がありながら再審に結び付かない司法の問題も含め、部落差別のみならずすべての差別に対して、我々はみんなで力を合わせてたたかっていかなければならないことを確認しました。

##### ②平和教育講座

日時 11月25日(土)14:00

演題 「今、平和を考える」― 自衛隊の現状 ―

講師 前田 哲男氏(フリージャーナリスト)

前田先生には、ウラジオストックから帰国早々という忙しい中で講演に来ていただきました。INF 条約・マルタ会談など世界的な緊張緩和の中で、日本だけが防衛費世界第3位という「軍事費大国」を突っ走っている現状を、防衛白書の分析を通して明らかにされました。そして、世界最大の戦車の話(1台50トンで12億1000万円)、支援

戦闘機という名の戦闘爆撃機の話、これらがアジアを初めとする他国にどういう脅威を与えているかということ。最後に先生は、「ヨーロッパだけでなく、アジアにも新しい風が吹き始めた。そういう中で日本の平和に対する役割は非常に大きい」と結ばれました。

## 1989年度 第3回 西教組教文研講座

1989. 12. 12  
於、小田原市中央公民館

演題 「改訂学習指導要領批判と私たちの課題」  
——社会科解体・生活科新設を通して考える——

講師 中野 光氏

略歴 1929年 愛知県海部郡に生まれる。  
1953年 東京文理科大学教育学科卒業  
私立桐南小学校教諭、金沢大学助教授、和光大学教授を経て  
1979年 立教大学教授（近代教育史・学校論）  
兼日本生活教育連合会委員長、日本教育学会理事（事務局長）  
日教組教育課程検討委員、日教組全国教研助言者

主な著書 「大正自由教育の研究」（黎明書房）  
「大正デモクラシーと教育」（新評論）  
「教育改革者の群像」（国土社）  
「学校改革論」（青木書店）  
「生活教育の探求」（民衆社）  
「戦後の子ども史」（金子書房）

（金子書房、ラポール及び「戦後の子ども史」より抜粋）  
やや長いあながき の冒頭部分

雑誌「児童心理」は1986年1月号で創刊40周年を記念して「子どもたちは、いま」と題する特号を出しました。その時のことです。私は金子書房の編集長から、「子どもの戦後史」という題で400字詰用紙20枚で原稿を書いてほしい、との依頼をうけました。戦後の40年をこえる期間の子どもの歴史をそのような制約をうけて書くことは私にはとうていできません。いったんはお断りをしたのですが、でも、うっかり「もっと時間と枚数がいただければ書いてみたい課題なのですが……」と本音をもらしてしまいました。そうしたら「3回もしくは6回の連載でもよろしいのですが、ぜひ書いていただきたい。なんなら1年間12回でもよろしいのです」といわれてしまいました。それほどまでに期待されるのなら、そのことを1986年という年における私の大切な課題にしてみようか、と思いついたのでした。

実は、私には30年も前から子どもの歴史を書いてみたいというひそかな願いがありました。私は大学で権恒博先生に教育史を学び、卒業してからは海保勝雄先生を中心とする「教育史研究会」（教史研）に参加し「近代教育史Ⅲ」（1956年、滅文堂新光社）にも執筆する機会を与えられました。この共同研究は教育を社会現象としてとらえ、社会科学の方法でそれに迫るという、当時としては意欲的で斬新な問題提起を単に方法論議のレベルだけでなく、具体的な研究成果を発表することをおして行っていたのでした。いうまでもなく、教育は政治や経済とはちがって、人間が人間の発達にとりくむ、まさしく人間的な営みなので、子どもが、歴史の中でどう育てられ、どのように生きていたのか、という問題をめきにしては教育史の解明や叙述はできません。そのような教育史研究にたずさわったときに思いついた課題意識は私が桐南小学校の教師となり、子どもたちと生活をともにするようになっていつそう具体的なものになっていったように思います。たとえば、子どもたちと歴史を勉強していたときにも、「この時代の子どもはどうしていたのかなあ」という疑問がわねにわねにわねしてきました。しかし、それにこたえるような参考文献や資料は乏しく、けっきょくは、自分で調べ、やがては私自身の力で「子どもの歴史」を書かなければだめだ、とさえ思ったことがありました。あの頃の子どもたちにも、そんな思いを感したのでしょうか、ある子どもから「先生はいつかは『子どもの歴史』という本を書くんだね」といってはげまされたことを憶えています。

（以下略）

### ③教育課程講座

日時 12月12日（火）17：00

演題 「改訂学習指導要領批判と私たちの課題」  
——社会科解体・生活科新設を通して考える——

講師 中野 光氏（立教大学教授）

元文部大臣中島源太郎氏の手記「東郷元師採用を執拗に迫る文部官僚との闘いの真相」を引用され、高石次官を初めとする文部官僚が企図した社会科解体の背景と本質をわかりやすく話されました。そして生活科の持つ問題点については、ご自身がゲス

トとして出演された NHK の「おはようジャーナル」を例にして、全国で行われている研究の多くは「子どもの本当の生活ではなく、“やらせ学習”」であることを指摘しました。最後に「社会科の精神は、日本国憲法の精神を担うことができる主催者、国の主人公に育てることにある。状況は厳しいけれど、父母と連帯する中で実践していく必要がある」と結ばれました。

#### ④教育教養講座

日時 1月19日(金) 17:00

演題 「子どもの遊びを考える」——今日的教育状況の克服をめざして——

講師 深谷 昌志氏(放送大学客員教授)

子どもの遊びが、群れの遊びから孤立型の遊びへ、豊かな遊びから貧しい遊びに変質してきたことを実証的に話され、仮説「昭和37年プラスマイナス2年頃から群れが崩れ、巣ごもりが始まった」を提示されました。その時代的背景として、テレビの普及、紙芝居・駄菓子屋の廃業、少年サンデーなどの少年週刊誌の発刊などを指摘しました。そして諸外国の子どもの遊びとの比較から、日本の教育制度に大きな問題点があることを指摘するとともに、子どもたちの群れの再生をするためには、行政・学校・父母・地域住民が協力して様々な工夫をすることが必要だと説きました。

#### (5) 名作映画鑑賞会

日時 2月24日(土) 13:30

上映映画 「西部戦線異状なし」 「明日に向かって撃て」

西教組として初めての試みではありましたが、終了後おこなったアンケート結果によれば、来年度も是非行ってほしいという回答がほとんどでした。しかし、来年度要望の映画は回答者の年代等により多岐にわたっており、どの映画にするかというところまでは絞り込めませんでした。また、昨年度行ったコンサートについての要望もいくつか出されました。

### 3. 今後に向けて

この10年を振り返り、事業内容の見直しを初めとして、より地域に根ざした教育文化活動推進のために努力していくことはもとよりですが、今年度の重点目標「(3)父母・地域住民と連帯し、国民合意の教育改革を推進する」や「(4)父母・地域の教育要求に応えた講演会・学習会を開催する」を達成させるため、他地区教文研の取り組みと還流し、学び合いながら、積極的に参加者に呼びかけていく必要があります。そのためには、教育懇談会運動と一体的に、地区労・教育を守る会・父母・地域住民などと幅広く連帯していくための日常的な取り組みが必要です。

(文責・山崎幸興)

## 西教組教文研ライブラリー

### I 16ミリフィルム

1. おかあちゃんごめんね (25分)
2. 戦場ぬ童 (26分)
3. トビウオのぼうやはびょうきです (19分)
4. べっかんこ鬼 (24分)
5. 戦争—子どもたちの遺言 (53分)
6. おこりじぞう (27分)
7. 核戦争のもたらすもの  
ヒロシマ・ンガサキ (46分)
8. 人間をかえせ (20分)
9. 予言 (40分)
10. 悪魔の火球 (5分)
11. 教科書百年 (30分)
12. 子どもと自然と仲間 (40分)
13. ひろしののエノキ (20分)
14. 24000年の方舟 (33分)

### II スライドフィルム

1. 小田原にも空襲があった (53コマ、13分)
2. 核巡航ミサイル・トマホーク (52コマ、13分)
3. 国家機密法 (54コマ、14分)
4. 臨教審答申を斬る (72コマ、23分)

### III ビデオテープ

1. 核戦争後の地球 第1部 (30分)  
第2部 (30分)
2. ヒロシマから子どもたちへ  
第1部 (22分)  
第2部 (24分)  
第3部 (24分)
3. ザ・ディアフター (127分)

4. 「性」…いま「性=生」を考える (25分)
5. いのち (45分)
6. がれきの日本列島  
広島・長崎編 (45分)  
主要都市編 (60分)
7. NAZI 絶滅収容列島 (60分)
8. それでもあなたは食べますか (30分)
9. 怒りの三宅島 (24分)
10. チェルノブイリクライシス (57分)
11. エイズ その正体と予防 (25分)
12. はだしのゲン2 (90分)
13. 黒い雨にうたれて (90分)
14. 性教育シリーズ「避妊」 (30分)
15. 夏服の少女 (30分)
16. 「日の丸」と「君が代」 (32分)

### IV 写真パネル

1. 組み写真「ヒロシマ・ナガサキ」 (20枚)
2. 平和教育教材パネル  
第1部「太平洋戦争」  
第2部「沖縄戦」

### V 写真記録集

1. 子どもたちの昭和史
2. これが沖縄戦だ
3. 沖縄戦記録写真集「沖縄戦と住民」
4. 広島・長崎 原子爆弾の記録

### VI その他の資料

1. 平和教育教材資料(小学校編)
2. 平和教育教材資料(中学校編)



## 二「労働」を問い返す

——教育運動論ノート(2)——

嘱託研究員 斎藤 寛

[0]



前稿(=当所報1989所載拙稿)の末尾において、「〈教師〉にこだわって問われねばならない論点」をとりあえず3点記してみたが、その第2点目の項で、「従来の教育労働運動をめぐるさまざまな議論は、どうとらえ返されてゆくのか、問われることとなろう。例えば〈資本・対・賃労働〉への矛盾の集約を当然の前提として論争されてきたような、“教育労働は『生産的労働』なりや否や”というような議論は、新たな問題設定の論脈において再考されなければならないだろう。」と、私は述べた。

この課題への第一歩として、資本制社会のもとにおける「公教育労働」の定位をめぐる従来の諸論の批判的検討を別稿でこころみてみた<sup>(1)</sup>のであるが、そこでの論旨はおおよそ以下の4点である。

\*

- (1) 「歴史的規定」(資本制社会のもとにおける規定)論の場にあつて、「生産的労働」とは、直接的に資本へ転化する労働の謂であつてみれば、総体としての公教育労働は(私学の場合、「学校資本」としての「生産的労働」と規定される、という件は措くとすれば)、「不生産的労働」と規定される。
- (2) 公教育労働は上記の意味での「不生産的労働」の諸スペクトル中、とりわけて「国家[政治的国家]的労働」として、つまり“支配としての精神労働”として存在するものである。「教師存在の権力性」問題(前稿参照)はここに発しており、それは、国民教育論(——国家論の不在もしくは近代国家理念の肯定)によっては対自化され得ない位相にある問題である。
- (3) 公教育労働は上記の意味で「不生産的労働」と規定されながらも、資本制社会の再生産に深くかかわっている。その機制について、従来は、“媒介的には「生産的労働」である”と言われてきたが、一步ふみこんで、「国家」[社会経済的国家]にとっての「必要労働」というカテゴリーを立て、そこに公教育労働を定位することができるのではないだろうか。
- (4) 私学(「学校資本」)のもとでの公教育労働の分析においては、そこでの教師の労働は「教育」というサービス商品の生産労働と規定され、したがって教授=学習過程は「教育」というサービス商品の生産=消費過程とみなされる。したがってその限りでは見

童・生徒は教師の「労働対象」ではない(「学校資本」は児童・生徒を“加工”して商品として売りに出すわけではない)ということになる。なお、昨今、この論点こそ教育労働論の新たな次元をひらくものであるかの如くに頭揚する議論[この議論——並木悟郎説——については本稿にて後述する]が見受けられるが、第一にそれは「学校資本」分析こそ公教育労働論の主要な課題であるかのように思いこんでしまっている点において、第二に「サービス商品生産労働」という(ある次元では正当な)認識自体がある意味では“物象化的錯視”である、という大きな問題を見ていない点において、こうした議論は問題化されなければならない。

\*

前稿に直接続く稿においてはおよそ以上のようなことを考えてみたのであるが、本稿では、「歴史的規定」論の次元をひとたびはなれ、従来の言い方にならって言えば「本源的規定」に相当する問題域に足を踏み入れてみることにしたい。そして、真に問題化されるべき案件は、「本源的規定」なるものにおいて教育労働は「生産的労働」なのかどうかを詮索するというようなところにあるのではなく、そもそもそうした議論の前提とされている「労働」観そのものを問い返すことにこそあるのではないか、という私の問題意識の欠第を述べてみることにしたい。迂遠な話のようではあるが、教育運動論を“教育という営為の自律性ないしは特殊性”というようなイデオロギーから救出し、前稿でふれた課題域へと接続させてゆくための一助としたい、と思う。

## [1]

いわゆるオーソドックスなマルクス主義の立場(ここでは典型的な論者として芝田進午の教育労働論をとりあげよう)からは、「教育労働は、生産的労働の『本源的規定』からみて、『不生産的労働』である」<sup>(2)</sup>と規定される。ここで、「本源的規定」とは、特定の時代・社会に限定されることなく歴史貫通的に適用され得る規定の謂であり、また、その問題設定のもとでの「生産的労働」とは、要するに“物質的財貨を生産する労働”のことを指す。仮りにこのような道具立てを承認すれば、なるほど芝田の言うように、「人間的自然」を労働対象とする教育労働は「不生産的労働」である、ということになるだろう。しかし、私たちはこうしたシーンで決して“議論のための議論”をしているのではないのであるから、いったい芝田がこのような説くとき、彼は何を言わんがためにこうした論をなすのか、ということこそが問われねばならない。そうした観点から察するに、彼の論脈には次のような諸問題が伏在しており、それぞれについて批判的再検討が要求されているであろう、と私は考える。

(1) 「労働」とはすなわち「生産」であり、「生産」とは第一義的に「物質的財貨」の「生産」である、ということがそこでは疑問の余地のない大前提とされている。しかし、それはただちに以下のような疑念を誘発するだろう。

(1-1) 芝田説はマルクスのテキストに依拠しているが、話をマルクスに限ったとしても、そこでの「生産」論は必ずしも芝田の読解のような一義的なものとは認められない

のではない。むしろ私たちは、「人間の生産・再生産」(reproduction)というカテゴリーに着目し、「生活手段の生産」(production)と「人間再生産」(reproduction)のトータルな過程的構造を見すえていたマルクス<sup>(3)</sup>をこそ、継承すべきなのではないか。そこからすれば、教育労働は「本源的規定」[というタームを仮りに使うとして]において「人間再生産」にかかわる「生産的労働」である、と見ることも可能なのである。

- (1-2) 仮りに「物質的財貨の生産」という観点に定位するとしても、いったい「物質」とは何か。「物質」の対概念は「精神」であろうが、「物質」と「精神」の二分法(芝田はもうほとんどそれは自明なことではないかと言いたげなのだが)に私たちは安んじてしまってよいのか。ここでの芝田のような「物質」観を唯物論というのだとすれば、それは近代啓蒙思想の地平における唯物論以上ではないのではないか。
- (1-3) 「物質的財貨を生産する労働」(ここでの芝田説の言う「生産的労働」)の第一義性、「精神労働」の脈生性、という見地は、「物質」と「精神」の二分法に乗ったまま「物質」の“根源性”を言いたてるといって、静態的な“実在”認識の発想につながっていると思われるが、そのような二分法に安んじることはできない、という立場からすれば、ここでも問題は立てかえられるべきだろう。私は、このシーンでの論題は、つまるところ、活動する存在としての人間のさまざまな欲求の重層的な諸次元の問題<sup>(4)</sup>である、と考えると何ら不都合はないのではないか、と思う。
- (2) 「物質的財貨を生産する労働」の第一義性という観点は、さらに言えば、「物質的生産」こそが社会構成の“土台”(下部構造)であり、かつ「歴史」の展開の原動力であるという、いわゆる唯物史観の公式と称されるようなテーゼにつながっていよう。ここでも、私たちは、このテーゼを“目的論”の批判という問題次元(たとえば「歴史」を神のみわざの展開と見立てるような、超越的な「主体」を立てる発想への批判)においてこそ妥当するものと位置づけるべきであろう。その問題次元から逸脱してこのテーゼが乱用されるなら、それは単なる「経済還元論」の見地へ堕してしまうこと、つとに多くの論者の批判する通りである。そこからすれば、ひるがえって当の芝田の論立てこそ多分に「経済主義」的であり<sup>(5)</sup>、“科学=技術革命”の本性(資本主義的利用形態を超越した革命性)なるものへの彼の信仰こそ、典型的な「目的論」的思考なのではないか、といった問題も指摘されねばならないことになるだろう。
- (3) ある特定の「労働」分野について、それが「物質的財貨を生産する労働」であるか否かという点にこそ、「本源的規定」における重要な分水嶺が存在する、という見地は、「教育労働」や「教師」について巷間よく聞かれる通俗の説に順接し、いわゆる“教育(労働)”の特殊性” “教育(労働)”の自律性”論の伏線として機能してゆくことが多分にあり得るだろう。(教育というのは工場でモノをつくるのとはわけがちがうんだから、ヒトを育てるんだから、教師は労働者だなんて言われたら困る、古いと言われるかもしれないけれど、やっぱり聖職と言うべきなんじゃないか……等々。)もっとも芝田からすれば“不生産的労働という「疎外」”をこそ言いたかった文脈を逆に解されては困る、という言い分があるだろうが、そこでの「疎外」認識の結構自体の問題は措くとして、そもそも、「物質」を対象とする労働と人間を対象とする労働とを峻別する発想そのものが、やはり問題化されねばならないのではないだろうか。

＊

このように考えてくると、問題は、「歴史的規定」のさらに“根源”での「本源的規定」なるものにおいて「教育労働」は「生産的」と規定されるのか否か、などという単純な問いの立てかたの域にとどまるものではないこと、すでに明らかであろう。さしあたって以下本稿では上記の(3)の問題に——いわば、「労働の対象」としてのモノとヒトの問題にもう少しこだわってみよう。

## 〔2〕

上記芝田説のような発想に対して、つとに次のような批判が——国民教育論批判というモチーフをともなう——村田栄一、岡村達雄などの論者によって提起されてきた。<sup>(6)</sup>

＜近代公教育制度のもとにおける教育労働は、“ヒトを育てる”労働にはちがいないにせよ、そこにいうヒトとは、次代の「労働力商品」にほかならない。「労働力商品」とはヒトにしてモノである。そのような“矛盾体”である。こうしたシビアな歴史的批判意識が従来の教育論議には欠落していたのではないか。このような観点からすれば、公教育労働は(その「本源的規定」が重要なのではなく)何よりもまずその「歴史的規定」の次元において、“労働力商品”を生産・再生産する労働”と見なされ得るのであり、したがって「歴史的」に「生産的労働」と規定され得るというべきである。＞

この問題提起は、およそ芝田説においては問題として関知されていなかった論点を指し示そうとしたものであり<sup>(7)</sup>、資本制の再生産過程総体における公教育労働の定位を問うとともに、さらには公教育労働批判——近代公教育批判はいかにして「市民社会」批判(「物象による依存関係」<sup>(8)</sup>批判)の問題次元に相渉るのか、という問いへの展開力を秘めたものであった、と言えよう。「労働力商品」という概念は、なおもそのような起爆力を持つ“火の言葉”であることは、改めて確認されておいてよいだろう。こうした言説に対して、それは「経済学の相」における問題設定であって「教育学の相」においては事情はことなる、などと、“学の方業”にたてこめることは、あまり意味のあることだとは私には思われない。

しかしながら、村田らの問題提起は、その“解”の導き方においては、論をあやまったと言わざるを得ない点を残すこととなった。そこでは、「歴史的規定」における「教育労働＝不生産的労働」説へのやみくもな反発が先行したきらいがあり、あたかも公教育労働とは資本に直接転化する「生産的労働」であるかのように考えてしまうことによって、結果的には、“資本と国家”の問題枠における公教育制度の定位、わけでもそこでの公教育労働の「国家」的性格の問題に接続してゆくことのできない論立てになってしまった、と私は考える。<sup>(9)</sup>

＊

あるいは、ずいぶん“古めかしい”議論に何を物好きにこだわっているのだ、と思われ

るかもしれないが、しかし昨今こうしたテーマは“はやらなくなった”だけのことで、なら“解決された”わけではないのである。

それでは、いまの時点でなおもこの“はやらない”テーマにこだわっている人々は何をどう論じているだろうか。ひとつの注目すべき論策として、並木悟郎論文<sup>(10)</sup>をとりあげてみよう。

並木は、教育労働を(「学校資本」のもとでの)サービス商品生産労働としてとらえる見地を前提として、従来の「教育労働＝労働力商品生産説」(村田栄一、岡村達雄)を批判し、そこにおいて、次のように言う。

＜「被教育者＝「労働対象」」説[すなわち教育労働＝労働力商品生産説]は、全障研流の「発達を保障する－される」という、教育労働者と被教育者との垂直的な操作的主客関係を追認するものであり、「注入主義」か「発達段階論」かに帰結する、という点においても問題化されねばならない。＞<sup>(11)</sup>

この並木説は、「学校資本」のもとでの教育労働はサービス商品生産労働と規定され得ること、したがってその労働は被教育者をその「労働対象」とするのではないと見なされること、に着目し、この観点こそ近代的教育関係をのりこえるものであるかの如くに説くものである。しかし、はたしてそう言えるのだろうか。

「教育労働＝サービス商品生産労働」という認識は、改めて言うのも恥ずかしいようなことだが、この眼前の“善き世界”を顕揚しジャスティファイ(正当化)せんがための立論なのではもとよりなく、この眼前の“世界”の〈問題〉を暴かんがための作業の一環であったはずである。しかるに並木によれば、その「教育労働＝サービス商品生産労働」論の系としての、「教育労働には労働対象が存在しない」という見地は、これこそ全障研流近代主義をのりこえ、被教育者こそ「主体」であるという革命的(?)境位につらなる議論だ、ということになるのだ。こうした論断のしかたは、およそ「論」というものとの“つきあい方”の流儀において、何かが根本的におかしいのではないか、と私は感じる。

そもそも「サービス商品生産労働」というような見地自体が、「サービス商品」という、資本制の展開上での「物象化的錯視」の世界にひとたび寄り添ったうえでの、その学制的認識の次元での議論によるものであろう。その“物象化世界”の認知の果てにわれ知らずふと真言が漏れ出る、というような奥深くありがたい話を並木はしているのか？私にはそうは思えないのである。

もっとも、並木もまた後段においては、「経済学規定の上では被教育者は『労働対象』という規定を受けないが、教育学上では『対象』という規定を受けるというパラドクスが何故生じるか。」という問いを立てている。<sup>(12)</sup>この問いの場面でこそ、そもそも「サービス商品」などというカテゴリー自体が特殊歴史的なるものであることが——さらに言えばかかるカテゴリー(を存立せしめる関係のありよう)そのものを解体することこそが私たちの課題であるゆえんが——説かれねばならないはずなのであるが、並木説にあっては「教育学上では認識論レベルにおける『対象』を設定しうる」ことが単に認知されるにとどまっているように私には思われる。これでは、彼の言う「パラドクス」なるものの生じるゆえんを解き明かすという議論にもなっていないだろう。ここでも、問題はやはり、「経済学」と「教育学」の違いなどという表象ですまされてはならないのだ。

並木はいったいいかなる理由によって、こうまでして「サービス商品生産労働」論にい

れこんでしまったのだろうか。上記のくだりの展開のしかたに、彼のモチーフがおのずと語り出されているように私には思われる。いわく、教育学上の「対象」とは、「認識論」レベルのことであってそれ以上ではない。ということはつまり、「認識論」の対概念は常識的に言えば「存在論」であろうから)教育労働の「存在論」において「対象」なるものを設定することはできない、と彼は言いたいらしいのである。何故か。「存在論」レベルで「対象」を設定すると、それは、被教育者を「実体→モノ」ととらえてしまうことになるからである。「物質的生産になぞらえて労働対象を物質としての人間一般に重ねて措定し、あたかも『人間の意識の変革＝頭脳加工』をば、ロボットの思考回路をより精緻に改良するように理解」することになってしまうからである、と。

思うに、並木は、「教育労働」あるいは「教育関係」を“人間主義的”にとらえかえすことによって、いわばその「真実態」を語り出したい(そうでなければ「教育労働」論は近代主義的教育論を追認する結果になってしまう!)という欲望にとりつかれており、しかしなお、“教育の「特殊性」”“教育の「自律性」”論の虚構に拠るわけにはゆかない、と考えていたのではないだろうか。そこへ、「教育労働には対象がない」という、被教育者の「主体性」をそこなわない議論がなんと経済学の分野から登場し、しかもそれは経済学プロパーとして見ても正当な立論である、となれば、“私の求めていたものはこれだ!”と共感し、とびついたのではないだろうか……。私なりに彼の問題意識を推察し再構成してみるなら、このようなことになろうかと思う。

並木がここでやみくもに「サービス商品生産労働」論にいれこんでしまった結果、ほんとうならこのことこそが問われるべきであったのに……というきわめて重要なポイントが、彼の論にあっては手つかずのまま残されている、と私は考える。そのポイントとは、いったい「労働」の「存在論」にあって、「労働対象」とは、ひたすら、加工されるべき「実体→モノ」の謂なのか——もし、従来の「労働」論においてはそうであった、とするならば、問われるべきは、その従来の「労働」論の結構そのものなのではあるまいか、という問いである。

ここで、話はさらに迂遠になるようではあるが、ひとたび、そもそも「労働」とは?というテーマへと——これまたいまどき“はやらない”テーマへと私たちの問いを立てかえてみるのが、ぜひとも必要になってくるだろう。

### [ 3 ]

芝田は、「物質的財貨の生産労働」(以下、対自然労働と呼ぶことにしよう)こそ、人格を形成し、人間を人間たらしめる労働である<sup>(13)</sup>、と考えることによって、そこから派生した「不生産的労働」(「本源」における)——たとえば「教育労働」のように「人間的自然」を対象とする労働(以下、対人労働と呼ぶことにしよう)は、それ自体が「疎外」であること、その「疎外」の止揚が課題とされねばならないことを説いていた。他方、並木は「労働対象」を「実体→モノ」としてしまうような対自然労働の枠組みではとらえきれない境位に、対人労働(としての「教育労働」)を定位しようとしていた、と言えよう。

私は、こうした問題定立のしかたに対して、次のように問い返してみたい。

対自然労働と対人労働とは、(その意義ないし価値をどうとらえるかはひとまず措くとし

て)根本的に相違する活動である、と考えるののだろうか。私たちが無意識のうちに前提としている常識的な「労働」観からすれば、おのずと両者は根本的に相違するように表象されるのだとすれば、その「労働」観そのものに問題はないのだろうか。

\*

真木悠介のかつての所説(注4の書参照)においても、このテーマに関しては、次のように説かれていた。

＜「事物」への働きかけ(を通しての対自存在としての人間の存立様式)を「労働」と呼び、「他者」への働きかけ(を通しての対自存在としての人間の存立様式)を「交流」と呼ぶ。「他者」を対象とする「労働」というものもありうるが、そこでも、生物体としての人間の養育に必要な(「事物」を対象とする)活動の側面、ないしは、対象が「人的資源」として“物化”されている場合においてのみ、それは「労働」なのであって、意識をもつ自由な主体としての人間を対象とする教育関係は「交流」としてとらえるべきである。なぜなら、事物に対する労働において主体が対象に自己を刻印づけるのと同じような仕方で、自由に自己を選択する他の主体に自己の刻印を押すことは不可能であるからである。＞<sup>(14)</sup>

この説によれば、「労働」とは本質的に対自然労働であるということになるが、そうした「労働」概念の外延の如何にかかわる議論は措くとして、やはりここでも、対人労働を「交流」としてとらえかえそうとする際に、“教育という仕事はモノをつくる仕事とはちがう。ヒトを育てる営みなのだ。”ということに有意性を見出していこうとするような発想の倍音が、あいもかわらず響いてしまうように思われるのである。

並木説と真木説が——両者の“文体”の大きな相違にもかかわらず——はからずも共通の前提としてしていることがある。それは、“およそ「労働」とは、「実体」としての「事物」(モノ)に「主体」としての人間が働きかけ、それを加工する行為である”ということ、つまり、“「労働」とは「主体が対象に自己を刻印づける」(真木)行為である”とする「労働」観である。[並木は、それゆえにこそ「サービス商品生産労働」論に“避難”するのだ、とも言えるが、この「労働対象の存在しない」労働なるものの存立機制は、なお並木説にあっては“謎”のまま残されていると言わねばならない。]

このような見地に立つ限り、「主体」としての人間はあらかじめなんらかの“アイデア”を内蔵しており、これに対して、「対象」としての「事物」(ないしは自然と言いかえてもよいだろう)はなすすべなく「白紙」のごときものとして「主体」のアイデアを実現する“素材”ないしは“手段”としてのみ存在している、ということになろう。もし、「労働」という行為をこのようにみなして怪しまない、という前提を設けてしまうなら、なるほどヒトとヒトとの関係行為にほかならぬ「教育」を「労働」として認識することは、なにかこころない仕業のように思われることになるだろう。いま問われるべきは、こうした「労働」観そのものの問題性なのではないだろうか。

上記のような「労働」観においては、(1)そこでの「主体」としての人間は、暗黙のうちに「個人」(の能力)としての人間が想定されているのではないだろうか。(2)そこで「対象」として想定されている「自然」とは、もっぱら人間によって自由に変容され利用されるものとしての「自然」、もっぱら人間に仕えるべきものとしての「自然」であり、ひとことで

言えば、それは“近代自然観”にほかならないのではないか。(たとえば、「人的資源」のように、人間が“物化”されると言われる場合の「物」を、自然としての「事物」と同列視することは、[妙な言いように聞こえるかもしれないが]「事物」に対して失礼なことなのではあるまいか、等々。)

\*

上記のような「労働」観は、ひとことで言えば、＜対象化としての労働＞である。すなわち、主体としての人間がある「目的」を定立し、素材に働きかけ、労働を「対象化」することによって、当初の「目的」を実現するという、“閉じた系”として表象され得るものとしての「労働」である。したがって、それは「目的論」(前述)の一典型としての「労働」観にほかならない。そこでは、「自然」に対する超越的な「主体」として「人間」が想定されているのである。このような「人間」をそのまま顕揚し、対自然労働にいれこんでしまうところに芝田説の問題性があったのだとすれば、他方、そうした対自然労働の認識はそのままだとすうえで、そこで「自然」認識に対置して対人労働を定位しようとしたところに、真木や並木の説の問題性があったのだと言えよう。とすれば、対自然労働と対人労働をなんらかのかたちで二分する思考様式——その結果“教育労働の特殊性”の確認に帰結してしまう思考様式は、まずもって、＜対象化としての労働＞、「目的論」に翻弄された「労働」観をその前提としている、という一点において批判されねばならない、と私は考える。

マルクスが『資本論』の「労働過程」論のくだりで、クモやミツバチと人間とを対比しつつ、「[人間の]労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像のなかには存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである[・・・]かれは自然的なもののうちに同時にかれの目的を実現するのである」<sup>(15)</sup>と書くとき、その限りでそこには「目的論」がそのまま受容されている、と言わねばならないだろう。

私たちがマルクス(主義)のテキストを通じても多分に親しんできた「労働」観は、かくていまや改めて問い返されるべきものとなった。今村仁司<sup>(16)</sup>が説くように、「労働」とはすなわち「生産」であり「対象化」であるとする見地は、それ自体、イデアリスム(観念論)ないしは目的論の表現形態にほかならない。そこでは「もうひとつの労働観が見失われてしまった」のである。今村は、その“見失われたもうひとつの労働観”を「非対象化労働」と名づけ、それは異質な諸労働を結びつける労働の次元(「アソシアシオンとしての労働」)、あるいは「時間性」としての労働の次元であり、マルクスのいわゆる「抽象的人間労働」というカテゴリーにおいて想定されていたものであったとしている。

「抽象的人間労働」をこの文脈でとらえることは、小倉利丸も記しているように<sup>an</sup>無謀な発想のように私には思われるが、その点は措くとすれば、ここでの今村の問題意識は、私たちもまた共有し、探求の出発点として確認すべき地点であるといえよう。(たとえば、「アソシアシオンとしての労働」の地平での〈協働〉に、「労働不可能者」[と近代的には分類されるひとびと]の活動を定位できる「労働」観、つまり「福祉」概念の死滅を見通すことのできる「労働」観を創出してゆくことは、今後私たちが考えてゆかねばならない大きなテーマのひとつにほかならないだろう。)



「労働」というカテゴリー自体の歴史性について考えること(ちょうどそれは「教育」カテゴリーの歴史的析出の問題と重なるのかもしれない、と予感される)を次なる課題として、ひとまず稿を閉じることとしたい。(東洋大学講師)

## 【注】

- (1) 拙稿「公教育労働論序論」(『神奈川大学心理・教育研究論集』第8号)、1990
- (2) 芝田進午『教育労働の理論』青木書店、1975、P. 58
- (3) マルクス『経済学批判要綱』高木監訳、大月書店、第I分冊、P. 12-16
- (4) この問題設定については、真木悠介『人間解放の理論のために』筑摩書房、1971、P. 102 以下参照。
- (5) この点については前掲【注1】拙稿参照。
- (6) 村田栄一『戦後教育論』社会評論社、1970、岡村達雄『教育労働論』明治図書、1976
- (7) 芝田の関知する問題はもっぱら「不生産的労働」(「本源」における)の限界を知ることによって教育労働者の「全面発達のための闘争」を自覚すること、であり、他方で「教育と再生産過程」の問題も課題とはされているものの、あくまでもそれは“近未来への政策学”として考えられているにすぎない。(芝田・前掲【注2】書、P. 65-66)
- (8) マルクス・前掲【注3】書、P. 77-85参照。
- (9) この点については前掲【注1】拙稿を参照されたい。
- (10) 並木「国民教育論批判再考」(『インパクション』47号)、1987
- (11) 同上P. 54、引用者要約。
- (12) 同上P. 64-65
- (13) そこではマルクスの『資本論』の「労働過程」論が援用されるが(芝田・前掲書P. 6-8)、マルクスのテキストに話を限ったとしても問題はよりトータルにとらえかえされるべきこと、前述の通りである。なお、『資本論』の「労働過程」論自体の問題性については、小論の末尾でふれる。
- (14) 真木・前掲【注4】書、P. 131-132、引用者要約。ただし下線部分は原文のまま。
- (15) マルクス『資本論』(『マルクス=エンゲルス全集』23a巻、大月書店)P. 234
- (16) 今村仁司『労働のオントロジー』勁草書房、1981、第4章、同『理性と権力』勁草書房、1990、第4-5章。
- (17) 小倉『搾取される身体性——労働神話からの離脱』青弓社、1990、P. 176-185

# ＝情報化社会の教育(5)＝



嘱託研究員 林 洋一

## 1. はじめに

長い人類の歴史の中で、コンピュータという機械が誕生してからの期間は、半世紀に満たない。さらに、マイクロコンピュータの形となって一般の人が比較的簡単に使えるようになってからはさらに短く約20年、ビジネスにも使える実用的な16ビットパソコン（アメリカのIBM-PC、日本のNEC-PC9801）が誕生してからは10年もたっていない。さらに、現在のわが国のパソコンの主流となっているNEC-PC9800シリーズも、無印98と呼ばれる誕生したばかりの機械は、ハードウェア的には現在のゲーム用パソコンにも劣るものであった。

つまり、コンピュータは多くの人にとって、主観的には突然人類の前に出現し、あっという間に必要不可欠な「道具」になってしまったのである。個人の趣味あるいは美学としてコンピュータや文書作成用の日本語ワープロを嫌い、またその使用にともなう問題点を指摘することは自由である。だが、学校教育の中にパソコンが入ってくるのが目前にせまっている現在、もはやコンピュータから目をそらすのは現実的ではない。いかに有効に利用すべきかを、またコンピュータ使用にともなう問題を生じさせないようにするかを真剣に検討しなければならない段階にきているのである。

筆者が神奈川県教育文化研究所の所報で最初にコンピュータを取り上げた頃（林、1986）には、子どもたちの間でファミコンが大ブームとなっており、その問題点が様々な立場から論議されていた時期であった。それから数年を経た今日、一時期のブームは過ぎたとはいえ、ゲーム用コンピュータは完全に子どもたちの生活の中に定着している。そして、ドラゴンクエストⅣなどの人気ソフトが出れば、それを求めて徹夜の行列ができるという状況に変わりはない。

もっとも、教育の場にコンピュータが導入されつつあるといっても、その数はまだまだ限られている。1校あたり数台では、教育に使われるよりも教師の教材作成や事務処理などに使われることの方が多いであろう。しかしながら、個人的にワープロ専用機を持つ教師は明らかに増加しており、その人たちが学校でのパソコンの利用にも関心を持つことは大いに考えられることである。ここでは、最近のパソコンの潮流になりつつあるブック型パソコンの問題を含めて、教育とコンピュータとの関係を検討することにしたい。

## 2. パソコンの新しい潮流

林（1989）では、ゲーム用パソコンと家庭用パソコンの新しい流れについて述べたが、最近ビジネス用パソコンにも大きな変化が生じつつある。それは、ブック型あるいはノート型と呼ばれる可搬性の高いパソコンが販売されるようになったことである。これらは、

今までの据置型のデスクトップタイプや一応は可搬性のあるラップトップタイプとは違った新しい可能性をパソコンにもたらすものと期待されている。(以下、このようなパソコンをノート型と総称する。)

ノート型パソコンというカテゴリを作り上げたのは、1989年6月に発売された東芝の「ダイナブック (J3100SS)」という製品である。「ダイナブック」という名称は、アメリカのアラン・ケイが1970年代に唱えた理想的な個人用コンピュータの名称を冠したものであり、製品としてのダイナブックがその名称にふさわしいものか否かという論議も内外で沸き起こった。

ダイナブックは、世界的に広く普及している IBM 社の IBM-PC と互換性のある機種であり、英語版の基本ソフト (英語 MS-DOS) を用いれば豊富な IBM 用のソフトが使用できるというのが売りものである。そして、なによりもバックライト付き液晶ディスプレイがついて本体の重量が2.7kgという画期的な軽量を実現し、また実用的な16ビットパソコンとしてはじめて20万円を切った価格で登場した。

その直前に、わが国の標準的なパソコンである PC-9800 シリーズと互換性のある PC286-エグゼクティブ (セイコーエプソン製) というノート型パソコンが発売されていたが、価格が50万円近かったこともあり、ほとんど普及はしなかった。東芝のダイナブックは、それよりはやや大型であったが、普及価格ながら IBM 用のソフトが使えること、さらには PC-9800 シリーズのソフトと文書レベルでの互換性はあることなどから、たちまちベストセラーとなった。そして、安い本体価格にふさわしいような低価格ソフトの発売をも引き起こしたのである。

その後、国内最大手の NEC は対抗機種の PC9801N (通称98ノート) を発売し、またセイコーエプソンはやや遅れて1990年2月に PC286 ノート F を発売した。これらに対抗して、東芝はハードディスクを内蔵したダイナブックを発売し、現在激しい競争が行なわれている。そして、NEC やエプソンも近い将来、現行機種の改良型を発売することは明かである。

現時点では、ノート型あるいはブック型パソコンの共通の仕様は、重量約2.5-2.7kg、モノクロの液晶ディスプレイを持ち、1メガバイト・タイプの3.5インチフロッピーディスクを備えている。そして、CPUはインテル80C86ないしはその改良型である V30 ( $\mu$ PD70116) となっている。つまり、現在でもオフィスで使われている NEC・PC-9801VM シリーズとほぼ同等の処理能力を持ち、十分実用になるパソコンなのである。

だが、外部のカラーディスプレイは使用できず、またフロッピーディスクも1台しか備えていない。それでは使いにくいので、ハード RAM ないしは RAM ドライブと呼ばれるバッテリーバックアップ RAM (電源を落としても消えないメモリー) を装備している。そして、あたかももう1台のフロッピーディスクがあるかのように使用できるというものである。

このような仕様は現時点でのものであり、いずれは既に発売されている東芝のスーパーダイナブック (J3100-GS021) と同様にハードディスクを備え、またより能力の高いインテル80C286相当のCPUを採用し、かつ2kgを切るような重さの機種が各社から登場するであろう。そして、必要があれば外部のカラーディスプレイが使えるようなインターフェイスを装備するものと思われる。換言すれば、現在のオフィスでよく使われている PC9801-VX ないしは RX の仕様でノート型パソコンが登場するのである。さらに、数年

後には32ビットタイプのノート型が登場していると思われる。現在のノート型でも5年前のデスクトップ型と同様な能力を備えているのだから、決して無理な予測ではないと思われる。

それでは、ノート型パソコンは何をわれわれにもたらすのだろうか。現在のノート型の能力は2世代前のデスクトップ型と同程度であり、それほど高度なものではない。だが、短時間(1.5-3時間程度)とはいえ電池駆動が可能になり、アウトドアでの使用ができるようになったのは大きな進歩である。また、3kgを切る軽量なので、その気になれば常時携帯して使用することができる。(現実には持ち運ぶとなると、やや苦しい大きさと重さであるが。)さらに、価格が比較的安いので、今までパソコンに関心を持ちながらも購入できなかった人が個人的に使用できるようになる。したがって、パーソナル・ワープロからノート型パソコンへの移行も生じるであろう。また、企業も本当の意味でパーソナル・ユース、つまり一人一台という形で使うことができるようになるのである。

このようなノート型パソコンは、学校教育の現場にも変革をもたらす可能性がある。安価で設置スペースが少なく済み、また電力消費量も少ないからである。そして、教室間を持ち歩くのも簡単であり、女性でも容易に持ち運べるというメリットがある。問題があるとすれば、デスクトップ型と異なり、落下による破損の危険性が非常に大きいことぐらいであろう。

ただし、現在の標準的なハードウェア構成、つまりモノクロ液晶ディスプレイを採用しインテル8086に準じるCPUを用いていたのでは、教室で使うのはやや苦しい。子どもたちは、やはりきれいな色のついた表示を好むからである。カラー液晶付きのノート型が低価格で出現するのはしばらく先になりそうであるが、そうならなければ小・中学校の教室で使うのは無理ではないだろうか。

それよりも、教師が個人的に使う場合には、ノート型は大きな可能性があると思われる。職員室の狭い机上でも、比較的容易に使えるからである。その場合、ワープロソフトや表計算ソフト、あるいはデータベースなどの用途が考えられるが、プリンタを標準装備しているパーソナルワープロとの競合が考えられる。最近のワープロは、スケジュール管理や簡単な表計算・データベース機能を備え、しかも価格はノートパソコンよりもやや低く設定されているからである。

だが、主要な機能がROMに書き込まれているため機能の変更できないパーソナルワープロより、ノート型パソコンの方が柔軟性のある利用ができるので、教育用の機器としてはワープロよりパソコンの方が望ましいと思われる。また、デスクトップ型とのデータやソフトの共有や簡単にできるので、その面での利用価値も高いと思われる。CMI的な利用方法、つまりコンピュータを学級経営や事務処理などに使うのであれば、現時点でもノート型は非常に有用な道具になると思われる。

最後に、現在発売されているノート型パソコンの主要な仕様を表1に示す。

表1 現行ノートパソコンのスペック比較

	J-3100SS	J-3100SS02E	K-3100GS	PC-9801N	PC-286NOTE F
価格(円)	198,800	328,000	498,000	248,000	198,000
CPU	80C86 (10MHz)	80C86 (10MHz)	80C286 (12MHz)	V30 (10MHz)	V30 (5, 8, 10MHz)
標準メモリ	640K バイト	1 M バイト	1 M バイト	640K バイト	640K バイト
RAM	ハード RAM 896K バイト	増設最大 2 M バイト	増設最大 4 M バイト	RAM ドライブ 1.25M バイト	RAM ドライブカード RAM ボード
ROM バンドルソフト	ATOK 7	ATOK 7	—		MS-DOS2.11 FEP
液晶ディスプレイ	EL バックライト	EL バックライト	FL サイドライト	EL バックライト	反射型
FDD	3.5インチ×1	外付け3.5インチ	3.5インチ×1	3.5インチ×1	3.5インチ×1
HDD	—	2.5インチ20M バイト	2.5インチ20M バイト	—	—
モデム	内蔵可能	内蔵可能	内蔵可能	内蔵可能	内蔵可能
バッテリー稼働時間	2.5時間	2.0時間	1.5時間	1.5時間	3 時間
幅×高さ×奥行き(mm)	310×44×254	310×44×254	310×50×280	316×44×253	315×42×254
重量(kg)	2.7	2.8	3.6	2.7	2.5

(「ザ・コンピュータ」1990年5月号より引用)

## 2. 教育におけるコンピュータ利用の動向

学校教育の中でコンピュータを本格的に利用しようという動きは、1985年に始まる。それから現在にいたるまでの数年間で、学校における設置台数は急速に増加した。その間の事情を、加治(1990)は次のように述べている。

「平成2年度の文部省予算で、学校へのコンピュータ導入のための整備費補助予算50億円が決定しました。この50億円は、小学・中学および高校へ導入するパーソナルコンピュータの費用の3分の1の補助金となり、平成2年度以降に25万6千台が学校に導入されることになります。これによってこれまで導入されたものと合わせて、およそ40万台のコンピュータが学校に設置されることとなります。・・・現在のコンピュータ普及率は小学校21.0%(1校当り平均設置台数3.0台)、中学校44.8%(同4.3台)、普通高校95.6%(同13.6台)になっています。今回の補助は、平成6年度までに学校への普及率を100%とし、平均設置台数を小学校で6.5台、中学校・高校でそれぞれ16.7台にしようというのが目的です。」

このような急速なコンピュータ導入は、学習指導要領の改訂と密接に関連しているのは明かである。たとえば、中学校の技術家庭の「情報基礎」では、表2のような内容が示されている。そこで、この内容について検討してみたい。

表 2 情報基礎の内容

科 目	目 標	内 容	内 容 の 取 扱 い
技 術 家 庭	F 情報基礎 1 コンピュータの操作等を通して、その役割と機能について理解させ、情報を適切にご活用する基礎的な能力を養う。	2 (1) コンピュータの仕組みについて、次の事項を指導する。 ア コンピュータシステムの基本的な構成と各部の機能を知ること。 イ ソフトウェアの機能を知ること。 (2) コンピュータの基本操作と簡単なプログラムの作成について、次の事項を指導する。 ア コンピュータの基本操作ができること。 イ プログラムの機能を知り、簡単なプログラムの作成ができること。 (3) コンピュータの利用について、次の事項を指導する。 ア ソフトウェアを用いて、情報を活用することができること。 イ コンピュータの利用分野を知ること。 (4) 日常生活や産業の中で情報やコンピュータが果たしている役割と影響について考えさせる。	3 (1) 内容の(1)のアについては、入力、演算、制御、記憶及び出力を取り上げるものとする。  (2) 内容の(3)のアについては、日本語ワードプロセッサ、データベース、表計算、図形処理などのソフトウェアを取り上げ、情報の選択、整理、処理、表現などを行わせるものとする。

(中学校学習指導要領より引用)

情報基礎の目標は、コンピュータの操作を通してその役割と機能を理解し、情報を活用するための基礎的な能力を養うというものである。つまり、コンピュータリテラシーの基礎的な教育が、その目標なのである。この目標自体は、基本的には適切なものであろう。コンピュータは知的にその原理を理解しようとしてもなかなか難しいのであるが、具体的な操作を行なうと比較的容易に把握することができる。換言すれば、子どもたちが自由に触れることができ、またそれを楽しむことができれば、学習は極めて効率的になるのである。

だが、現実にはコンピュータの機能は、ハードウェアに依存する部分が多い。したがって、現在のハードウェアの制約のもとにコンピュータリテラシーの学習を行なうことになり、どのようなハードウェアを用いるかが極めて重要になる。林(1988)で述べた基本ソフトとして国産のトロン(TRON)を用いる「教育用パソコン」は、その後の情勢の変化からそのままの形で登場することはなくなった。だが、最近の情報によれば、松下電器は1990年7月より16ビットパソコンにBトロンOS(ビジネス用トロン)を登載した教育用パソコンを販売することを明らかにしている。('国内・海外ニュース'、マイコン1990年5月号)つまり、今秋に予定されているコンピュータ教育開発センター(CEC)の教育用パソコンの標準仕様に向けて、Bトロンパソコンを市販するのである。

松下電器の開発したパソコンは、同社のパナコムM530シリーズをもとにしていて、BトロンOSの他にも日本語MS-DOSや日本語OS-2などに対応できるマルチOS仕様となっている。つまり、どのようなOSが主流になったとしてもそれなりに対応できるというものであり、教育用パソコンの未来が明確に見通せない現在のような混沌とした状況下では、予想されるどのOSにも対応可能という当然といえば当然の方法をとっている。

現在のわが国の16ビット・32ビットパソコンでは、OSとしてはMS-DOSが中心になっている。MS-DOSを使うことそれ自体はそれほど難しいわけではないし、パソコンの日本語ワープロソフトや表計算ソフトなどのアプリケーション・ソフトのユーザーでも、MS-DOSの知識がほとんどない人も少なくない。だが、パソコンでも少し凝った使い方をすれば、どうしてもMS-DOSの知識がないとうまく対処できない場合がある。MS-DOSのようなコマンド入力によるよりは、アメリカのアップル社のパソコン「マッキントッシュ」シリーズのようなグラフィックスを利用した方が一般の人にはわかりやすいので教育用にはグラフィック・ユーザー・インターフェイスを用いたものがよいと思われる。

最終的にどのようなOSが普及するのかはまだわからないが、教育現場で実際に使用する教師の声が、適切に反映するような形でOSの普及が必要なことだけは事実である。子どもたちが、また指導する教師たちが使いやすいような形でコンピュータが普及することが何よりも必要なのである。

### 3. コンピュータ的思考の落とし穴

コンピュータは知的な機械であるが、現在の子どもたちにとってその機能が最もよく発揮されるのは思考型のコンピュータ・ゲームをする場合であろう。コンピュータ・ゲームには様々な種類があるし、また時代とともにいろいろな要素がつけ加えられてきた。たとえば、初期のコンピュータ・ゲームには「ブロックくずし」や「スペース・インベーダー」などの反射神経を要するものや、アメリカでヒットした一種のシミュレーション・ゲームである「スタートレック」などがあった。「スペース・インベーダー」は現在のレベルからみれば極めて単純なゲームであるが、筆者らの年代の者は、喫茶店などでかなり熱中した経験を持っている人が少なくないのではないだろうか。現在でもファミコン版があり、筆者も所持しているが、プレイすると当時の様子がなつかしく思い出されるものである。

最近のファミコン・ゲームのヒット作は「ドラゴンクエスト」シリーズであるが、筆者はそれもIからIVまで全てプレイしてみた。これらのゲームの面白さは、かつての単純なゲームの比ではない。子どもにとっても、またゲーム好きの大人にとっても、やりだすとやめられないような魅力をコンピュータ・ゲームは持っているのである。

だが、面白さの陰の危険性を指摘する意見もある。たとえば、海老原（1989）もその一人である。彼は、コンピュータが処理する「情報」の問題点について、プレイヤーが大名になり天下を統一することを目的としたシミュレーションゲームに熱中する子どもの新聞記事をもとにしながら、次のように述べている。

「ここで展開されているのは、まずゲーム、虚構の現実で、要素を組み替えて目的を達成する。そこには自らの主体的判断があり、おしきせの中の遊びではたしかにない。頭を使う難しさもある。しかし、このゲームをとおして、どこまで歴史の真実に迫りえているか、はなはだ疑問である。

まず、「いくさ」をする、とするが、戦争の実態は生命の奪い合い、殺し合いである。この悲惨さが、いかばかりか、ゲームからは伝わってこない。また、年貢率を上げたり下げたり、事もなげに言うが、農民の立場に立って考えたらどんな事態がおこってくるのか。ゲームで得る知識としては、有効的に獲得できるが、それはあくまでも虚構の中の現実で

あって、歴史的な事実にはせまりえない。」

シュミレーション・ゲームは、戦争の本質ないしは歴史的事実に迫るものではなく、単なる戦争ゲームである。領国を取ったり取られたりするという意味では、かつての「軍人将棋」にも類している。また、それはある意味ではビジネス・ゲームに近いものであり、このようなゲームに熱中した子どもや大人がヒューマニズムを忘れるわけではない。だが、ゲームに習熟してくると、敵の本拠地を崩すという目的のために味方の軍隊をみすみす全滅させたり、効率よく年貢を取り立てるために庶民に金をばらまいたりするようになる。そして、「勝利」のためには何物をも省みず、敵国に忍者を送り込んで敵将を暗殺したり、国を混乱させる破壊活動を行なうようになる。もちろん、このような謀略はなかなか成功しないが、それがまた面白いところなのである。(筆者も、自分のゲーム経験上、それをよく承知している。)

だが、このようなことはコンピュータ・ゲーム以外でもみられることである。たとえば、野球でも「勝つ」ためには様々な作戦を練る。その中には、当然心理作戦もあり、相手の弱いところをつくのは勝利への常道である。個人の力のみが頼りのマラソンでも、勝利のためには駆引きが行なわれる。コンピュータ・ゲームもそれと同じことなのであり、取り立てて批判すべきこととは思えない。

しかしながら、海老原の指摘している次のように問題点は、十分考慮すべきことであろう。彼は、次のように述べている。

「コンピュータによって得られる情報は、データとしての情報、インフォメーションとしての情報、そして価値観をともしなわないナリッジとしての情報のレベルなのである。いってみれば、計測可能な、目に見える知識といってよい。そうした学力もたしかに存在する。

しかし、情報化社会の中で必要とされるのは、このレベルをこえた計測の可能でない、目にみえない学力にこそある。いわば知恵としての情報ともいってよい部分である。人間的感動をともしなう、ひととひととのふれあいのなかで、対話をともし、思考のつきあわせのなかで創造されてゆく知恵としての情報、さらにそうした知恵を、関係化し、行動する主体の中にインテリジェンスが形成される。インテリジェンスをもった人間を育てることが、学校教育の中で最重要課題となってきた。」

この場合の「計測可能でない能力」が何を示しているのかはややわかりにくいだが、次のような言葉はそれを補うものであろう。

「コンピュータは、定型的な情報処理ではすばらしい能力を発揮する。しかし、そのデータを解釈し、今後のあり方を推論することはできない。さらに将来を予測し、計画をたて、その実行を決断するのは人間である。・・・だから、コンピュータ等教育機器の活用をはかる一方、この人間の特有の知恵・知性を育てる教育が、学校の固有の基礎的任務となってくる。」

換言すれば、あくまでもコンピュータは人間が判断を下すための資料を提供するものであり、人間としての知恵を育てる教育が最も大切だということであろう。このような意見は、ある意味で極めて常識的なものであるが、それでも重要な意義を持っている。つまり、コンピュータはあくまでも人間の思考を拡大するための手段であり、それを使うこと自体が目的ではないということである。

学校教育で本格的にコンピュータを用いるようになるのは、いましばらく先のことであ



ろう。生徒一人について毎時間1台のコンピュータを用いて授業を行なうことは、たとえ大型コンピュータの端末等を使用する形をとっても、とても不可能である。つまり、学校教育の中では、当分の間は本格的なC A Iが導入されることはないのである。また、仮にそうなったとしても、生徒と教師との人間的なふれあいの重要性は全く失われないどころか、ますます重要なものになっていくと思われる。

現時点では、コンピュータは論理的な判断の材料を提供してくれるだけである。もちろん論理判断の材料を提供することには重要な意味があるが、それだけでは人間としての本当の知性を形成することはできない。それと同様に、人間の心理でも簡単に数量的なデータ処理ができないものの方に、より価値があることを忘れてはならないように思われる。

#### 4. 学校教育にコンピュータは本当に必要なのか

現代社会は、コンピュータなくしては成り立たなくなっている。だが、そのことからただちに、学校教育にコンピュータが不可欠ということにはならない。学校として最低限必要なものは、あくまでも教師と生徒である。それは、発展途上国の学校や、第二次世界大戦直後のわが国の学校を思いだしてみればすぐにわかることである。つまり、学校教育にコンピュータが本当に必要かと問われれば、それは否である。コンピュータがなくても、教育は十分できるのである。

だが、教科書や教育機器があればそれは学校教育に役に立つものであると同様に、コンピュータもある意味ですぐれた教育機器になる可能性を持っている。しかし、そのためには教育用に適したハードウェアと優れた教育用ソフトウェアを揃えるだけではなく、教師自身がコンピュータという機械の長所と短所を的確に認識していることが必要なのである。どのようなものにも、功罪両面があるのと同様に、教育におけるコンピュータの利用にも利点と問題点がある。その利点を生かし問題点を少なくするのは、教室でそれを利用する教師である。「与えられた」コンピュータを、「マニュアル」に従って使用するだけでは教育のなかで十分に生かすことはできない。教師自身の創意や工夫が何よりも求められるのである。

そのためには、教師自身が自ら学ぶという姿勢が必要である。コンピュータは既存の機械とは異なり、様々な目的に使用できるという汎用性が売りものになっている。それだけに、マニュアルにある以外の使い方、既存の教育用ソフトを越えたことをこなす力を秘めている。だが、それを引き出すのはあくまでも使用する人間なのである。

もちろん、コンピュータはハードウェアの限界から自由ではなく、能力的にできないこともある。現在のコンピュータには、処理能力の不満や使いにくさも多々ある。だが、月並みな日本語ワープロソフトを用いたとしてもそれを教育に生かすことはできるはずであり、表やグラフを作るソフトを用いても子どもたちの自然や社会に対する認識を深めることはできるはずである。視覚化したり、簡単なシミュレーションを行なえば、現象をよりわかりやすく示すこともできる。

学校に導入されるコンピュータが子どもたちの成績管理や事務処理だけに使われたり、市販の教育用ソフトを走らせるだけで終わったとしたら、コンピュータを導入した意義は薄くなる。現在のコンピュータに対するリテラシーを育てるだけでも、面白くない。その

ようなりテラシーは、やがて陳腐化する。それよりも、考えることが楽しくなったり、様々な情報を自由に検索して自分なりに新しいことを発見したり、ときには知的なゲームを楽しんだりすることができれば、それはすばらしいことではないだろうか。少しでもこのような目標に近づくためには、教師の力が必要なのである。教育用コンピュータは、それを使用する優れた教師なくしては何の意味もないことを忘れてはならないであろう。

(白百合女子大学助教授)

## 引用文献

- 海老原治善 1989 情報化社会をきりひらく教育改革の構図 海老原治善他編 情報化社会と教育のアイデンティティ エイデル研究所
- 加治 信之 1990 パソコンと教育の現状を突く 月刊マイコン 1990年4月号
- 林 洋一 1986 情報化社会の教育(1) 神奈川県教育文化研究所所報
- 林 洋一 1988 情報化社会の教育(3) 神奈川県教育文化研究所所報
- 林 洋一 1989 情報化社会の教育(4) 神奈川県教育文化研究所所報

# 二 社会主義の激動と 教育のペレストロイカ二



研究評議員 田 中 正 司

## 1 東欧の激動と社会主義の激動

ベルリンの壁とチャウシェスク独裁体制の崩壊に象徴される昨年秋の東欧の激動は、まことにドラマティックで、私たちは図らずも社会主義世界を震撼<sup>かん</sup>させた歴史のドラマを見聞することとなった。それまで誰も予測していなかったことが次々と現実化し、わずか数週間のうちにソ連配下の東欧諸国における共産党支配が平和裡に崩壊していった1989年を後世の人は、1789年のフランス大革命とならぶ世界史の大転換の年として記憶することであろう。

しかし、最大の問題は、この革命が東欧のみのことではなく、ソヴィエト社会主義体制そのものの激動をも意味している点にある。現に、今年に入ってから、ソ連自体でも、ソヴィエト憲法第6条に規定されていた共産党の指導性を放棄して複数政党制を導入することを宣言し、大統領制に移行したばかりでなく、生産手段の私的所有をも全面的に承認するに至ったことは周知の事実である。これらの改革はいずれもこれまでの共産主義の概念では全く考えられなかったことで、それらが直ちに「共産主義の終焉」を意味するものでなくとも、共産主義の大転換であることは間違いない。

それでは、一体何故このような大転換が必要になったのであろうか。その原因には、国有化＝指令経済システムの破綻その他、さまざまな要因が考えられることはいうまでもない。それらの原因については、中途半端な言及は却って誤解をまねくだけなので、ここでは割愛する他ないが、ゴルバチョフの偉大さは、社会主義の歴史的発達段階の相違についての明確な認識に基づいて、より発達した社会主義国で人民全体の創造的エネルギーを爆発・満面開花させるためには所有と自由が不可欠であるとの視点から、「経済的土台から上部構造にいたる社会の建物全体の抜本的な建

て直しの必要」(89年11月26日付『プラウダ』論文「社会主義の理念と革命的ペレストロイカ」)を積極的に提唱し、これまで否定してきた形式的自由や人権その他のブルジョア的価値をも「全人類的価値」として大胆に承認した点にある。しかし、こうした既成概念や社会主義の常識にとらわれぬ抜本的改革・ペレストロイカが必要なのは、社会主義体制のみではない。社会主義に対して一見勝利したかにみえる資本主義社会も、実際には資本の論理では食い止めることのできない地球温暖化その他のエコロジーの問題を解決するためのペレストロイカの必要に当面しているのであるが、日本の教育体制も、同じように子供の生活環境が大きく破壊されつつある現実の下で、抜本的なペレストロイカの必要に直面しているといえるであろう。

## 2 人間本性と環境の関係

宮島肇先生の招請で教文研に出させてもらうようになってから丸6年、その間、月1回「生活指導委員会」で現場の先生方の生の声を聴き、一緒に勉強する機会をもてたことは、私にとっては何物にもかえがたい貴重な経験であった。私は教文研での活動を通して今の教育の実態に対する理解を私なりに深めることができたが、今の子供と学校教育の現状については、率直に言って可成り悲観的にならざるをえない。そうしたペシミスティックな見方に対しては、当然、いつの世でも大人は悲観的な見方をするもので、子供は大きくなれば何とかなるから別に心配する必要はないとの反論がなされることであろう。たしかに、18世紀のイギリスの思想家たちが社会認識のキ・ワードとしていた「人間本性とその環境」という概念を借用していえば、環境の変化に比例してファッションやムードは変わっても、人間本性は変わるものでない限り、大人がとりたてて余計な心配をすることはないということもできる。現に今も良い子や立派なすぐれた学生が一杯いることは、私たちが直接実感している通りであり、かりに学校では教育できなくても企業が何とか教育してくれるから、それほど大騒ぎすることはないという見方をすることもできるであろう。

しかし、現代の問題は、子供の人間本性そのものを奇型化する環境破壊が確実に進行している点にある。そうした奇型化のさまざまな徴候が今の子供のうちにみられることは、私の接触した限りのすべての現場の先生方の共通認識であるといっていよい。にもかかわらず、現場の教育関係者は、何が、なぜ問題なのか、いかにすればよいか、はっきり分らず、現場のさまざまな貴重な<経験>を十分には<理論>化できないままに、受験戦争の重圧に押し流されているのが実態であるようにみえる。

こうした現状を打開するため、多くのすぐれた教育学者たちが、それぞれの専門の角度から現状の分析・診断・理論化の努力を行っており、それらがそれぞれの形で有効性を発揮していることはいままでのない。しかし、そうした専門家の分析・診断は、それ自体としてはどんなに優れていても、専門化のいわば論理必然的帰結として部分的・技術的にならざるをえず、専門視点だけでは子供の生活全般にかかわる問題は必ずしも十分にはとらえきれないことは否定しがたい事実である。専門家のもう一つの難点は、実態をよく知り、現実<sup>じげん</sup>に密着しすぎる結果、現実の異常さが却って見えなくなる場合があるだけでなく、往々にしてタブーを当然の前提視してしまう傾向がみられる点である。

何物にもとらわれない素人の新鮮な眼が必要な理由はそこにある。しかし、素人の判断や意見は、逆に、常識に墮し、偏見にとらわれるおそれが多い。専門や常識にとらわれないより広い歴史的視点と社会科学的な眼が教育問題の考察にも必要ではないかと考えられる一つの根拠はここにある。

### 3 脱工業化社会の問題

現代は、これまでの産業社会と異なる脱工業化社会であるといわれる。いわゆるハイテク、スーパー・テクノロジーの超技術・情報化社会である。今日の私たちは、オートメ、コンピューター・システムの一般化の結果、数十年前までのすべての人類が営々として行ってきた額<sup>ひたい</sup>に汗する肉体労働(labour & industry)から解放され、高度技術の成果を思うままに享受することができる時代に入りつつある。私たちは、最近の若者のファッションや行動様式に象徴されているように、人類史上全く前例のない幸福な生活ができるようにな

っているのである。現代が「柔かな個人主義」とか「感性の時代」といわれる所以もそこにある。しかし、こうした脱工業化社会の現実が、子供の人間的成長にとって真に幸福な生活環境といえるかどうかは別の問題である。

有史以前の人類は、他の動物と同じように狩をしたり山菜を取って食べる狩猟生活から出発したのち、徐々に牧畜→農耕経済に移行してきたが、人類の知識が飛躍的に増大するようになったのは農耕段階になってからである。人類は、自然の大地との格闘・タックルの繰り返しを通して、農耕を中心とするさまざまな知識を修得し、いろいろな徳性を身につけていったのである。それが半世紀ほど前までの私たちの祖先の生活様式でもあったのであるが、農業剰余を利用した家内工業の発達とその産物の交換による商業関係の発達・一般化は、分業に基づくより高度の専門的知識の修得を可能にしたのであった。

これまでの人類は、このようにして自らの労働と自由なインダストリを通して成長してきたのであるが、今日の脱工業化社会ではオートメーション生産が一般化した結果、労働やインダストリは主要な価値の構成成分ではなくなり、人々は情報かサービスを売って生活するようになってきている。第1次産業と第2次産業の比率が激減し、代って対人サービス産業が全産業の過半数を越すようになってきているのが、その何よりの証左であるが、この脱工業化社会は、次のような問題を含むことが注意される要がある。

第一は、今日の高度情報化社会では、「情報」ないし「記号」とそれが指示する「観念」と、その元をなす「事物」との一体性が失われ、情報ないし記号だけが一人歩きする危険が大きい点である。今日の私たちは、膨大な情報をコンピューターの力を借りて自由に操作しているかに見えるが、実際にはコンピューターの指示に従って記号だけで考えているだけで、それらの記号や情報の指示する事物そのものは知らないだけでなく、それについての的確な観念すらもちえない場合が増えていることは否定しがたい事実である。そうした関係が、まだ一度も現物をみたこともない子供の成長過程で一般化すると、情報や記号の示す事物を具体的に観念することすらできない子供が増えるのは当然であるが、そうした人間は物事を自分の生活経験に即して理性的に考えることができなくなるため、感覚だけで感情的に反応するだけになるのも自然の成り行きであろう。今日の青少年の間に感覚だけで物事を判断し、集团的・ファッション的に行動する感覚主義的傾向が強まっていることの一つの背景はここにあるが、現在の知育偏重の学校教育と受験戦争は、こうした情報化社会の弊害を是正するどころか、それを大きく加速していることは明らかである。

第二の問題点は、今日の脱工業化社会では労働が価値をもたなくなり、情報と対人サービスが大きな価値をもつようになった結果、労働という形で外なる対象に働きかけることを通して自己に固有な何かを身につけることが少なくなり、逆に、感性だけで勝負したり、投機的なマネー・ゲームで一攫千金を狙う傾向が強くなるため、モラルが墮落する一方、人格がスポイルされる点である。資本主義社会では何らかの価値を生み出さねば生きてゆけないので、労働が価値をもたず、それに代る情報も持ち合わさぬとすれば、有害であろうとなかろうと、相手が喜びそうなお砂糖をふりかけてサービスを売る以外ない。それが資本主義社会の経済法則である以上、そうする人を非難することはできないが、小さいときから何でも与えられ、サービス産業の標的にされる砂糖漬けの生活を送っていたら、健全な人格形成が覚束無いのは当たり前である。猫も、野良のうちは逞しい生命力をもっているが、ペット化されて「猫大好き」ばかり食べていると、ネズミを取ることはおろか、魚

の骨すらかじれなくなってしまうが、人間も、小さいときから外敵の心配のない環境で甘いものばかり食べていたら、最近の子供にしばしばみられるように、動物として一人歩きするのに不可欠なものが身につかなくなる方が自然であろう。教育の課題は、こうした今日の脱工業化―サービス社会化の危険性を是正・矯正する点にある筈なのに、今日の教育にはその認識が欠けているだけでなく、反対に、子供をよりスポイルすることに力を貸しているのではないであろうか。

こうした今日の情報化・サービス経済化のベースをなしているハイテク、スーパー・テクノロジーの一層の発達、技術的には今よりさらに輝かしい21世紀を約束していることはいうまでもない。しかし、ハイテク化は同時に人間生活そのもののさらなる人工化＝非自然化をももたらすことも明らかである。技術の本来の課題は、こうした技術の本性としての人工化＝非自然化が自然破壊にならぬように自然と人工のバランスを図る点にあることはいうまでもないが、高度技術＝人工化社会の問題点は、超技術社会ではすべてが人工化されるため、自然の自動バランス力が作動しなくなり、自然治癒力が弱まらざるをえない点にある。原子エネルギーや生命医学その他の先端技術部門で技術の倫理的抑制がますます要請される所以はそこにあるが、その必要は先端技術分野のみの問題ではない。

子供の世界においても、社会環境の人工化の結果、子供たちの動物的生命力や自然治癒力が大幅に減退していることは今日ですでに周知の事実であるが、教育界ではこうした現代の超技術＝人工化社会の難点を矯正する措置がとられていないだけでなく、こうした人工環境の中で子供を純粋培養することが受験戦争に勝利する道であると考えられているかのようである。情報だけに敏感に反応する、ひ弱で身勝手な、自分のことしか考えられない、そのくせ自分では生きられない子供が増えていることの一つの背景はそこにあるといえよう。

#### 4 現代の教育問題

私たちの共通の問題が、こうした今日の脱工業化過程の生み出す子供の成長環境破壊を防止する点にあることは明らかである。人間の成長・発達のための教育の基本は、知識ではなく、自然との対話と他の動物や人間との交通を通しての生活実践にある。アリエスの『子供の誕生』の示すように、近代以前の子供たちは、対自然関係行為としての〈労働〉と仲間(大人)との〈交通〉を通して、さまざまな知識を学び、忍耐力や思いやりその他のさまざまな徳性を身につけ、感受性を養成し、体力を鍛練してきたのであった。そうした事物との接触・他人との交通という実践ぬきには、いかなる知識も身についたものとならず、たんなる知識の集積は砂上の楼閣にすぎないことは明らかである。未開人の健康さ、文明の没落の根拠はここにある。山村留学の試みが、今日の脱工業化社会状況の中で大きく注目されているのもそのためであるが、こうした人間形成の基本に反して、幼児期から人工的社会環境の下で情報のみの知育偏重教育を受け、受験産業の情報操作に踊らされていたら、人間的感性や徳性を欠いた、他人のことは考えない、そのくせコンピューター・システムが故障して機械体系が停止したら、一日も一人では生きられないあわれな動物の集団になり、ちょっとしたことで破局に当面せざるをえなくなってしまうのも、理の当然である。その徴候はすでに今の子供の動態のうちにさまざまな形で表現されているといえるで

あろう。

現代の教育の最大問題は、脱工業化の現実の中で、その必然性を認めつつ、そうした必然の中でいかにして人間の成長・発達の原点である自然と動物性を回復・維持するかにある。それぬきには、地球環境破壊よりさらに恐ろしい＜精神の砂漠化＞に当面せざるをえないことになるであろう。

## 5 教育におけるペレストロイカの課題

教育のペレストロイカが必要なのは、こうした脱工業社会化の現実の下で、社会環境の人工化・非自然化が子供の成長に及ぼす悪影響を防止・是正するのが教育の課題であるのに、それに対する有効な手が打たれていないだけでなく、今の教育は逆にそれを助長・加速するシステムになっている点にある。戦後の教育体制を支えてきた教育原理そのものの大胆な見直しが求められる一つの理由はそこにある。

戦後の教育は、戦時中の軍国主義教育の反省・批判から出発して、民主主義原理に立脚する自由な教育を原理・理念としてきた。その理念が根本的に正しいことは、ジョン・ロックやアダム・スミスを中心にした西欧近代思想の研究を生涯の主題としている私には、自明の大前提である。文部省の天皇制国家論的教育思想に対抗するためにも、それを堅持しなければならないことはいうまでもない。しかし、戦後の民主教育は、その反面、戦争中の軍国主義教育や文部省の道徳教育に対する反動として、倫理（道徳）・宗教・シツケ・集团的鍛練・愛国心等を多分にタブー視し、“民主主義と自由と自発性”を無条件的に絶対視してきた嫌いがある。とりわけ、倫理と集团的鍛練は、私的所有がこれまで共産主義世界では「諸悪の根源」として、その意義・必要についてふれることがタブー視されていたのと同様にタブー視されていたといえよう。その逆の傾向として、“自由と自発性”を判断力もロクにない小さいうちから絶対視して、子供の自由（我儘）を無条件に認め、是認・追従する風潮が強いことは否定しがたい事実である。それが、戦後の家族における父権の没落＝教育における権威の原理の後退、それと対応する母性原理の衰退と照応して、野放しに子供の自由を認めるのが民主的であるかのごとき錯覚すら一般化しているように思われる。

しかし、教育（人間の形成）とは、無限の可塑性を秘めながらも、それ自体はいまだ混沌たるカオスにすぎない素材に“型”を与え、きびしく鍛えることを通じて、逆に型にはまらないそれぞれの個性を引き出すと共に、同じ人間としての他人に対する自制心を身につけさせることに他ならない。それには、幼児期における家庭内でのシツケと共に、幼少年期におけるそれぞれの発達段階に即した集团的鍛練が必要不可欠である。プラトン以来、多くの思想家が、体育や音楽を人間の心身の鍛練・情操涵養に不可欠な手段として推奨してきた所以もそこにある。しかるに、戦後の教育では自由が絶対視され、集団訓練はタブー視されるようになったため、トレーニングは本人が自発的に希望する場合にだけ行われることになり、野放しの自由と一部クラブ内での軍隊的シゴキとが両極的に併存する形になっている。トレーニングは強制してはならないが、自発的に入ってきた者については、どんなにシゴこうと自由ということのようである。しかし、やるかやらぬかは全く自由で、やりたくない子供は気儘にさせておくのが教育だろうか。子供の条件を無視した強制が許

されないのはいうまでもないが、子供が強く逞しく育つように、それぞれの発達段階に即してマラソンやマスゲームなどの集団的訓練を学校教育の一環として組織的に行うことにより、すべての青少年の心身の鍛練のための積極的方策を構ずることは、＜教育＞の義務であり、今日の脱工業化社会ではとくに必要なことではないだろうか。

民主主義と自由は、神への責任と個人の自立と規律を前提している。それが西欧民主主義の根本原理をなすものであった。今日の社会主義の挫折の一つの原因は、こうした民主主義の根本精神が定着していなかった点にあるといわれているが、われわれも本来の民主主義とは似て非なる自由化教育によって、人工化社会の欠陥を是正すべき教育の使命を放棄しているのではないであろうか。

近代の西欧思想は、個人の自立と責任を前提した上で、そうした人間相互間の相互尊重をモラルの基本としているが、こうした市民社会倫理を教え、たえず相手の立場も考えて、自主規制する相互尊重の精神が身につくように小さいときから指導することも、教育の不可欠の課題である。この市民社会倫理は、他人にしてほしくないことは人にもするなかれというキリスト教倫理に立脚する相互尊重を唯一の原理とするもので、特定個人を神格化する思想とは対極をなすものであるが、倫理教育や集団訓練は一つ間違えると天皇制的国家主義に利用され、自民党の反動路線に組みこまれかねないとの恐れから、戦後の教育関係者は、これらをタブー視し、倫理教育を放棄し、一切の強制に反対してきた嫌いがある。しかし、そのおそれがあるということで一切何もしないのは、体制側の云い分を正当化することになるだけでなく、脱工業化の現実の中でひきおこされる青少年の精神の荒廃・奇型化を矯正すべき教育者の使命を自己放棄することになるのではないであろうか。

今日の青少年が、電車の中などで隣人の動きに全く反応せず、無機物的になっているのは、たえず外敵を警戒しながら同胞をかばい合って生きる動物的自然性の減退のためであるが、それをカバーすべき倫理教育の欠如のせいでもあろう。戦後教育は、こうした人間教育の根本を放棄し、子供と友達になり、子供の云い分を聞いてやるのが良い教師であるかのごとき錯覚に陥っているが、真の愛情・教育とは、子供を甘やかしたり、how to を教えることではなく、子供を人工化されぬ自然環境の中でそれぞれの発達段階に即して鍛えてゆくことを通して、子供たちが自力で生きてゆく力をつけさせることに他ならない。

現実の共産主義は、ゴルバチョフが前掲のプラウダ論文の中で指摘しているように、マルクスの理想とは逆に、マルクスが『経済学・哲学手稿』の中で批判した「粗野で悪平等主義的な兵営共産主義」に陥ってしまったために破局を迎えたが、日本の教育も、粗野で無制約的な自由と民主主義を「民主主義」と取りちがえ、それに代わるものを何も提出しないままに、脱工業化の嵐の中で、受験戦争の大波に洗われるままに受験産業の軍門に膝を屈したままにいるとき、人工環境の中で自然治癒力を失った子供たちはどうやってゆくのであろうか。

教育のペレストロイカは、こうした教育の現況を直視し、そのよってきたところを歴史的・社会科学的にとらえ、その是正・改革のためになすべきこと、なしうることを慣習やタブーにとらわれずに、自由に自らの人格的責任において行うことから出発するのではないであろうか。

(神奈川大学教授)

※この主題については、詳しくは拙稿「社会主義の激動の社会思想史的考察」『神奈川大学評論』第8号（7月刊）をご参照いただければ幸いである。



# 二 社会科の理念で生活科を二

—— “遊び” を正面にすえた教育を ——

研究評議員 市川 博



## I、社会科は「解体」していない

参議院文教委員会の付帯決議の意義

社会科は、周知のように、このたびの教育課程の改訂で、人間でいえば、上体部分に当たる高校社会科は地歴、公民科に、下体部分の低学年社会科は理科と共に生活科へと変質させられてしまった。身体の上と下をもぎ取られて、今や胴体だけになってしまったわけだが、胴体は人間でいえば中枢部分に当たる。そこは、個人をトータルに支える“こころ”（魂）の所在地であり、酸素・栄養を供給する源泉でもある心臓と、それらを準備する肺や消化器管などがあり、人間の生命活動を支え、発展させる中核の部分である。そこを拠点として、アミーバーのように新しい触手を出して発展していく芽（可能性）が十分に残されているのである。

その証拠として、次のような事実はわれわれに大きな勇気と展望を与えてくれる。

教育の骨幹にかかわる教科の構成の変更が、国会の審議を経ぬまま文部省によって行政ペースで（しかも中曽根・高石文部次官との密約などの疑惑を残して）決定されてしまったが、高校の地歴、公民科の新設にともなって、社会科関係の教員免許法の改正案を昨年末に国会に上程された際に、文部省の政策をチェック、阻止できる機会があった。

少なくとも、保革逆転した参議院では、社会科の分化を認めぬ議決をすることができたはずだった。参議院文教委員会は、12月初旬から、地歴、公民科の新設に伴う免許法改正案の審議に入り、12日に参考人の意見聴取が行われた。法案に賛成する立場から木村尚三郎（東大）、梶原康史（武庫川女子大）氏が陳述し、白井嘉一（福島大）氏と筆者が反対意見を述べ、筆者も微力を尽くした。だが、自民党はもとより、野党のはずの公明・民社党も賛成にまわったため、14日の文教委員会でついに地歴、公民科の新設を追認させることになってしまった。

このことは誠に残念だったが、この議決がなされた際、

「政府は、教育職員の免許と高等学校教育の重要性にかんがみ、次の事項について、特段の配慮をすべきである。

一 社会科を『地理歴史』『公民』に再編するに当たっては、知識偏重の教育に陥ることなく、戦後の社会科教育の理念を尊重するとともに、国際理解と国際強調の精神の育成について配慮すること。

（二、三は省略）

」（傍点は筆者）

という『付帯決議』が自民党も含めて全会一致で、承認されたことをぜひ知っていただき

たい。社会科は、2教科に分けられてしまったが、統合教科としての社会科の理念を尊重して教育に当たるべきことが、与野党一致で確認され、その席上で、石橋文部大臣も「その趣旨に十分留意をいたしまして対処してまいりたいと存じます。」と確約したのである。これは、自民党としても、高校の社会科の分割については遺憾だったと反省したからではあるまいか。わたしは、この付帯決議の重みは非常に大きいと考える。社会科の理念を守る足場が残されたのである。

## II、社会科の理念で生活科を

低学年社会科は廃止されたが、生活科についても、「戦後の社会科教育の理念」を貫き、発展させる可能性をもつ力強い足がかりを得ている。

文部省が発行した生活科の『指導書』、とりわけ第5章の「生活科の学習指導」の項では、「戦後の社会科教育の理念」と同じことが述べられているのである。そこでは学習指導に当たって、次のことが特に強調されている。

- ① 子どもの興味・関心の尊重—彼らがもっとも素直にかかわっていただけることのできる活動としての“遊び”
- ② 身近な社会や自然をできるだけ一体的に取り上げた学習活動
- ③ 具体的な活動や体験
- ④ 習慣や技能をそれ自体として単独に学習させることなく、あくまでも児童が活動したり、体験したりする過程で獲得

これらは教育の基本的理念でもあり、「戦後の社会科教育の理念」そのものに他ならない。そして、以上の4点を含み込みながら凌駕するものを、われわれは特に、戦後40年の社会科の実践・研究の中で蓄積してきている。それは、次の6点に要約されよう。

第一に、子どもらの切実な興味・関心にあくまでも即す。個々の子どもが興味・関心をよせたところに、その子の成長の芽があることを認め、その興味・関心の追究を保証（助長）していくことに徹する。

第二に、教科の枠を取り払って、その追究を保証する。興味・関心をいだけるためには、対象をしっかりとらえることがまず必要だが、そのためにも、またそこで生じた興味・関心を追究していくためにも、教科の枠を越えた視点・知識・技術を必要とすることがある。教科の枠にとらわれず、子どもの必要に応じて柔軟に対応していくことを授業の原則とする。

上述のことは、子どもの問題意識と、その追究に応じてカリキュラムの統合をはかっていくということでもある。生活科では、合科的な扱いを強調するが、どの教科も必要があれば、教科の枠を外して指導していかないと、授業として成立していかないのである。最初から合科、総合の授業を考えるとむずかしくなる。対象をしっかりとらえたり、疑問などを追究しようとすれば、一つの教科の枠に止まらないで、他の教科の知識や技術が必要となってくるのが自然の姿である。2年生の社会科に“ものを育てるひと”の単元があるが、稲がどう成育していくかについての理科的な学習をしっかりとっていか

いと、ひとがそれにどうかかわっているのかが見えてこないのである。稲やトマトが成長していく様子をしっかりとらえさせようとすると、文字や絵によって表現（記録）する活動が組まれたりする。これは国語、図工、そして理科の学習でもある。

第三に、身体をフルに使った、子どもらの自由な活動・体験を奨励・保障していく。失敗を恐れず、試行錯誤しながら、自己の在り方を点検しつつ、自己の興味・関心をしぶとく追究していく活動を保障していく。

第四に、「行」を「知」と切り離さず、あくまでも両者の結合をはかっていく。今どういう状況にあり、どういう在り方（行為）が望ましいのか、なぜそれが望ましいのかを、主体性をもった知的な分析・判断にもとづいて、行為できる人間の育成をはかっていく。

第五に、個々の子どもの育ちの様子を綿密にフォローしていく。子どもは本当に興味・関心に正対しているのか（一遊びに熱中しているのだろうか）、一見遊んでいるように見える活動の中で、どのような力が育っているのか、いま、この子にとって必要なもの（知識・技術など）は何か、教師の指導が適切だったかなどなどを凝視つづけていく。

第六に、人間としてトータルに成長させる一環として、教科の教育を位置づける。

新学習指導要領の移行措置がいよいよ始まって、生活科をどのように進めていったらいいかわからないという声をしばしば耳にする。しかし、迷うことはないのである。上記のことをしっかり心に止めて、確信を持って社会科の理念で、生活科を進めていけばよいのである。

今は、ある意味では戦後初期の社会科発足時と似通った状態にある。もちろん、希望に燃えて新生日本をめざした戦争直後のものと、今日の復古調のニュアンスが強い生活科のものとは、カリキュラム上の位置づけ、少ない配当時間数、厳しい管理体制による実践上の統制などの面で著しい違いはある。しかし、子どもの生活に即した教育、特に遊びを重視しようとしている点で、また、新しい教科の具体的なねらい・内容・方法・評価などについて具体像を描けないでとまどっている教師が少なくないという点で、今は当時と同じような状態にある。

教科が新設されることになるのは40年ぶりのことである。何事によらず、初めてのことは、具体的展望がつかめずとまどうものである。だが、新しいものを、まったく新しい材料、道具、方法で生み出すことは極めてむずかしいことである。先生方の中には、新しい教科だから、新しい理念、方法で、と考えておられる方も多い。そのようにむずかしく考えるから、教科の構想がわからないのであり、授業が目茶苦茶になってしまうのである。われわれは、戦後40年の間に、生活科の『指導書』等で述べられている以上のものを、社会科の理論的・実践的研究によって積み重ねてきた大きな蓄積がある。まず、その精神、手法に即して教科の構想を立て、実践していき、その上で必要な改善を図っていくことが堅実な道だと考える。

これまでの社会科は（他教科も同様であるが）ややもすれば、初期社会科、つまり教育の本来の理念を忘れ、知育偏重になってきた。それを改善するための、また、学習指導要領で規定されているような生活科の内容上の問題点などを換骨奪胎するための足がかりが、生活科で子どもの興味・関心に即す一遊びを重視しているところに残されている。

それは、遊びの中に基本的に学習のエネルギーがあり、成長の源泉があり、前述した社

会科の要素が、(たとえば教科の枠を越えて問題＜興味・関心＞の追究など)、凝縮していると考えからである。文部省の施策は、それを具体化させる条件を欠いているために、それは、現実には“建て前”で終わる恐れがあるが、その“建て前”を拠点にして、教育を本来の姿に回復していく可能性を見い出すことができる。厳しい制約下にあつて、在るべき授業を求めて進めていくことは、今日、ますます困難になってきている。しかし、それを跳ね除け、教育本来の道に戻すその遊びを教師が活かしきれるかどうか、生活科の存続だけではなく、教育の革新の可能性がかかっていると考え。

### III、子ども本来の遊びと、“やらせ”の遊び

教育(学習)は、学校のように、目的、計画的、組織的営みによって行われるものではない。教育(学習)しようという目的意識も、計画も、またそれらの遂行のための組織(協力関係)がなくとも、人間形成がはかられている場があるのである。つまり、教育(学習)以外のことをめざして営まれる行為によっても、人間形成が図られているのである。

その典型的なものが“遊び”である。子どもは、自己の成長をめざして遊んでいるわけではないが、その過程で人間として生きていく力を多く獲得していつている。教師も、一般論としては子どもの成長の原点として、その“遊び”の意義を認める。しかし、多くの場合、実際には、その常識を横に置いといて、別個に教育を考えようとしてまいいか。

わが国でもすでに明治30年代の初めに樋口勘次郎が『統合主義新教授法』(1899年刊)で提唱して以来、遊びの教育的意義が重視されてきている。だが、そこで、留意すべきは、子ども自身のものであるべき遊びが、“やらせ”になってまいいかということである。教師がねらう一定のものを習得させるための“手段”として、遊びが利用されてきてまいいか。子どもが最も素直にかかわっていける活動一遊びをそのまま保障していく(一そのこと自体を目的にしていく)ことそのものが、学習の主体者としての回復を図り、成長に寄与していくことになるのであり、その意味では、“遊び”は、教育の目的でもあり、(結果として)手段ともなっているのである。たとえ、子どもの好きな遊びであっても、他者の意図で、ペースで引き摺り回されるような“やらせ”では、子どもの真の成長を図ることは不可能である。

では、“やらせ”の遊びではない、子ども本来の遊びとは、具体的にはどういうものなのであろうか。“遊び”の定義については、ホイジンガーをはじめとして多様なものがあるが、上記の視点から自分なりに整理して述べてみよう。

#### a、楽しむ

遊びを楽しむ、遊ぶことそのものが目的である。

幼かった時の思い出に、道路を挟んで対立した子どもらに泥の団子をぶつけようとして、仲間と一生懸命につくったものの、その団子づくりの方に夢中になってしまつて、いざできあがつたときには、双方とも投げる意欲をなくしていたという思い出がある。つくった団子がむだになったことが少しも苦にならない。みんなで団子を苦労してせっせとつくつて楽しかったということだけで充実感を得て満足するというのが遊びである。

“楽しい”ということは、“苦痛がない”と言うことではない。炎天下で野球をすることは、決して楽なことではない。しかし、好きなことをしている過程で味わう苦しみそのものに快楽を感じるというのが、遊びの神髄ではなからうか。

#### **b、熱 中**

自分自身の興味・関心に正対し、それを追究しているプロセス、その“いま”を楽しむ。前述の炎天下の野球の例も然りであるが、嫌いなことだと、「お腹が痛い」「眠い」などと逃れようとするのに、好きなものに熱中すると、痛さ、眠気を忘れて打ち込むことができる。ちょっとした傷でも不安になり痛がる神経質な子でも、鉄棒するのが好きになり熱中すると、手にできた豆の皮がむけても、なお、手に砂をつけて鉄棒に挑んでいく意欲を示す。これは、精神が高揚し、ものごとに積極的に取り組むことによって生み出されてくる強さである。

#### **c、想像（創造）とリアリティー**

子どもは、想像力を働かせて、自分の架空の世界をおもいきり広げて遊ぶこともあるが、大人から見ると、子どもたちは、単なる架空のお遊びをしているように見える（“ごっこ”などがその典型である）ものでも、彼らは、彼らなりにリアリティーをもって、共通の世界をつくり（一約束をつくり）活動しているのである。

“おままごと”をしているようすをみると、夫役の男の子が自分の家のようすを思い浮かべて振る舞う。だが、妻役の女の子もやはり自己の体験にもとづいてイメージして、「うちでは、お父さんはそんなことをしない」と抗議し、自分のイメージに合った行動を男の子にとらせようとして、対立することがある。彼らは、彼らなりにそれぞれリアリティーをもって真剣にかかわっているのである。

単なる遊びであっても、子どもらは自分たちなりにリアリティーをもってかかわっているものであり、子どもらは、自分でつくったルールは、互いにきちっと遵守するよう要求しあう。石けり、陣取り遊びで、ろうせきで地面の上に書かれた線を、ちょっとでも踏み外すと負けとなるルールの厳しさは、彼らなりのリアリティーをもって想像（創造）した『約束社会』で真剣に遊んで（行為して）いるのである。そこには、彼らなりの厳しい現実ーリアリティーがある。

#### **d、工夫、創造性**

子どもたちは、自分の興味・関心のあることを追究しているとき、目的実現のために頭、身体全体をフルにつかって、思いがけないような大きな創造力を発揮して、工夫・努力し、また、そのこと自体を楽しんでいるのである。

#### **e、スリル、冒険、背伸び**

子どもはみな、成長したいと願っている。夢をふくらませて、日常性を脱却して背伸びして、自己に挑戦し、新しい世界に遊びたいのである。そこには、確かに危険を伴うが、子どもらは、高い木に登ったり、自転車を早く走らせたり、自分一人で遠出したりして冒険し、スリルを楽しみ、自己に挑戦する遊びをしているのである。

#### f、はみ出し、発展

教師は、秩序正しく遊ばせようとするが、遊びに、はみ出しはつきものである。子どもが自己の興味・関心に正対し、熱中し、イメージを膨ませ、創造性を発揮しながら工夫し、自己に挑戦し、彼らなりに楽しく遊ぼうとすればするほど、子どもらのペースで、方法で活動し、遊びを発展させていくことになる。子どもの立場からすれば、はみ出るところかそれなりの必然性のある発展として位置づけられべきものなのであり、はみ出るといってええは、教師の定めた路線から考察したものにはすぎない。

#### g、競争、共存

動物の子どもも然りであるが、子どもは本来群れをなして遊ぶものだ。子どもは、母親から徐々に独立しながら、子ども同士の群れ（遊び仲間）の中で競いながら遊び、社会性を身につけていく。

その競い合いは、決して敵対的な関係ではない。そこに子どもの本来の遊びの世界がある。今は一世帯の子ども数が少なくなってあまり見られなくなったが、昭和30年代以前までは、みそっかす（幼児）たちも遊びの仲間に入れて、面倒をみながら遊んだものだ。

「子どもの遊び集団というのは、福祉国家なのである」（佐藤浩 「失われた『遊び』や『労働』」＜1987年8月1日付『朝日新聞』＞）。

兄弟姉妹はよく喧嘩をするが、すぐ和解してしこりが残ることはない。それは、仲がいいからおもいきり自分を出し、競い合った壮快さから生まれてくるものだ。兄弟姉妹のように、場合によってはそれ以上に強く関係を結び、競い合いながら、助け合い、共存の感情を深めていくのが遊び仲間なのである。

近頃の子どもは、同一の場所で遊んでいても、互いにかかわることが少なく個々人は別々の遊びをしていることが多いし（ファミコン遊びが典型）、身体をぶつけ合って遊ぶことも少なくなったが、以前の子どもたちは、仲間の尻に頭を突っ込んで長馬をつくって遊んだり、相撲をとったりして、仲間の体温、体臭を肌に感じながら、仲間としての連帯の感情を豊かにしていった。

### IV、動物の子どもの遊び

一人遊びも意義がないわけではないが、集団で遊ぶことも大切だ。社会人になったときに必要な基本的なものは、小さい遊び集団の中に入っている。その原型を動物の子ども同士の遊びに見ることができる。上野動物園園長の中川志郎氏は、そのことについて次のような興味深い例を引いて説明している（『げ・ん・き』5号 ＜エイデル研究所 1988年8月刊＞）。

トラやライオンなど肉食獣の場合、生後3ヵ月を過ぎると、母子間の遊びから子ども間の遊びへと発展する。カクレンボもその一つである。一頭の子どもが、草むらに身をひそめ、他の一頭が近づいてくると、身を潜めた方が、距離を測るようにして、にじり寄り、狙いを定め、突然ジャンプしてアタックする。二頭はゴロゴロと転がりながら、相手を押さえ、咬みつこうとする。

しかし、ケンカに発展することはまずない。親は近くでじっと見守っていて、もしケン

カになれば仲裁に入るが、それがほとんどないのは、子ども同士、その力を加減することを知っているからである。この遊びの中では、あの鋭い牙も爪もほとんど実際の使われ方をしていず、いわゆる“生咬”の状態で行われているからである。

この牙や爪のコントロールは、母親との交流の中で学習されるらしい。子どもたちが母親から乳を吸うとき、最初のうちは乳房に爪を立てたり、乳歯で乳首を咬んだりする。その度に母親からしたたかなおしおき（首筋を咬む）を受け、次第に牙や爪をコントロールする仕方を覚えていくようである。トラやライオンのような猛獣にとって、自らの武器を加減することを身につけておくことは、遊びの展開にとって欠くことのできないことである。

遊びが遊びであるためには、力が同等の者が互いにその武器をコントロールしつつ相手になることが不可欠である。トラやライオンが、一回のお産で3～5頭の子どもを産むのも、彼らが一緒に育ち、一緒に遊びながら、身体を鍛え生活の手段を学んでいくことができるという点で好都合である。

この子ども同士の仲間遊びの時期を過ぎると、母親と共に狩に出かけ、本物の獲物を相手に狩の訓練に入っていく。この遊びのプロセスを経験せずに育った人口飼育の猛獣たちは、野生に戻されても、自らの力で狩をすることができず、ついには餓死の運命をたどるという。

チンパンジーの子どもが、母親の制止をきかずに勝手な行動をしようとしたとき、母親が子どもをさっと掴まえて、鋭い目つきで子を睨んでから、胸にしっかりと抱き込んだ状況をTVで見て感動したことがあったが、子どもは、3才ぐらいになると、いわゆる“子守り行動”を行なう。普通は、自分の妹や弟の世話をするが、それがいないときには、他の母親から借りて子守りをするということだ。おぶったり、手を引いたり、共遊びをしたり、内容はなかなか多彩とのことである。

今日、人間の母親が育児ノイローゼになったり、母子関係がうまくいかず子どもに精神的な障害が生じるケースが増えてきているが、チンパンジーの子育てから学ぶべきものが大きいと思われる。

## V、遊びの教育的機能

動物の子どもたちにとって、遊びは将に、後の生活を左右する重要なポイントになっているが、どれも遊びの一環として行われていることに注目したい。

今日、わが国においても、子どもが遊ぶ機会、場所、相手が狭く限られ少なくなっていることの問題点が指摘されてきているが、なんら抜本的な解決策がとられていない。もっぱら受験学力の向上に関心が向けられ、強靱な生命力・生活力を欠いた人間を育成しているのが現状である。

なお、幼児期や家庭の教育の在り方として、上記に示した“遊び”を保障していく必要性が強調されているが、学校教育においても遊びの理念・機能を積極的に取り入れていく必要があるのではなかろうか。

もちろん、子どもを、ただ遊ばせればよいということではない。人間として、社会生活をしていく基本的要素が遊びにあることをしっかりととらえ、それを学校生活の中に活かしていくということである。

では、遊びのその基本的要素はどこにあるのだろうか。すでに断片的に触れた点もあるが、自己実現・問題解決力との関係から整理してみよう。

第一に、遊びは、自己の興味・関心に正対していく営みであり、自己実現の原点（基礎）である。

自己実現とは、初めから自己が明確になっていて、それを拡充・深化させていくというものではない。自己の存在の基底にあるもの（自己が充実し、意義のある在り方として感得し、それを実現していくことを楽しんでいけるもの）を試行錯誤しながら探り発展させていくことである。その原点は将に、遊びにあるのではなかろうか。おもいっきり遊びに親しんでいく（のめり込んでいく）中で、生涯にわたって親しんでいける生きがいのあるものを探り、見つけ、実現していく意欲が培われてくるのである。

自己を発見するにも、的確な問題解決をはかるにも、広く柔らかな視野と問題意識が必要である。何ごとに対しても好奇心を持ち、それを追究していくことを楽しむことのできることによって、その基礎が培われてくるのである。

第二に、ものごとを追及し実現していく原点の一つは、集中（熱中）力である。興味・関心のあるものに、自分を賭け、あくまでも食らえついでいく意欲、勇気、執拗さは、問題解決力の源泉であり、自己実現していく場合にも不可欠である。

第三に、自己実現・問題解決をはかっていく場合に必要なのは、的確な自己認識、状況認識とそれにもとづく的確な判断力、創造力である。

遊びを楽しむために心・身体をおもいっきり使って得た豊かな体験・知識、判断力、創造力が、その基礎となる。

第四に、自己実現、問題解決をはかっていく場合、的確な自己・状況認識、それにもとづく方策、仮説におもいきって賭けていく勇気、失敗した（はみ出した）場合の事態収拾力が必要とされる。その力は将に、遊びの中で冒険、背伸びしスリルを味わいながら培われてくるものではあるまいか。

第五に、自己実現も、問題解決も自分一人が孤立してできるとは限らない。その多くは、集団の力の結集によって始めて可能となるのである。

現在の教育は、受験に役立つ力を重視し、学習意欲も損ない、仲間とは孤立し、敵対する関係を助長しつつある。

集団（遊び仲間）の中で競い合いながら、心身を鍛え、共存の意識を高めながら社会生活に必要な知識、技術、規範、行動力を身につけていくことは教育の原点として重要である。民主的な社会の建設、科学の発展にとっても不可欠である。

子どもの興味・関心に即して（または掘り起こして）、子どもらは遊びを楽しむ。そして、その遊びが結果として自己実現・問題解決の力を培っていくような教育の在り方を、模索していこうではないか。

その具体像や指導の手立てを紙数の関係で割愛せざるを得なかった。そのことについては、南足柄市岩原小学校の夏苺弘子氏の実践「バスごっこで遊ぼう」（『たのしい生活科』創刊号、エイデル研究所、1990年5月号）をぜひ御覧いただきたい。これは、全単元をごっこを中心にして展開し、子どもらにおもいっきりバスごっこを楽しませることをめざした意欲的な実践である。子どもらがバスごっこに熱中し楽しむことが、子どもらを、遊び



仲間を大きく豊かに成長させるものであること、その具体相とその育成のための手だてを具体的にご理解いただけるものと確信する。

「戦後の社会科教育の理念」を踏まえ、“遊び”を中核に据えた生活科で今後追究していくべきの一つのモデルを提示してくれていると考える。本稿の実践編として、ぜひ合わせ御覧いただきたい。

(横浜国立大学教授)

# ＝いま、子育ては どうなっているか＝

研究評議員 宮島 郁子



## はじめに

子どもたちの内面に、目には見えない変容がすすんでいるのではないかという声をよく耳にするようになった。

次の時代をになう子どもたちが、どんな人間に成長しつつあるかを知るためには、いまだどんなふうに育てられているかが大きな問題であろう。

そんな関心を出発点にして、保母・医師・保健婦・カウンセラーなど、子どもの生育に直接かかわる職域のかたがたの証言から子どもたちと親たちの「いま」をさぐってみた。

## 精子銀行願望

ひとことでいえば、いまはただふつうに子どもを生んで育てる時代ではなく、妊娠・出産の段階で早くもいかにして優秀な子を生み育てるかの闘いが開始されているといえよう。

たとえば、天才児を育てる胎教のテープというのがあって、1セット10数万円で売られているというが、それを買って胎教をやらないと「IQの高い子ができないんじゃないだろうか」と発想し、「買ってきただけ使い方がわからない」と電話相談してくるという。

「モーツァルトが胎教にいい」と宣伝されると、すぐに「その音楽を聴かなくちゃ」ということになる。

だが、「5分間聴いたモーツァルトより、じつは残りの23時間55分のほうがいかに大事かということについて、もっと本当に理解してほしいのだけど——」と、産婦人科の女医さんのため息は深かった。

親たちのそうした“優秀児願望”に拍車をかけ、そのあせりにつけこんで高額の商品を売りこむ胎教産業のやりくちにも驚かされるが、アメリカでは、ノーベル賞受賞者のような優秀な頭脳の持ち主の精液を冷凍保管し、体外授精の技術を使ってIQの高い女性に超エリート児を生ませようという時代だ。

日本ではまだ実現していないけれども、胎教ブームをつくりだし、せつないまでの“優秀児願望”をうみだしている日本の親たちの意識の底に、この精子銀行のエリートづくりと同じものが流れているのが感じられてならない。

## 100万円のお産

ちかごろ、妊娠という診断を受けたとたんに、「わたしラマーズ法で産みたい」という女性がふえたという。一般論でいうと、ラマーズ法は主体的ないいお産をするための一つの

方法であることは確かだという。

しかし、日本でいうラマーズ法は、その方法で産みさえすれば「いいお産だ」というふうになっているとか。夫立ち合いのお産にしても、「みんながいいお産だというから」という盲信のようなものがあるようだ。

ところが、1カ月検診にきたときは、あれほど熱心にやった夫立ち合いのラマーズ法は消えうせて、夫はすっかり“会社人間”に逆もどり、妻は育児を全部ひきうけてヨレヨレになっているという。

出産を通していったいなに見えてきたのか。子どもを産んだあとの二人の関係はどうか、小さい命に励まされつつ、あらためて社会に目を開き、生き方を選びとっていくというようすなどまったく見えてこないというのだ。

そのうえ、出産時にお金をかければかけるだけ、「いいお産」をしたような気になるらしい。神奈川県のある病院では、1回の出産に100万円以上とるところがあり、そこでは毎年産室内の壁紙をフランス製のもので貼りかえているという。胎児の超音波の像をビデオに撮り、それを記念品としてわたしたり、出産の瞬間の「オギャア」という声を録音してあげたり、大きなアルバムに助産婦さんがサインをしてわたしたり、まさに出産もひとつのイベントというわけだ。

こういうふうにイベント的な現象を積み重ねていくと、なんとなく「いいお産」をしたということになるのだろう。

### 落ちこぼれ恐怖症

「こうしてお金をかけ、命をかけて“いいお産”をしたということの延長線上には、自分の子だけよく育ていい幼稚園に入り、いい小学校に入学し、そしていい大学を出て人生のいいコースを歩く。そのスタートだ！って思ってるんじゃないですか。母乳のことひとつでも、いったん“よい子を育てるには母乳がいい”となると、みんないっせいにその方向へ向けて走り出す感じなんですから」と女医さんも語っていたが、偏差値に代表されるような一つの物差しの方向へ社会全体が母親たちを引きずっているためか、「こうあらねばならない」というパターンができすぎていて、そこから落ちこぼれるのは不安でしかたがないという傾向が強いようだ。

こうした“優秀な子”への願望は、なんでも早い方が優秀という思いこみにつながっていて、「早くおむつをとりたいたい、早く歩かせたい、早く文字をおぼえさせたい、なんでもほかの子より先へ先へと急がせたがるお母さんがふえましたねえ」という保母さんの声は、母親たちのあせりをよくあらわしている。

母乳で育てられなかったりすると、それだけで母親失格だと思ひこんでしまったり、頭をよくするためにとむりやり食べさせたりする例もみられ、そうした親のかかわり方は、子どもにさまざまな心身症状をひきおこしているという。

生後6カ月で円型脱毛症になった赤ちゃんや、あるいは拒食・過食など食行動異常と呼ばれる症状をみせる子どもたちの報告もあり、子どもたちの声にならない「助けて！」という叫びを聞く思いがした。

## 子どもがかわいくない

母親であれば、だれでも子どもがかわいいのはあたりまえ……というのは、もうむかし話になりつつあるのかもしれないと思わせるエピソードもたくさん聞かされ、私はあらためて驚かされた。

もともと「早く子育てを終えて、自己実現の道を見つけたい」という発想は、現代の女性なら当然起こってくる考えだろう。だが、いろんな証言を聞くと、そういった女性の自立とかかわっての子離れ願望とは異質のものらしい。

「子どもがかわいくないっていうお母さんがいるんです。子どもとどうやって遊んだらいいかわからない、子どもの目を見るのがイヤなんですって」と保母さんはいう。

日曜日に、子どものめんどうをどちらがみるかで、父親と母親が争うというのだ。

「夫が朝早く釣りにでかけてしまっただけで子どものめんどうをみないので、もう腹が立って腹が立って、2歳になる子を部屋にカギをかけて閉じ込め、私は美容院へ出かけました」などと、保護者会で平気で話すお母さんもいるのだそうだ。

しかし、お母さんたちは、じつによく育児書などを読んででは子育て情報を手に入れ、その情報・知識を基準にして自分の子どもを評価する。そして、わが子が標準値より劣っていたりすると、そんな子どもは欲しくないという切り捨て意識になりかねないのだという。私も、登校拒否の小学生をもつお母さんから、「あの子がいるおかげで、夫と私との仲までうまくいかなかった。あの子をしめ殺してしまいたいと思うときもあります」という非常につらいお手紙をもらい、大変ショックを受けたことがあったが、とにかく手っ取り早く育児書に書いてあるやり方でやってみて、現実にはわが子がそのとおりにならないと、もうどうしていいかわからなくてパニックを起してしまうらしい。

「自分の目でよくわが子の状態を見て、その子の状態に合ったやり方でやればいいのに○か×か、こういう場合はこうすればいいという正解を知りたい。それも、“何分間やればいいか”とか、“何グラムか”とか測定できる知識を知りたいですよ」と、保健婦さんもあきれ顔だった。

## 手塩にかけない工夫

いま、登校拒否が大きな社会問題となり、文部省の調査では、全国の小中学校におよそ42,000人の登校拒否児がいるとされている。

ある中学校の養護教諭の話では、「不登校の子がどんどんふえていて、いろんなタイプがありますが、どうも“生きよう”という意欲がなくなっているみたいで、体を動かすのも、子ども同士でつきあうのもしんどいからと、なんとなく家でごろごろしている傾向が強くなっているんです」とのことだった。

そういう子の家庭の問題として、毎日のごくあたりまえの人間らしい生活——朝、決まった時間に起きて食事をして——というふうなものが家庭から消えているのを感じるという。

朝食を作らない家庭が多くなったとも聞いたが、朝、保育園に行く途中、喫茶店のモーニングサービスのコーヒーとトーストをほおばらせるのもめずらしくないご時勢だとか。

「ちかごろのお母さんって、少しでも楽をしよう、楽をしようなんです。おむつを洗うのはイヤ、離乳食もビン詰めを買う。できるだけ手塩にかけない工夫をしますよ」とのことだ。

なるほどベビー用の紙おむつは年間8,000億円を超す売り上げとなり、ファミリー・レストランやハンバーガーショップなどの外食産業の総売上げは、とくに20兆6,000億円を超す巨大マーケットとなったという。

飽食時代だというのに、家庭での食生活はますます貧しいものとなり、なるべく手塩にかけない育て方がすすんでいるとすれば、そうした生活の空疎さと、いまの学校教育の管理主義的な抑圧が一体となって子どもの心をむしばんでいき、子どもたちは生きる意欲を失っていくのではないだろうか。

## 大学生の心模様

いままでとり上げてきたような「負」の側面が、凝縮した形で子どもの人間を形成していったとしたらどうなるか、それを占う指標として、ある大学の臨床心理学教授の話は示唆に富んでいた。

いま、大学生の相談で一番多いのが対人関係の悩みで、全体の40パーセントぐらいがその種の相談だという。人とつきあうことができなくて、自分の内面に閉じ込めてしまう自閉的なカプセル人間が多くなっているとのことだ。

人前で食事をするのができない、公衆トイレではどうしても排尿ができない、友だちからの長電話をことわる方法がわからない、男の子なのに、自分の顔がみにくいのではないかと気にする、人に見られている気がするからと電車にも乗れないと悩む、感情を表現したい欲求はあっても、具体的に言語化できない、相手を傷つけまいとエネルギーを使いあまり、ズルズルとキャッチセールスにひっかかって大金をとられるなど、とにかく、私としては「えっ？」といたくなることばかりだった。

他人とのコミュニケーションをとることが苦痛で、ちょっとしたトラブルの解決などコンピューターを通してやり、「コンピューターがこういっているんだから」と納得するという。

なま身の人間とのつきあいはなるべく避けたがるし、ケンカをすることもほとんどないという。ケンカをするほど深くかわることがないためと、ケンカをしたあとの関係を修復する自信がないという不安から、対立そのものを避けているのだとか。

教授は、学生たちが人間関係を結ぶ場を意識的につくりだす必要があると考え、キャンプなども計画してみたが、そういう場合は、いつもカンコ鳥が鳴いているありさまだとのことだった。

そのうえ、母子一体化というような状況があり、たとえば、自分が遅く帰るとお母さんが心配する。だから早く帰ってあげたい。でも、早く帰ると友人との関係が悪くなるからどうしたらいいかと相談にくるのだという。

「企業・会社と浮気している父親と、息子と結婚してしまったような母親像とがありますね。夫不在の家族のなかで、自然にそういう形ができあがってしまうのです」とのことであった。

## 時代がつくった人間像

いま子育てをしている親たちは、日本の高度経済成長の足どりといっしょに成長した世代であろう。

そのころ、「働け、働け」が美德となり、たしかなカネとモノとの手ごたえのなかで、父親は外へカネをかせぎにいく人、母親は家事育児を一手に引き受けさせられた人となり、子どもを競争に勝利させようとするあまり、過干渉的に子どもに傾斜を強めざるをえなかったのだった。

こうした時代を背景に、テスト体制に拍車がかかり、塾や進学教室がふえるとともに子どもたちの世界から遊びが消え、自然とのふれあいが消えていった。

かつては子どもが遊ぶといえば、友だちを求めて人の間で遊び、自然の中で遊ぶことだった。年齢差のある子どもたちが、一日中ドロコンになって自然の中を駆けまわったり、ときにはケンカをして泣かしたり泣かされたり。幼いときからの仲間遊びや、自然とのふれあいや労働などの現実体験を積みながら子どもたちは成長し、人間らしい豊かな感情を育んでいくものであったはず。

しかし、高度成長期以後の子どもたちは、そうした体験にもとぼしく、食事と一緒にとれないほどに家族がバラバラにされ、そのうえ地域の人間関係も希薄だとすれば、情感豊かに成熟していくはずもない。

それに加えて、母親が先回りして手出し口出ししてしまうような過干渉のなかでは、自分で考えることも身につかないタイプができ上がってしまうだろう。

しかも、この時代から教育内容までが変容し、経済成長に役立つ人材をつくり、その手足となって生産活動を支える労働者とは分けて養成するのが効果的だということになったのだ。そのため学校ではその振り分けを強めるため、学習そのもののプロセスよりも、結論としての〇か×かのテストのための瞬発力を習熟させるようになっていったのだった。

こうしたさまざまな変質が、子どもたちの人間形成に大きな影響を及ぼしたことはまちがいないだろう。

## 呪縛をふりほどいて

子どもたちと親たちの「いま」を、いろいろな証言をつなぎながら追ってきたわけだが、いま、子育て最前線にいる親たちが高度成長時代の落とし子第一世代だとすると、その持っている人間像をさらに凝縮して登場してきたのが、第二世代となる大学生や、子どもたちなのかもしれない。

はっきりいって、子育ての「負」の側面、心配な要素はすくなくない。

だが、そうだからといって、その育成のすべてを学校が安易に引き受け、一定の枠づけをしてしまえばよい、などというものでは決してないと思う。

子育てをする親たちの気になる兆候も、育てられている子どもたちの実像も、大きな時代の波のなかでもたらされた結果だという気がする。

人びとは、戦後の経済成長、競争社会のなかで、モノもカネもたくさんあるのはいいことだ、子どもは見栄えのする一流校へ入れたほうがいい、強いことはいいことだ、速くて

きれいな生活がいいと、そういう方向にばかりなだれをうって走りつづけてきた。

それを裏返せば、めんどくさいことや、汚いものはイヤ、他人のことなんかかまわない、のろまや弱いヤツは本人が悪い、ネクラやみにくい者は負けて、弱者や役に立たないものは切り捨てよう、ということだろう。

そういう問題が、家庭という場の、いちばん足場の弱い「子育て」という部分へのしわ寄せとしてまわってきているのではないか。

そして、この社会が抱えている歪みは、みごとに子どもの世界に反映し、いっそう拡大されて現われ、激しく子どもたちを打ちつづけているのだと思う。

こういう社会で子育てをすることは、きびしく重い現実を背負うこととなる。母親たちは、流動する状況に対応していくだけでせいっぱいなかもしれない。

子どもたちも、なんとか流されまいと足を踏んばっているのに、それが裏目に出たりしてつらい思いをしているのだろう。

子どもたちのさまざまな救命信号をしっかりと受けとめるためには、この社会や自分自身の骨身に浸みこんだ価値観をバツサリと切り捨て、一人ひとりをバラバラにしようとする呪縛をふりほどき、もっと人間らしく生きられるための地域社会をつくりあげなければならないときではないだろうか。

子育ては、いまきわどい分岐点にさしかかっている――。

(教育誌「ひと」編集委員)

# IV

## 今年度の歩み

### 1. 活動日誌

#### 1989年

- 4月8日 教育相談委員会
- 5月12日 所員会議
- 5月20日 教育相談委員会
- 6月10日 教育相談委員会
- 6月17日 第34回研究評議会
- 6月30～7月1日  
兵庫県民大学視察  
(兵庫教育文化研究所)
- 7月1日 教育相談委員会
- 7月3日 子どもの生活研究委員会
- 7月15日 地域文化の研究委員会
- 7月21日 子どもの生活研究委員会
- 7月25日 教育改革研究委員会
- 7月25～27日  
民研全国研究集会参加
- 8月5日 教育相談委員会
- 8月8日～11日  
全国教育研究習慣参加
- 9月2日 教育相談委員会
- 9月7日 地域文化の研究委員会
- 9月11日 教育改革研究委員会
- 9月18日 子どもの生活研究委員会
- 10月7日 教育相談委員会
- 10月9日 子どもの生活研究委員会
- 10月19日 地域文化の研究委員会
- 10月30日 教育改革研究委員会
- 11月11日 教育相談委員会
- 11月14日～15日  
神教組教育研究集会参加
- 11月20日 子どもの生活研究委員会
- 11月27日 教育改革研究委員会  
地域文化の研究委員会

- 12月2日 教育相談委員会
- 12月9日 教育相談学習交流会参加  
(日教組主催)
- 12月16日 第35回研究評議会

#### 1990年

- 1月13日 教育改革研究委員会
- 1月18日 地域文化の研究委員会
- 1月20日 教育相談委員会
- 1月22日 子どもの生活研究委員会
- 1月23日 所員会議
- 2月10日 教育相談委員会
- 2月13日 所員会議
- 2月19日 子どもの生活研究委員会
- 2月20日 教育改革検討委員会
- 2月22日 地域文化の研究委員会
- 3月3日 教育相談委員会、子どもの生活  
研究委員会、合同研究会
- 3月12日 所員会議
- 3月17日 第36回研究評議会
- 3月24日 10周年記念誌編集委員会



## 2. 教文研だよりの発行

### 1989年

- 4月 第38号 **企業戦略としての幼児教育**  
 ——ここまできている!! 幼児教育の実態——  
 研究評議員 宮島郁子
- 6月 第39号 **生活指導委員会報告**  
 ——家族、ないしは 家庭について——  
 神奈川大学教授 田中正司
- 7月 号 外 **新学習指導要領の総括的批判 I**  
 ——その基本的問題と教職員管理の  
 関連法に焦点をあてて——  
 中央大学教授 金原左門
- 11月 第40号 **学校の内と外を統一して教育を考える**  
 ——地域と教育の問題の周辺——  
 神奈川大学教授 黒沢惟昭

### 1990年

- 2月 第41号 **生活科って何?**  
 ——教子・文雄・研一の鼎談より——  
 嘱託研究員 斉藤 寛
- 2月 第42号 **共生型の社会環境づくりに向けて**  
 ——「ふれあい教育」運動を理解するために——  
 横浜国立大学教授 平出彦仁
- 3月 第43号 **中学校の現場から 教育の現実をうつ視座を求めて**  
 ——「荒れた学校」の立て直しに向けての取り組み——  
 横浜市立都田中学校教諭 宮部 一

### 3. フィルム・ライブラリーの貸出状況と所蔵フィルム

1989年度フィルム・ライブラリーの貸出状況

(1989.4～1990.3)

フィルム名	利用種別	利用回数	利用人員
1. 予言 (16mm) カラー約40分	小 中 高、社、他	1	353
2. ひろしま (16mm) 白黒約100分	小 中 高	1	401
3. 人間をかえせ (16mm) カラー約20分	小 中 高	3 1	734 200
4. 侵略 (8mm) 白黒60分	小 中 高		
5. ひろげよう平和憲法 (16mm) カラー約27分	小 中 高	1	353
6. もしもこの地球を愛するならば (16mm) カラー約26分	小 中 高	2 4 1	31 1,177 66
7. 歴史(核狂乱の時代) (16mm) カラー約116分	小 中 高		
8. トビウオぼうやは病気で (16mm) カラー約19分(アニメ)	小 中 高	9 2	2,902 632
9. ふるさとのだうぶつえん (16mm) カラー約24分	小 中 高	4 3	1,081 126
10. ヒロシマのうた (16mm) カラー約11分(アニメ)	小 中 高	3 2 1	1,097 305 30
11. あかあちゃんごめんね (16mm) カラー25分	小 中 高	11 1	3,942 40
12. 100ばんめのさる (16mm) カラー20分(アニメ)	小 中 高	6 1 1	1,517 762 304
13. 小田原にも空襲があった (カラスライド53コマ) 13分	小 中 高		
14. 太陽がおちた広島、長崎、第5福竜丸 (カラスライド83コマ)	小 中 高	2 1 1	240 304 30
15. ひろしまの絵 (カラスライド46コマ)	小 中 高	2	1,260
16. 核戦争 (16mm) カラー15(アニメ)	小 中 高	1 3 1	283 1,143 30
17. 東京・ヒロシマ子ども派遣団1986 (16mm) から31分	小 中 高	3 1	863 40
18. おかあさんの木 (16mm) カラー22分(アニメ)	小 中 高	13 1 2	3,944 30 30
19. なっちゃんの赤い手ぶくろ (16mm) カラー18分	小 中 高	10	3,474
20. 証言南京は今も忘れない(VHS) 30分	小 中 高	2 3 2	970 764 70
21. おこりじぞう (16mm) カラー27分(人形アニメ)	小 中 高	8 4	1,375 386
22. 象のハナ子 (16mm) カラー60分(人形アニメ)	小 中 高	7 1	966 323
23. やがて春 (VHF ビデオカラー105分)	小 中 高		
24. 未来への証言 (VHF ビデオカラー55分)	小 中 高		
25. 輝いて生きる (VHF ビデオカラー)	小 中 高	1	10
	計	127	32,924

## 神奈川県教育文化研究所所蔵フィルム一覧

◎貸し出し期間 利用日含め5日間 ◎費用 無料 ◎予約受付 045 (241) 3531

- |   |  |
|---|--|
| 1. 予言<br>(16mm) カラー約40分                   | ・戦略爆撃調査団による記録フィルムと今なお苦しむ被爆者の現状を交錯させ、核廃絶を訴える。         |
| 2. ひろしま<br>(16mm) 白黒約100分                 | ・広島のある高校の女学生たちが勤労働員の作業中に被爆。原爆の恐ろしさを描いた戦後初の劇映画。       |
| 3. 人間をかえせ<br>(16mm) カラー約20分               | ・10フィート運動で入手したフィルムと今なお苦しむ被爆者の訴えをおりませ、核問題の本質を問う。      |
| 4. 侵略<br>(8mm) 白黒約60分                     | ・日中戦争時に日本軍が中国で何をしたかを描いたドキュメンタリー。一人ひとりに戦争責任を問う。       |
| 5. ひろげよう平和憲法<br>(16mm) カラー約27分            | ・日本国憲法の成立とその背景を明らかにしながら、平和憲法の大切さについて考える。             |
| 6. もしこの地球を愛するならば<br>(16mm) カラー約26分        | ・もし、核保有国がそれを使用したら、私たちの地球は一体どうなるのか。今何をなすべきかを訴える。      |
| 7. 歴史(核狂乱の時代)<br>(16mm) カラー約116分          | ・第2次大戦から今日の核兵器配備の実態をえぐり、被爆者の苦しみ、怒り、そして行動を描く。         |
| 8. トビウオのぼうやは病気で<br>(16mm) カラー約19分(アニメ)    | ・1954年、太平洋のビキニ環礁でアメリカが水爆実験をしました。海の底の魚たちはどうだったのでしょうか。 |
| 9. ふるさとのどうぶつえん<br>(16mm) カラー約24分          | ・大阪天王寺動物園の現代の平和な様子を見ながら、40年ほど昔の戦争で多数の動物が殺された史実をふり返る。 |
| 10. ヒロシマのうた<br>(16mm) カラー約11分(アニメ)        | ・被爆した少女が8月6日に初めて自分の生い立ちを聞かされる。でも少女は力強く生きていく。         |
| 11. おかあちゃんごめんね<br>(16mm) カラー25分           | ・大空襲の日、体の弱い母は、この子たちだけは生きのびて欲しいと、炎の中に消えていく。           |
| 12. 100ばんめのサル<br>(16mm) カラー20分(アニメ)       | ・戦争や核の恐怖のない平和な暮らしをアニメと実写フィルムを折りませながら、世界に訴える。         |
| 13. 小田原にも空襲があった<br>(カラスライド53コマ) 13分       | ・小田原空襲の惨状を写真、絵、当時の体験者の話等で平和の尊さを訴える。(西湘地区教組製作)        |
| 14. 太陽がおちた広島、長崎、第5福龍丸<br>(カラスライド83コマ) 13分 | ・広島、長崎、第5福龍丸、三たびに及ぶ悲惨な被爆の実態を明らかにする。(都教組製作)           |
| 15. ひろしまの絵<br>(カラスライド46コマ) 約15分           | ・広島市民が描いた、生々しい原爆の絵。                                  |

16. 核戦争  
(16mm) カラー15分 (アニメ)
  17. 東京・ヒロシマ子ども派遣団1986  
(16mm) カラー31分
  18. おかあさんの木  
(16mm) カラー22分 (アニメ)
  19. なっちゃんの赤い手ぶくろ  
(16mm) カラー18分 (アニメ)
  20. 証言 南京は今も忘れない  
(VHS) 30分
  21. おこりじぞう  
(16mm) カラー27分 (人形アニメ)
  22. 象のハナ子  
(16mm) カラー60分 (人形アニメ)
  23. アパルトヘイトの子どもたち  
(16mm) カラー30分
  24. 樗太犬ゴン太・母をさがせ  
(16mm) カラー25分
  25. 日の丸と君が代  
(16mm, VHSビデオ) 共、カラー32分
  26. 沖縄戦・未来への証言  
(VHSビデオ) カラー55分
  27. やがて…春  
(VHSビデオ) カラー105分
  28. 核戦争後の地球 (第1部地球炎上)  
(VHSビデオ) カラー30分
  29. 核戦争後の地球 (第2部地球凍結)  
(VHSビデオ) カラー30分
  30. はだしのゲン  
(VHSビデオ) カラー90分
  31. はだしのゲンII  
(VHSビデオ) カラー90分
- ・核問題の本質を科学的に、論理的に、しかも子どもたちに分かりやすく説明し、平和の尊さを考える。
  - ・東京の小中学生、父母、教師、140名が被爆地ヒロシマの地へ……。そして、人間の心と命を見つめる。
  - ・7人の息子達が次々に戦場へ。お母さんはその度に息子の名前をつけたキリの木を植え、一人帰りを待つのがあった。しかし、悲しい知らせが……
  - ・戦争の悲惨さ、平和の尊さを心の奥深くに訴える。
  - ・日本軍による南京大虐殺の史実を豊富な資料で描く。
  - ・核兵器の恐ろしさと平和の尊さを訴えた人形アニメーション。
  - ・戦争中、「動物園の猛獣を殺せ」と軍隊から命令が下った。象を何とか助けようとする三吉少年。
  - ・南アのアパルトヘイト政策を人権の立場から世界に訴える。
  - ・戦争で離ればなれになった母と子が愛犬の活躍で感動的な再会をする。
  - ・日の丸・君が代の強制化が進む中でその問題点を再び明らかにする。
  - ・沖縄戦の実写フィルムと現在の沖縄の姿をモンタージュしてその実相を明らかにする。
  - ・いじめの問題を真正面から捉え、命の尊さ、心のやさしさを考えさせる。
  - ・全面核戦争から一週間後の地球の惨状を実写フィルムや特撮で描き、核の恐ろしさを訴える。
  - ・核戦争による死の灰が長期的に生態系に影響し、地球環境を破壊していく実態を描く。
  - ・ヒロシマでの原爆投下で目の前で父、姉、弟が家の下敷きになり死んでしまうが、母とゲンは力強く生きていく。
  - ・原爆孤児たちと明るく元気に生きるゲン。しかし、母の病気が悪化し、やがて悲しい別れが…。

#### 4. 1989年度神奈川県教育文化研究所各種名簿

##### 〈理事〉

繁里	昭	神奈川県教職員組合 執行委員長
金原	左門	中央大学教授 研究評議会議長
奥津	心一	神奈川県教育文化研究所 所長
牛窪	全浄	神奈川県教育公務員弘済会 理事長
関野	安夫	神奈川県民主教育政治連盟会長 県議会議員
松井	堅	神奈川県教育公務員弘済会事務局長
佐藤	一俊	神奈川県教職員組合 執行副委員長
福永	泰明	神奈川県教職員組合 執行副委員長
内田	信之	神奈川県教職員組合 書記長
久保田	旻	神奈川県教職員組合 書記次長
落合	英雄	神奈川県教職員組合 書記次長
高橋	慶吾	横浜市教職員組合 執行委員長
森山	定雄	川崎市教職員組合 執行委員長
矢納	直彦	三浦半島地区教職員組合執行委員長
栗原	佐晟	湘南教職員組合 執行委員長
江成	直士	湘北教職員組合 執行委員長
小室	修二	中地区教職員組合 執行委員長
森	豊樹	西湘地区教職員組合 執行委員長

##### 〈顧問〉

宮島	肇
江藤	正一
露木	喜一郎
小林	正

〈研究評議員〉

金 原 左 門	中央大学教授	政治学	研究評議会議長
平 出 彦 仁	横浜国立大学教授	心理学	
河 村 十寸穂	横浜国立大学教授	社会学	
田 中 正 司	神奈川大学教授	社会思想学	
滝 沢 正 樹	関東学院大学教授	社会心理学	
富 山 和 夫	関東学院大学教授	経済学	
市 川 博	横浜国立大学教授	教育学	
宮 島 喬	お茶の水女子大学教授	社会学	
黒 沢 惟 昭	神奈川大学教授	社会教育学	
大 槻 勲 子	婦人有権者同盟副会長		
清 水 芳 男	全川崎労働組合協議会事務局長		
松 井 堅	神奈川県教育公務員弘済会事務局長		
宮 島 郁 子	教育誌「ひと」編集委員		
小 林 正	神奈川県教職員組合 特別執行委員	参議院議員	
石 川 滋	神奈川県会議員		
阿 部 正	神奈川県会議員		
東 野 陽 子	神奈川県会議員		
三 宅 丈 夫	神奈川県会議員		
矢 羽 亮 一	横浜市教職員組合 教文部長		
迎 スミ子	川崎市教職員組合 教文部長		
飯 田 恵 一	三浦半島地区教職員組合 教文部長		
竹 村 雅 夫	湘南教職員組合 教文部長		
川 崎 高 一	湘北教職員組合 教文部長		
鈴 木 孝 善	中地区教職員組合 教文部長		
山 崎 幸 興	西湘地区教職員組合 教文部長		

〈各種研究委員会委員〉

◎印 座長

子どもの生活研究委員会

◎松 井 堅	神奈川県教育公務員弘済会事務局長
田 中 正 司	神奈川大学教授（社会思想）
市 川 博	横浜国立大学教授（教育学）
安 部 正	県会議員（地域教育研究家）
宮 島 郁 子	教育誌「ひと」編集委員
林 淑 江	藤沢市立浜見小学校教諭
森 本 俊 次	横須賀市立坂本中学校教諭
荒 木 良 治	相模原市立新宿小学校教諭
二 見 栄 一	小田原市立鴨宮中学校教諭
斉 木 孝 道	横浜市立もえぎ野中学校教諭
鈴 木 孝 善	中地区教組 教文部長
奥 津 心 一	教文研 所長
林 洋 一	教文研嘱託研究員
上 楽 修 三	教文研 事務局

教育相談委員会

平 出 彦 仁	横浜国立大学教授（心理学）
◎滝 沢 正 樹	関東学院大学教授（社会心理学）
市 川 博	横浜国立大学教授（教育学）
増 賀 光 一	県立湘南高校定時制 教諭
山 田 研 一	横須賀市立大矢部中学校教諭
遠 山 和 子	横浜市立共進中学校教諭
内 藤 宏 子	伊勢原市立竹園小学校教諭
奥 津 心 一	教文研 所長
林 洋 一	教文研嘱託研究員
上 楽 修 三	教文研 事務局

顧問

中 川 園 子	横浜市立大学病院小児精神神経科医師
---------	-------------------

## 教育改革研究委員会

◎富山和夫	関東学院大学教授（産業構造論）
黒沢惟昭	神奈川大学教授（社会教育学）
大槻勲子	婦人有権者同盟副会長
小林正	参議院議員
石川滋	県会議員（地域行政研究家）
竹村雅夫	湘南教組 教文担当
迎スミ子	川崎市教組 教文部長
小泉辰男	厚木市立玉川小学校教諭
奥津心一	教文研 所長
斉藤寛	教文研嘱託研究員
上楽修三	教文研 事務局

## 地域文化の研究委員会

◎河村十寸穂	横浜国立大学教授（社会学）
金原左門	中央大学教授（政治学）
宮島喬	お茶の水女子大学（社会学）
清水芳男	全労協 事務局長
東野陽子	県会議員（地域運動研究家）
三宅丈夫	県会議員（地域教育研究家）
大寄整子	横浜市立日野小学校教諭
毛利了輔	川崎市立西梶ヶ谷小学校教諭
飯田恵一	三浦半島地区教組教文部長
川崎高一	湘北教組 教文部長
山崎幸與	西湘地区教組 教文部長
奥津心一	教文研所長
斉藤寛	教文研嘱託研究員
上楽修三	教文研 事務局



#### 編集後記

今、世界は大きく変わろうとしている。

米ソによる軍縮への大きな動き、東西ドイツの統一へ向けての加速的な動き、東欧における民主化の動き、西欧の経済を中心としたボーダレスな動き等、それは21世紀に向けて、第2次世界大戦後の冷戦構造をみなおし、新たな世界秩序を生み出そうとするための胎動なのかもしれない。

こうした「平和共存・国際強調」の世界に向けての動きの中で、真の意味での「国際化」とは何か、という問題は、大変大きな意味をもって我々日本人にも問いかけられているのである。

今回の改訂学習指導要領の大きな柱のひとつに「文化と伝統の尊重と国際理解の推進」があるが、過去の戦争に対する責任の清算(特にアジアの国々に対して)を今だに曖昧にしたままの「国際理解」は世界に通用しないのではないだろうか。

ワイツゼッカー西ドイツ大統領の議会演説(1985年)や東ドイツ人民議会の声明(1990年)の誠意ある謝罪の言葉や態度を見るにつけ、今だにいわゆる「お言葉問題」に象徴されるように、アジアの国々に対する日本の外交姿勢は、過去の史実に対し曖昧であり、開き直ると、「土下座発言問題」までとびだす現状である。心の底では、本当の意味で清算しきっていないのである。

日本、そして日本人一人ひとりにとって 真の「国際化」とはなにか、今、世界から問われているのである。

(上楽)

#### 事務局スタッフ

所 長	奥 津 心 一
副 所 長	佐 藤 一 俊（神教組副委員長）
研究評議会議長	金 原 左 門（中央大学教授）
嘱 託 研 究 員	林 洋 一（白百合女子大学助教授）
嘱 託 研 究 員	斉 藤 寛（東洋大学講師）
研 究 員	上 楽 修 三（川崎市立犬蔵小学校教諭）

## 所 報 1990

1990年 5 月31日

神奈川県教育文化研究所  
T E L （045）241-3531

印刷：（有）神奈川教育企画  
T E L （045）253-3435

# 神奈川県教育文化研究所

〒220 横浜市西区藤棚町2-197(神奈川県教育会館内)

TEL 045 (241) 3531 (代表)